

編合用村農用女男

目細授教(方讀)科語國學小等高



校學小屬附校學範師縣良奈

T1A442

1

NS1M

7880224222

奈良教育大学附属図書館

書

教育学

良大

図

奈育

教授細目の編成について

坂内 賢治氏 寄贈

一、教授時数及び教材の配当（配当表参照）

第一學期及び第二學期は約十六週、第三學期は約十一週と見積り、一週の教授時数を四時と計算して、第一學期及び第二學期は各六十四時間、第三學期は四十四時間と致しました。之に各教材を配当したのであります。排列の順序は教科書通りの課目順とし、分量は大体教科書の編纂趣意を推察して、第一學期と第二學期には二十課目乃至二十三課目、第三學期にはその残りの十五課目といふことに致しました。次に各課々の教授時数はその教材の長短難易を考慮し、大体に於て最少限度と思はれる時間数を指示することに致しました。かうして、或一學期間の教授時数と、各課教授時数の總計との間に、若干の餘裕時間を捻出し、その餘裕時間を比較的多く見積つて置きましたが、そのわけは第一に、多少の餘裕を見て置きませぬと、實際に當つて時間の伸縮が不便になり、第二に、休日、祝祭日や、行事々故等の爲に多少の缺時が生ずるのを免れ得ない爲と、第三に、補充教材の取扱を必要とするやうな場合が出来た時、その時間を捻出する爲に、更に細目を切り盛りして見なければならぬといふやうな不便な点を無くしようと思つたからであります。餘裕時数は教材配当一覽表に、各週別にその時間数を指示してありますから、その週の餘裕時数を事故缺時に埋めるとか、或は或課の教授時数を増すとか、又は補充教材を取入れるとか、適當に、自由に鹽梅出來得るわけでありませぬ。又配當表にゴチャク活字で太く印刷してあるのは、その課が全三種類（男子用、女子用、農村用）の讀本に共通でない事を示してゐるので、従つてこれ等の異教材を判別するのに都合もよいし、又其の課が異教材である故に、夫々の讀本に種別的な色彩を持たせてゐるのだといふ事をも同時に示してゐるわけであります。

二、要旨

要旨の攝り方は、普通内容上並に形式上の兩方面から推究したものを記述することになつて居りますが、此の細目では、便宜上其の形式によらず、其の課の有する精神といふもの、即ち主想とでも言ふべきものを捉へて之を指示し、出來得る限りそれを簡明に摘記する事につとめ、形式上に亘る事項は此の項に指示してありませぬ。しかしこれはたゞ便宜上かうしたまででありまして、決して形式上の教授要旨を輕視するとか、或は度外視したといふわけではなく、それは次の文字、語句、文章といふ項に指示することとし、此處には、たゞ、結局すべては其處に落着くのだといふ窮極の所を捉へようと努力したまでであります。尙、「昭憲皇太后御歌」の課や、「俳句」の課の如きは、男女用に編纂された材料と農村用のそれとが、部分的に異なるだけで、その要旨（其他時間、準備、出所等も）の全く同一であるべきものは、その何れか一方にのみ指示し、他の一方には省略することに致しました。

三、出所

出所即ち出典でありますが、之は教科書に特別指示されたもの以外にも、其の原據となつたやうなもので、比較的判然としてゐるものは成るべく多く指示することに致しました。最初に原作者の名を知り、又、出典を知るといふことは、色々の点に於て便宜なことが多からうと思ひ、要旨の直後にそれを組入れたのであります。勿論教科書の文章は、すべて夫等出典の原文を改作したり、或は刪修を施したりしたものでばかりで、時によれば全く原據としてただ參考に供したに過ぎぬと思はれるやうなものもありませんから、決して教科書通りの文章が、その出典を見れば發見出來るといふのではなく、此所には單に、原作者の名と、出典の名とを指示したに過ぎないのであります。

四、文字

文字の項には、讀み方の注意すべきものを選んで列挙し、既授に屬するものであつても、復成語と

なつた爲に誤讀が多いと思はれたり、或はあいまいだらうと思はれるやうなものは、矢張り此所に擧げて置きました。無論新出文字や讀替文字も拾ひ上げたつもりであります。高等小學讀本には、新出及び讀替文字の特別な欄外指示がない爲に、或は重複があつたり脱漏があつたりしたかも知りませんが、之に一々嚴密な調査を加へて明確に指示することは簡單には出來かねますので、兎に角讀み方の注意すべきものといふ意味で掲げたのであります。その中、讀み方の二様あるもの、そして其の何れの讀み方によつても良いものは、ルビーで第一様の讀方を指示し、括弧に圍んで第二様の讀み方を指示して置くことにしました。これ等は實際取扱ひの際に適當に處理されてよいものと思つてゐます。

五、語句

語句も矢張り注意すべきものを選んで列挙したのであります。その意義の理解をして徹底させる爲には、その語句を語源的に解説したり、或は語法的に吟味したりする方が都合よいと思はれるやうなものは、次の文章といふ項の、語法といふ條に摘記することに致しました。そして「語句」といふこの項では主として單獨語と複成語を擧げることとし、場合によつては前後の文脈を適當に附加して、斷片的ではあるが一聯の短文形式にし、記述の分明をはかつたやうなものもあります。

六、文章

次に文章といふ項がありますが、こゝには文体や文の種類や、修辭語法といふやうな文章法的な要項を記載したのであります。しかし文体や文の種類などは文を一見すればすぐ判斷することであるし、又、修辭法や語法の如きでも、必ずしも修辭法的に語法的に取扱はねばならないといふものでもありませんから、かういふ項を設けて特記しなくてもよいかも知りませんが、ただ實際取扱の上は何等かの參考にはなり得るだらうと思つてこの項を設けたのであります。例へば、前述語句の所で申しましたやうに、この語句は單に難解の語句として現代語譯を施したのみでは十分でないから、語法的に取扱つて見てはどうかといふやうな場合を指示することが出來たり

又は文章の巧妙な技巧等を、單にただ味はふといふだけにせず、更に修辭的な、文章法的な或る取扱を工夫發見すべきだといふやうな事をも暗示することが出来るかと思ふのであります。尙、修辭上の諸要項を摘記するに當つて、漸層とか隱喩とか擬聲とか其他種々の修辭上の分類を一々附記すればよいのでありますが、餘り繁雜になるので大部分省略する事とし、語法に於ても亦同様に、別に文法上の分類を一々附記せず、省略した場合が多いから、これも適當に判斷を仰ぐことに致したいと思ひます。それから又……や——を使つてある箇所は本文を省略した所でありませうから、これも適宜本文を参照して戴きたいと思ひます。

七、構 想

構想は文章道に於て重大な一つの根柢をなすものだと思ひます。文字、語句、修辭語法等の吟味が、形式上の陶冶を任務とするものならば、構想の吟味は、文の内容上の陶冶を目的として取扱はれる重要な一つの地位を占めるものであると思ひ、特に一項目を設けたのであります。各段落の攝意にあたりましては、その攝意が單なる材料的な要約に陥るやうな事の無いやうに、その要約攝意をして、一文の想からかけ離れてしまふやうなことの無いやうに努力しましたが、教材の如何によつては不十分な點があるかも知れません。又或課に限つて例へば短歌や俳句や、或は諺語や、短詩形の小吟を集録してあるやうな課であつて、その一課が連續した一文の形を有たないやうなものは、構想といふ項に當嵌めることが出来ませんので、別に内容といふ項を設けて、其處で個々の内容や歌題等を指示することにしましたが、場合によつて全然省略してしまつたのもあります。

八、鑑賞、及び吟味

鑑賞、吟味といふ二つの項目を設けて、鑑賞すべき事柄と、吟味すべき要項を指示して見ました。この二つの項目を設けたのは、鑑賞といふ一つの項目に、總ての課を當嵌めることは到底不可能な事であつて、即ち總ての課が全部鑑賞といふ取扱で進んで行けるものではありませんので、さういふ課を無理に鑑賞といふ取扱に劃一するやうな事は出来ない故に、別に吟味といふ項目を設けて、夫等の教材を其所に當嵌めたのであります。例へば

智的な説明文の如きを、情意的に強ひて鑑賞させようとする爲に、その間非常な無理が生じたり、不自然が起きたりするやうでは甚だ困ると思ふからであります。しかし吟味といふ言葉も、たゞ單に智的な省察のみを指してゐるのではなく、幾分は味ふといふ心持をも有つてゐるものと思ひますから、吟味といふ項にも味はひ得られると思つたことは矢張りその旨を指示して置くことにしました。又其の指示が無くても、實際に味はし得る、事柄があれば味はせるやうに自由に取扱つてよいと思ひます。次に鑑賞といふ事も、その對象を、ただ文の内容に求めるばかりではなく、一つの文字、一つの語句の如きものでも、また鑑賞の對象たらしめることが出来るのであります。即ち文章法上、形式に屬すると思はれるやうな事柄も、また大いに味はひ得るものは、鑑賞の項にそれが指示して無くても適當に取扱ふべきものだと思ひます。除りその對象を内容にばかり求める爲に、却つて文章からかけ離れてしまひ、全く文章を度外視するやうな事の起らないやうに、形式と内容とが切離されて無縁孤立の姿になるやうな事のないやうに留意したいと思ひます。この細目では、夫等形式上吟味すべき事柄は文字、語句、文章といふ項に指示し、鑑賞、吟味といふ項には複雑を避ける爲に、便宜上、大体に内容に屬する事柄を指示したに過ぎないのであります。斯くして、内容上にも形式上にもその對象を求め、夫等の對象が最後に一丸となつて究極の所を目指すのであるといふことを忘れてはならぬと思ひます。

九、準備、注意書、其他

準備の項につきましては別に申上げる事はありません。

最後の注意書であります。見方によりますと、これは非常に大切な事柄でありまして、此所では取扱上動もすれば陥り易い弊を指摘したり、特に重要旨すべき点を指示する事に致しました。要するに之によつて、夫等陥り易い弊害をコントロールし、又取扱の力點を暗示したに過ぎないのであります。ごちらかと言へばこの項を

もつと詳細に書けばよかつたかも知れません。

次に、連絡の事でありませんが、之には特別な項目を設けず、其の必要のあるものは、その事を注意事項の中に摘記することになりました。別段深い理由があつてのことではありませんが、單に連絡を重大視し過ぎて、爲に國語の仕事が他の教材の仕事のやうに所謂脱線してしまふやうなことがあつてはと思ひ、注意欄に注意と共に記載して置く方が安全だと考へたに過ぎないのであります。

一〇、編成について

讀本の種類が三種にも増加しましたので、その編成も非常に複雑になりました。或は一見したのみでは判然とせぬかも知れませんが、これも止むを得ざることで、御諒承願ひたいと思ひます。又、各種の讀本何れかに共通の課目は重複を避けて、その題目のみを掲げ、それに男子用第何課参照とか、女子用第何課参照とかいふ風に但書を入れ、それに依つて参照していただくことに致しました。又農村用は差當り第一學年用のみで、二學年用はまだ出來てゐませんから、従つて配當表には空欄として置きましたから、若し後日第二學年用が出來れば適當に御記入下さればよいと思ひます。

兎に角、男子用、女子用、農村用合編といふ甚だ複雑なものになつてしまひましたが、實際上の使用には、先づ配當表を見て、その課の教授時數や餘裕時數を切り盛りし、それから牽引によつて必要な課目を探し出して下さるやうに願ひたいと思ひます。さうしませぬと、細目の中には教材の最少限度の教授時數が示されてあるばかりで餘裕時數を記入してありませんから、細目ばかりに據りますと、異常な進展を示すかも知れません。御注意まで一寸附言して置きます。

教材配當一覽

第一學年 第一學期 約十六週凡六十四時間 (二週四時間)

月五		月四		月	
週五第	週四第	週三第	週二第	週一第	週
第八課 契約	第七課 野火止の用水 洞庭湖	同 蔦かめ種は生えぬ 第五課 盤珪禪師	第三課 蔦かめ種は生えぬ 第四課 (全二時)	第一課 昭憲皇太后御歌 第二課 太田道灌	(男) 子 用
二	二	二	二	二	教授時數 餘裕時數
二		一	一		
第八課 契約	第六課 會母の物語 第七課 洞庭湖	同 蔦かめ種は生えぬ 第五課 盤珪禪師	第三課 蔦かめ種は生えぬ 第四課 (全二時)	第一課 昭憲皇太后御歌 第二課 太田道灌	女 子 用
二	二	二	二	二	教授時數 餘裕時數
二		一	一		
第八課 洞庭湖	第六課 盤珪禪師 第七課 野火止の用水	同 松の根 第五課 蔦かめ種は生えぬ	第三課 先づ農を重んぜよ 第四課 松の根 (全二時)	第一課 昭憲皇太后御歌 第二課 太田道灌	農 村 用
二	二	二	二	二	教授時數 餘裕時數
二		一	一		

配當表 一年 一學期

月 六						月
週一十第	週十第	週九第	週八第	週七第	週六第	週
第十六課 征衣上途 頼山陽 (全二時)	第十五課 海の朝	第十三課 眞の知己 西洋紙の製法 (全二時)	第十二課 フエルチナン ド、マゼラン	第十課 人を周旋する手 紙 笑話	第九課 山村	題目 授教 時數 餘裕
第十七課 マチソン夫人 (全二時)	第十五課 海の朝	第十四課 廢物の利用 (全二時)	第十二課 春日局	第十課 書物の購入を頼 む 笑話	第九課 山村	題目 授教 時數 餘裕
同 第十七課 征衣上途 ド、マゼラン	第十六課 我が國の水産業 フエルゲナンド、 マゼラン (全三時)	第十三課 麥 秋 海の朝	第十一課 教へ草 動物を愛せよ	第十課 山村	第九課 契約	題目 授教 時數 餘裕

月 七					計
週二十第	週三十第	週四十第	週五十第	週六十第	
同 第十八課 象狩 頼山陽	第十九課 南洋の珍果	第二十課 綱引	第二十一課 廣瀨武夫の 手紙	第二十二課 漁船歸る	自第一課 至第二十二課 全二十二課 時二四 時二二
同 第十八課 マチソン夫人 かげぐち	第十九課 南洋の珍果	第二十課 綱引	第二十一課 嫁げる姉の 許へ	第二十二課 漁船歸る	自第一課 至第二十二課 全二十二課 時二四 時二二
第十八課 西洋紙の製法 植附前後の様 子を報ず	第二十課 害蟲と其の敵	第二十一課 夏の田園	同 船津傳次平 (全三時)	第二十三課 漁船歸る	自第一課 至第二十三課 全二十三課 時六四 時八一

第一學年 第二學期

約十六週凡六十四時間 (二週四時)

月	週	月二十			計	月																			
		週六十第	週五十第	週四十第																					
第一學年 第三學期	約十一週凡四十四時間 (二週四時)	自卷一第二十三課 至卷二第十五課 全二十三課	第十五課 俳句	第十四課 植物と氣象	第十三課 マルコ、ポーロ	計	自卷一第二十三課 至卷二第十五課 全二十三課	第十五課 歳末の十日	第十四課 植物と氣象	第十三課 マルコ、ポーロ	計	自卷一第二十三課 至卷二第十五課 全二十三課	第十五課 俳句	第十四課 植物と氣象	第十三課 マルコ、ポーロ	計	自卷一第二十四課 至卷二第十五課 全二十二課	第十五課 俳句	第十四課 植物と氣象	第十三課 マルコ、ポーロ	計	自卷一第二十四課 至卷二第十五課 全二十二課			
		時六四	二	二	三	時六四	二	二	三	時六四	二	二	三	時六四	二	二	三	時六四	二	二	三	時六四	二	二	三
		時八一	二	二	一	時八一	二	二	一	時八一	二	二	一	時八一	二	二	一	時八一	二	二	一	時八一	二	二	一
		時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數	時數時數

月二		月一				
週七第	週六第	週五第	週四第	週三第	週二第	週一第
第二十五課 人形を贈る	第二十四課 福澤諭吉	第二十三課 村上義光	第二十一課 警察と國民	第十九課 ベートル大帝	第十八課 都會と田舎	第十六課 年頭の十日
第二十六課 故郷の花	同 海苔	同 海苔	同 かんじん	第二十課 警察と國民	同 都會と田舎	第十七課 都會と田舎
二	二	二	一	一	二	一
二	一	一	二	三	一	二
第二十五課 品物の不着	第二十四課 福澤諭吉	第二十三課 機	第二十課 警察と國民	第十九課 ベートル大帝	第十八課 都會と田舎	第十六課 俳句
第二十六課 故郷の花	同 海苔	同 海苔	同 かんじん	第二十課 警察と國民	同 都會と田舎	第十七課 都會と田舎
二	二	二	一	二	二	一
二	一	一	二	三	一	二
第二十五課 書簡	第二十四課 汽船トロー	第二十三課 漁業	第二十一課 警察と國民	第十九課 農業倉庫	第十八課 上毛の三山	第十六課 碧海郡の農業
第二十六課 故郷の花	同 福澤諭吉	同 汽船トロー	同 村上義光	第二十課 警察と國民	同 上毛の三山	第十七課 上毛の三山
二	二	一	二	一	二	一
二	二	三	一	二	一	二

月 六						月				
週二十第	週一十第	週十第	週九第	週八第	週七第	週				
第十七課 天然記念物	第十六課 水と風景	第十五課 租 税	第十四課 阿閉掃部 (全三時)	第十三課 バクテリア	第十二課 望遠鏡と顯微鏡	第十一課 空の景色	第十課 旅先より先輩へ ナボレオン (全五時)	(男 子 用) 教 授 餘 裕 時 數 時 數	女 子 用 教 授 餘 裕 時 數 時 數	農 村 用 教 授 餘 裕 時 數 時 數
二 二	二 二	二 一	一 二	二 二	二 二	三	二 一			
同	同	同	同	同	同	同	同			
第十七課 天然記念物	第十六課 水と風景	第十五課 租 税	第十四課 甲冑堂	第十三課 バクテリア	第十二課 望遠鏡と顯微鏡	第十一課 小野寺十内の妻 西洋の家庭	第十課 歸宅の日取を問 合はず 小野寺十内の妻 (全二時)			
二 一	一 二	二 一	二 一	一 二	一 二	二 一	一 一			
二 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	二 二			

月 七				計	
週六十第	週五十第	週四十第	週三十第	計	
第十八課 由利八郎の意氣	第十九課 夏の曉	第二十課 中吉の誠實	第二十一課 夕立雲	第二十二課 會 社	自第一課 至第二十二課 全二十二課 時九四 時五一
二	一	二	二	二	
第十八課 慈善家キヤサリン	第十九課 夏の曉	第二十課 鏡 (全二時)	第二十一課 温泉を問合 はず	第二十二課 夕立雲	自第一課 至第二十二課 全二十二課 時五四 時九一
二	一	一	二	二	
二	二	二	二	二	

第二學年 第二學期 約十六週凡六十四時間 (二週四時)

月 九		月 十		月 十一	
週一第		週二第		週三第	
週四第		週五第		週六第	
第二十三課 返子だより 地震 (全三時)	第二十四課 地 (全三時)	第二十五課 地震 日本の風土	第二十六課 ビクトリヤ 女帝 罐詰	第二十七課 罐詰 落日	第二十八課 落日 待賢門の戦 (全三時)
第二十三課 地震	第二十四課 月見草	第二十五課 日本の風土 ビクトリヤ 女帝 (全二時)	第二十六課 ビクトリヤ 女帝 罐詰	第二十七課 罐詰 落日	第二十八課 落日 待賢門の戦
第二十九課 待賢門の戦 (全三時)	第三十課 興國の民	第二十九課 待賢門の戦	第三十課 興國の民	第三十一課 興國の民	第三十二課 興國の民
教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數

月 十		月 十一		月 十二	
週一第		週二第		週三第	
週四第		週五第		週六第	
第二十三課 返子だより 地震 (全三時)	第二十四課 地 (全三時)	第二十五課 地震 日本の風土	第二十六課 ビクトリヤ 女帝 罐詰	第二十七課 罐詰 落日	第二十八課 落日 待賢門の戦 (全三時)
第二十三課 地震	第二十四課 月見草	第二十五課 日本の風土 ビクトリヤ 女帝 (全二時)	第二十六課 ビクトリヤ 女帝 罐詰	第二十七課 罐詰 落日	第二十八課 落日 待賢門の戦
第二十九課 待賢門の戦 (全三時)	第三十課 興國の民	第二十九課 待賢門の戦	第三十課 興國の民	第三十一課 興國の民	第三十二課 興國の民
教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數	教授餘裕 時數

課	題	目	用	頁	課	題	目	用	頁	課	題	目	用	頁
男	十五	海の朝	三	三	女	十五	海の朝	三	三	農	十五	我が國の水産業	三	三
	十六	征衣上途	三	三		十六	臺所の整理	三	三		十六	フェルデナンド、マセラン	三	三
	十七	頼山陽	三	三		十七	マチソン夫人	三	三		十七	征衣上途	三	三
	十八	象狩	三	三		十八	かげぐち	三	三		十八	西洋紙の製造	三	三
	十九	南洋の珍果	三	三		十九	南洋の珍果	三	三		十九	植付前後の様子を報ず	三	三
	二十	綱引	三	三		二十	網引	三	三		二十	害虫と其の敵	三	三
	二十一	廣瀬武夫の手紙	三	三		二十一	嫁げる姉の許へ	三	三		二十一	夏の田園	三	三
	二十二	漁船歸る	三	三		二十二	漁船歸る	三	三		二十二	船津傳次平	三	三
	二十三	かぶと蟲	三	三		二十三	かぶと蟲	三	三		二十三	漁船歸る	三	三
	二十四	スバルタ武士	三	三		二十四	スバルタ武士	三	三		二十四	廣瀬武夫の手紙	三	三
	二十五	統計	三	三		二十五	統計	三	三		二十五	スバルタ武士	三	三
	二十六	筏流し	三	三		二十六	筏流し	三	三		二十六	統計	三	三
	二十七	瀧澤馬琴の苦心	三	三		二十七	瀧澤馬琴の苦心	三	三		二十七	筏流し	三	三
	二十八	やまあらし	三	三		二十八	やまあらし	三	三		二十八	瀧澤馬琴の苦心	三	三
	二十九	足柄山	三	三		二十九	足柄山	三	三		二十九	足柄山	三	三
	三十	故郷	三	三		三十	故郷	三	三		三十	郷土	三	三

卷二

課	題	目	用	頁	課	題	目	用	頁	課	題	目	用	頁
男	一	農業	四	四	女	一	農業	四	四	農	一	農業	四	四
	二	堀田瑞松	四	四		二	堀田瑞松	四	四		二	村の秋	四	四
	三	月の光	四	四		三	月の光	四	四		三	稻刈	四	四
	四	鎮守に詣でて	四	四		四	鎮守に詣でて	四	四		四	社會奉仕の精神	四	四
	五	社會奉仕の精神	四	四		五	社會奉仕の精神	四	四		五	護國の目と腕	四	四
	六	護國の目と腕	四	四		六	國字四書	四	四		六	猫の垣巡	四	四
	七	猫の垣巡	四	四		七	猫の垣巡	四	四		七	海洋	四	四
	八	ビスマークの幼時	四	四		八	グロチウスミ夫人マリア	四	四		八	ソコトラ島	四	四
	九	鱒釣	四	四		九	鱒釣	四	四		九	保險	四	四
	十	保險	四	四		十	保險	四	四		十	鎮守に詣でて	四	四
	十一	人を紹介する手紙	四	四		十一	人を紹介する手紙	四	四		十一	人を紹介する手紙	四	四
	十二	エジプトの遺跡	四	四		十二	エジプトの遺跡	四	四		十二	エジプトの遺跡	四	四
	十三	マルコ、ポーロ	四	四		十三	マルコ、ポーロ	四	四		十三	マルコ、ポーロ	四	四
	十四	植物と氣象	四	四		十四	植物と氣象	四	四		十四	植物と氣象	四	四
	十五	俳句	四	四		十五	歳末の十日	四	四		十五	俳句	四	四
	十六	年頭の十日	四	四		十六	俳句	四	四		十六	碧海郡の農業	四	四
	十七	都會と田舎	四	四		十七	都會と田舎	四	四		十七	上毛の三山	四	四
	十八	上毛の三山	四	四		十八	上毛の三山	四	四		十八	山里の夕	四	四

課	男	女子	女	農	村
課	男	女子	女	農	村
題	ベートル大帝	ベートル大帝	ベートル大帝	農業倉庫	農業倉庫
目	警察と國民	警察と國民	警察と國民	警察と國民	警察と國民
用	かんにん	かんにん	かんにん	村上義光	村上義光
頁	七	七	七	七	七
課	海	海	海	海	海
題	福澤諭吉	福澤諭吉	福澤諭吉	汽船トロール漁業	汽船トロール漁業
目	福澤諭吉	福澤諭吉	福澤諭吉	福澤諭吉	福澤諭吉
用	人形を贈る	品物の不着につきて	品物の不着につきて	福澤諭吉	福澤諭吉
頁	七	七	七	七	七
課	故郷の花	故郷の花	故郷の花	故郷の花	故郷の花
題	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅
目	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅	鳥の翼と昆蟲の翅
用	奉天附近の大會戰	贈物	贈物	春近し	春近し
頁	七	七	七	七	七
課	學校園	學校園	學校園	奉天附近の大會戰	奉天附近の大會戰
題	學校園	學校園	學校園	奉天附近の大會戰	奉天附近の大會戰
目	學校園	學校園	學校園	奉天附近の大會戰	奉天附近の大會戰
用	國史に還れ	國史に還れ	國史に還れ	國史に還れ	國史に還れ
頁	八	八	八	八	八

卷三

課	男	女子	女	農	村
課	男	女子	女	農	村
題	春晴千里	春晴千里	春晴千里	春晴千里	春晴千里
目	春晴千里	春晴千里	春晴千里	春晴千里	春晴千里
用	春晴千里	春晴千里	春晴千里	春晴千里	春晴千里
頁	八	八	八	八	八

課	男	女子	女	農	村
課	男	女子	女	農	村
題	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅
目	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅	五百羅漢の畫幅
用	鳥の聲	鳥の聲	鳥の聲	鳥の聲	鳥の聲
頁	八	八	八	八	八
課	感	感	感	感	感
題	ベスタロツチ	ベスタロツチ	ベスタロツチ	ベスタロツチ	ベスタロツチ
目	ベスタロツチ	ベスタロツチ	ベスタロツチ	ベスタロツチ	ベスタロツチ
用	川柳	川柳	川柳	川柳	川柳
頁	八	八	八	八	八
課	噴	噴	噴	噴	噴
題	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ
目	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ	旅行先より先輩へ
用	十ナボレオン	小野寺十内の妻	小野寺十内の妻	小野寺十内の妻	小野寺十内の妻
頁	九	九	九	九	九
課	空の景色	西洋の家庭	西洋の家庭	西洋の家庭	西洋の家庭
題	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡
目	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡と顯微鏡
用	バクテリヤ	バクテリヤ	バクテリヤ	バクテリヤ	バクテリヤ
頁	九	九	九	九	九
課	阿閉掃部	甲冑堂	甲冑堂	甲冑堂	甲冑堂
題	阿閉掃部	甲冑堂	甲冑堂	甲冑堂	甲冑堂
目	阿閉掃部	甲冑堂	甲冑堂	甲冑堂	甲冑堂
用	租税	租税	租税	租税	租税
頁	九	九	九	九	九
課	水と風景	水と風景	水と風景	水と風景	水と風景
題	水と風景	水と風景	水と風景	水と風景	水と風景
目	水と風景	水と風景	水と風景	水と風景	水と風景
用	天然記念物	天然記念物	天然記念物	天然記念物	天然記念物
頁	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
課	由利八郎の意氣	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン
題	由利八郎の意氣	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン
目	由利八郎の意氣	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン	慈善家キャサリン
用	夏の曉	夏の曉	夏の曉	夏の曉	夏の曉
頁	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
課	中吉の誠實	鏡	鏡	鏡	鏡
題	中吉の誠實	鏡	鏡	鏡	鏡
目	中吉の誠實	鏡	鏡	鏡	鏡
用	夕立雲	温泉を問合す	温泉を問合す	温泉を問合す	温泉を問合す
頁	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

男 子 用		女 子 用		農 村 用	
課 題	頁	課 題	頁	課 題	頁
二十二 會社	二〇八	二十二 夕立雲	二〇八		
二十三 返子だより	二〇九	二十三 地震	二一〇		
二十四 地震	二二一	二十四 月見草	二二一		
二十五 日本の風土	二二二	二十五 日本の風土	二二二		
二十六 ビクトリヤ女帝	二二二	二十六 ビクトリヤ女帝	二二二		
二十七 罐詰	二二三	二十七 罐詰	二二三		
二十八 落日	二二四	二十八 落日	二二四		
二十九 待賢門の戦	二二四	二十九 待賢門の戦	二二四		
三十 興國の民	二二五	三十 興國の民	二二五		
卷 四					
一 讀書	二一六	一 讀書	二一六		
二 千潟の舟	二二七	二 千潟の舟	二二七		
三 すゝき原	二二八	三 すゝき原	二二八		
四 蓑蟲	二二八	四 蓑蟲	二二八		

五 渡り鳥	二一九	五 渡り鳥	二一九		
六 伊藤博文	二二〇	六 伊藤博文	二二〇		
七 古社寺と國寶	二二三	七 古社寺と國寶	二二三		
八 萬里の長城	二二三	八 音樂	二二三		
九 東西雜話	二二四	九 東西雜話	二二四		
十 資本	二二五	十 乾物屋	二二六		
十一 ハワイ通信	二二六	十一 歸宅の日取を申し送る	二二七		
十二 柳生宗矩	二二八	十二 稅所敦子	二二九		
十三 雪	二三〇	十三 雪	二三〇		
十四 賢母の教	二三三	十四 賢母の教	二三三		
十五 詠史十首	二三四	十五 詠史十首	二三四		
十六 ゴアンナード君の歸國を送る詞	二三五	十六 ゴアンナード君の歸國を送る詞	二三五		
十七 法律及び命令	二三六	十七 我が國の家庭	二三六		
十八 道德と法律	二三七	十八 道德と法律	二三七		
十九 田園の自然	二三八	十九 田園の自然	二三八		
二十 我が家	二三九	二十 我が家	二三九		
二十一 春を待つ歌	二四〇	二十一 春を待つ歌	二四〇		
二十二 世界の航路	二四二	二十二 世界の航路	二四二		
二十三 手紙の認め方	二四三	二十三 手紙の認め方	二四三		
二十四 歐米人の日本人觀	二四三	二十四 歐米人の日本人觀	二四三		

課題	男子	女子	農	村
二十五	ローマの舊都	二十五	ローマの舊都	
二十六	大樹	二十六	大樹	
二十七	關稅	二十七	園藝	
二十八	曾國藩	二十八	愛	
二十九	峠の茶屋	二十九	峠の茶屋	
三十	國語と愛國心	三十	國語と愛國心	

男女用合編 高等小學國語科(讀み方)教授細目 全

第一學年 第一學期

約十六週凡六十四時間(一週四時)

月 四		月
週 一 第		週
要	目	要 目
<p>(卷一) 第一課 昭憲皇太后御歌</p> <p>明治天皇と並び稱せられ給ふ昭憲皇太后の御歌道の一端を偲び奉らしめ、同時にその御高德と御仁慈を仰ぎ奉らしめる</p> <p>宮内省「昭憲皇太后御集」</p> <p>凡二時</p> <p>照憲皇太后御影</p> <p>載せ。内外。姫百合。木枯。</p> <p>さかひ あた ゆるぎなき世 あらまほし しな高し さやけさ</p> <p>形式 短歌</p> <p>修辭 枕詞「神風の」 あがるかぎりも</p>	<p>章</p> <p>語法 分くらん——ざりせば からまし やらまじ なりけり かな あらまほし</p> <p>「人知れず」の御歌——「獨憤」(御題)</p> <p>「忘れて」——「知」</p> <p>「日の本の」——「海外旅」</p> <p>「持つ人の」——「金」</p> <p>「神風の」——「社頭祈世」</p> <p>「朝毎に」——「鏡」</p> <p>「なごりなく」——「晴天雲雀」</p> <p>「夏草の」——「百合」</p> <p>「柿の實の」——「秋山家」</p> <p>「あかつきの」——「冬星」</p> <p>初めよりの六首は御道歌、終の四首は自然美を歌はれたるもの</p>	<p>容</p> <p>内</p>

鑑	賞	注	意
<p>一、「人知れず」の御歌 御修養と御信仰</p> <p>二、「慮りて」 修學の心得を諭し給ふ御心</p> <p>三、「日の本の」 國威宣揚の思召と向上發展の御意氣</p> <p>四、「持つ人の」 節制の徳と意義ある使用の道</p> <p>五、「神風の」 御信仰と國体の尊嚴</p> <p>六、「朝ごまに」 御修養の一端と御信念の氣高き</p> <p>七、「なごりなく」 春の朝の晴れ々しさ</p> <p>八、「夏草の」 雜草に交る姫百合の氣高き</p> <p>九、「柿の實の」 秋の山家の氣分</p> <p>二〇、「あかつきの」 冬の星のさやけさ</p>	<p>一、終りの四首は四季を御歌ひ遊ばされた數多い中から選んだ代表的御作とも見らるべきものである</p> <p>二、御道歌は其の御教訓の眞意を十分拜察感激せしむべきである</p> <p>三、語法に於て稍難解の箇所が多い、矢張り語法的理解を得させてほしい</p> <p>四、短歌特有の修辭に注意すべきこと</p>	<p>一、終りの四首は四季を御歌ひ遊ばされた數多い中から選んだ代表的御作とも見らるべきものである</p> <p>二、御道歌は其の御教訓の眞意を十分拜察感激せしむべきである</p> <p>三、語法に於て稍難解の箇所が多い、矢張り語法的理解を得させてほしい</p> <p>四、短歌特有の修辭に注意すべきこと</p>	<p>一、終りの四首は四季を御歌ひ遊ばされた數多い中から選んだ代表的御作とも見らるべきものである</p> <p>二、御道歌は其の御教訓の眞意を十分拜察感激せしむべきである</p> <p>三、語法に於て稍難解の箇所が多い、矢張り語法的理解を得させてほしい</p> <p>四、短歌特有の修辭に注意すべきこと</p>

(農村用) 第一課 昭憲皇太后御歌

句 語 字文

種時きて。門田。小山田。穠。

いくか(幾日) 道のべ 苗代水 門田 ささ人 こが

ひ 小山田 八束穠 たりほ いたづきし

修辭 家さ知られて 八束穠のあたりほの上のいたづきし 夕暮寒しこがらしの風

語法 經にけん 青みたる 忘らん 火かけそ見ゆる 人のちからも

一、種時きていくか經にけん——の御歌

1、苗代水の底の青み

2、底の青みにつけて、種時きた頃を思ひ出させ給ふ大御心

二、草さりし晝の暑さも——の御歌

1、湯のやうに湧きかへる眞晝の田——労働の尊

2、夕暮の涼しさ。一日の勞苦も終つた清々しさ

3、門田の月を見ながら涼む里人の心持

4、賤の農夫の勞苦を思はせ給ふ御仁慈

三、こがひする家さ知られて——の御歌

1、養蠶の忙しさ、勞苦の中に味はふ楽しみ

2、山村の夜更にゆらめく人家の明り

3、蠶家の辛苦を思はせ給ふ御慈愛

四、八束穠のたりほの上に——の御歌

1、ふさぶさと終つた八束穠の美

2、その美はしの穠こそ辛苦の賜物である

3、「人の力」を「稔りの秋」——嬉しき回顧

4、農夫の力を稱へさせ給ふ畏さ

賞

五、里の子が標の實ひろふ——の御歌

1、標の實を拾ひつ、嬉々々戯る里の子等

2、あたりは山影、時は夕暮、木枯の音

3、淋しい寒い木枯の中に、ただ一つの自然を友にして育まれ行くわびしい山村の子供達の生活とその詩趣を思はせ給ふ大御心

注

一、以上五首、農村を思はせ給ひ、百姓の勞苦を稱へさせ給ふ御思召なしのび奉らせるに最も適はしい御歌である。御思召の程を長み味はひ感激せしめたい

二、明治天皇にも矢張りこの大御心を歌はせられた御製が非常に多い。御二方御並びにて民草を思はせ給ふ御心の中こそ誠に畏き極みである

第二課 太田道灌

要旨

道灌の歌才を讃稱せしめると共に、文武兩道に秀でた眞の武士の面影を偲ばしめる

所出

野史

間時

凡二時

字文

大夫。詠す。館。湖干。見えん。

語

風流 たしなみ 氣力盛にして 人に屈せず 壯年

鷹狩 古歌の心 心を寄す 詠す 見えん 寂感淺か

句 文 章 構 想

形式 傳記風の記事文

修辭 懸詞「み」の「つだに」「近くなるみの」

語法 にぞ見る をぞ知る さやいはん

第一段 冒頭(本文の精神)

第二段 山吹の里の逸話

第三段 歌問答とその歌才

第四段 末尾(江戸の今昔と道灌の名譽)

一、青少年時に於る道灌の意氣(一段その對照)

二、山吹の里の逸話

1、鷹狩を好んだ道灌の面影

2、山吹の花を出された時の道灌のいぶかしさうな氣持

3、少女の才と、道灌發心の動起の面白さ

三、文武兩道に秀でた眞の武士となり得た道灌に對する賞讃とその修養

四、歌問答に現はれた歌才

1、「夕立の空よりひろき」の着想のおもしろさ

2、「都鳥」の歌 圓滑な言ひまはし

3、「我庵は」の歌 叙景の即妙と寫生のおもしろさ

4、後土御門天皇御製にこもる御敬感と道灌の榮

鑑

一、青少年時に於る道灌の意氣(一段その對照)

二、山吹の里の逸話

1、鷹狩を好んだ道灌の面影

2、山吹の花を出された時の道灌のいぶかしさうな氣持

3、少女の才と、道灌發心の動起の面白さ

三、文武兩道に秀でた眞の武士となり得た道灌に對する賞讃とその修養

四、歌問答に現はれた歌才

1、「夕立の空よりひろき」の着想のおもしろさ

2、「都鳥」の歌 圓滑な言ひまはし

3、「我庵は」の歌 叙景の即妙と寫生のおもしろさ

4、後土御門天皇御製にこもる御敬感と道灌の榮

週二第					
賞	注	意	要旨	所出	文
<p>五、「濱千鳥」の歌 古歌の心を知る眞諦。歌のなだらかささ味はひ</p> <p>六、江戸の變遷に對する今昔の感じ</p> <p>七、道灌の名譽</p>	<p>一、歌の妙味を殺さぬやうに、そして道灌の歌才の秀でたことに感嘆の聲をもらさしめるやうにありたい</p> <p>二、構想が中々立派である。吟味させるがよい</p>	<p>犬を愛好する少年の熱情とでも言ふべきものを味はしめる</p>	<p>長谷川辰之助「平凡」</p> <p>凡二時</p>	<p>お愛想 人畜の差別 すがさす わらぢ蟲 たわいもない いやおうなしに 後をしたふ</p> <p>形式 口語、常体、叙事文</p> <p>修辭 形容譬喩法等の妙所が多い</p> <p>設疑 「犬でなくなる。それとも僕が人間でなくなるのか」(十頁) あるけれども……」の……(餘韻)</p> <p>語法 常体「……」調は本文の作者長谷川二葉亭の創</p>	

章	構	想	鑑
<p>始である。一寸知らしてやるがよい</p> <p>第一段 冒頭(特別な愛好心を持つてゐること)</p> <p>第二段 父母に對するボチの態度</p> <p>第三段 自分とボチの愛情(四、五、六段の序)</p> <p>第四段 朝からボチと遊ぶ嬉しさ</p> <p>第五段 一人遊びのボチの面白さ</p> <p>第六段 登校前、後を暮ふてくるボチを家に残す苦しい心持と愛情。</p>	<p>一、犬好きは犬が知る——心の感應</p> <p>二、第二段の終「たゞそれだけのことで、云々」の結びの持つ味はひ</p> <p>三、人畜の差別が無くなるさういふ熱情</p> <p>1、「犬でなくなる、それとも僕が人間でなくなるのか」の句は、想の上から見れば二葉亭一流の懷疑な味であり、修辭的に見れば所謂設疑の妙である</p> <p>2、人畜の差別が無くなるさういふ一句は、本文の主旨である。「愛は總ての存在を一にする」といふ二葉亭の思想の一端である</p> <p>四、朝起きぬけからボチと戯れる情愛</p> <p>1、聲を聞けば飛んで来る愛らしさ、自分の心持</p> <p>2、泥足で飛びつくボチの心、抱き上げる自分の心</p> <p>3、父母がきたないといつて顔をしかめる——が自</p>		

賞	注	意
<p>分に取つては何でもないさういふ氣持を「なるほど考へて見ればきたないやうではあるけれども——」餘韻を持たせて否定する言廻しの妙</p> <p>五、一人遊びをやつてゐる描寫の眞に迫るやうなうまさ</p> <p>六、第六段の初、「此時が一日中で一番苦しい時だ」に叙述の頭初に冠せる手法のうまさ</p> <p>1、こゝそり出ても、先廻りしてゐるボチの犬らしさ</p> <p>い慧さ。</p> <p>2、格千戸の内へぶち入れる氣持</p> <p>3、「僕も同じ思ひだ」泣出しさうな顔「その眞情</p> <p>4、最後に、ほつさする心持</p>	<p>一、大體通讀を主として味ははせるがよい、餘り細かく解剖せぬ方がよいだらう</p> <p>二、「平凡」の一節だが、全文を朗讀でもして鑑賞させてもよい、しかし文中に相當に考慮すべき辭句があるから注意せねばならぬ</p>	<p>(農村用) 第三課 先づ農を重んぜよ</p> <p>農業の尊貴なる所以を悟らせ、益々之を愛し益々之を發展せしめねばならぬといふ自重自愛あらしめる</p>

間時	字文	句	文	章	構	想
凡二時	<p>たまもの ぬたありこは ことしやう いたづら ぶつ</p> <p>織織工場 古稱 徒に 普佛戦争。</p>	<p>生業 根本的 力にまつ 古稱 鄭重 大嘗祭 祭事</p> <p>外見 文化 燦然 白蟻 自覺 自重 質實 陷落</p> <p>氣概</p>	<p>形式 口語、説明文風の論文</p> <p>修辭 人は一日も飲食せずにはなられぬ——人は着物なしでは暮されぬ——人は家を要する——繭もなく綿もなく製絲工場もなく機械工場もなく呉服屋もない</p> <p>外見は文化燦然たるやうに見れても實はしんを白蟻に犯されてゐる木材のやうなものである。農村の亡びざる限りフランスは永久に亡びない。農民たる者は此の氣概がなくてはならぬ</p>	<p>一、飲食の資料の生産</p> <p>二、衣服原料の生産</p> <p>三、建築用材の生産</p> <p>四、根本的生業たる所以</p> <p>五、その説明</p> <p>六、我國古代よりの農業尊重の思想</p> <p>七、農業の保護尊重すべき必要と自重自愛</p> <p>八、農民たるの氣概</p>		

鑑	賞	注	意
<p>一、衣食住の根本資料の生産にあたるさといふ重大な天職使命</p> <p>二、實證の面白さ——その誇り</p> <p>三、瑞穂の國の古稱と農業者の本分——農業は國家的生業だ</p> <p>四、大嘗祭其他祭事に農業に關するもの多き誇り、敬虔の念</p> <p>七、「なりはひ」「たみ」の語源が有つ意味の深き味</p> <p>八、保護尊重すべき所以と自重自覺の心</p> <p>九、佛國々民の氣概——我等農民もまたこの氣概あれ</p>	<p>一、題目「先づ農を重んぜよ」の「先づ」の一語の味を知らねばならぬ。手段的修飾的な「先づ」ではない</p> <p>第一義的の「先づ」であり、根本的の「先づ」である</p> <p>二、都會におこがれる輕薄な考へを農民たる實着な氣風に引きもどし、そして自尊する心持と、自重ある氣概とを有たせるのである</p>		

週三第

鑑	想	構	章	文	句語	時	出	要	目
<p>一、種の起源に對する説明と科學の進歩</p> <p>二、第一段の説明を更に具體的に歸納的に説明してある</p> <p>三、其の理論が眞理である、この實證</p> <p>一、諺を引いて來た手法の巧みさ</p>	<p>形式 口語 常体 説明文</p> <p>修辭 1 引例法 2 設疑に對して先づ「全くその場所</p> <p>にわたさしか思はれない」もつともかういふ考は我が國ばかりでなく」等と同感をして置いて、それから徐ろに説明を興へて、それを否定する手法</p>	<p>形式 口語 常体 説明文</p> <p>修辭 1 引例法 2 設疑に對して先づ「全くその場所</p> <p>にわたさしか思はれない」もつともかういふ考は我が國ばかりでなく」等と同感をして置いて、それから徐ろに説明を興へて、それを否定する手法</p>	<p>形式 口語 常体 説明文</p> <p>修辭 1 引例法 2 設疑に對して先づ「全くその場所</p> <p>にわたさしか思はれない」もつともかういふ考は我が國ばかりでなく」等と同感をして置いて、それから徐ろに説明を興へて、それを否定する手法</p>	<p>形式 口語 常体 説明文</p> <p>修辭 1 引例法 2 設疑に對して先づ「全くその場所</p> <p>にわたさしか思はれない」もつともかういふ考は我が國ばかりでなく」等と同感をして置いて、それから徐ろに説明を興へて、それを否定する手法</p>	<p>形式 口語 常体 説明文</p> <p>修辭 1 引例法 2 設疑に對して先づ「全くその場所</p> <p>にわたさしか思はれない」もつともかういふ考は我が國ばかりでなく」等と同感をして置いて、それから徐ろに説明を興へて、それを否定する手法</p>	<p>凡二時</p>	<p>丘邊次郎「博物叢書簡易動物學」「進化論講話」</p>	<p>種無くしては萬物一として發生するものでないさといふ進化論的思想の眞理を味ふべきである</p>	<p>第四課 時かぬ種は生えぬ</p>

字	文	時	出	要	意	注	賞
<p>生<small>せい</small>の喜<small>よろこび</small> 驚異<small>おどろき</small> 烈風<small>れつふう</small> 遺す<small>のこす</small> 秘め<small>ひそめ</small> 嘗<small>いそが</small></p> <p>欲す<small>ほつ</small> 力め<small>ちから</small></p>	<p>和辻哲郎「偶像再興」</p>	<p>凡二時</p>	<p>大地にしつかと根を下すことが先づ凡ての營みの根本義であるべきことを味はひ悟らせる</p>	<p>第四課 松の根</p>	<p>一、補説、敷衍も結構と思ふが、その爲に學習の過程が理科に陥らぬやう注意せねばならぬ</p> <p>二、それよりも眞理の尊さや、それを發見する人の力の偉さといふやうなものを感ぜしめることに骨を折りたい</p> <p>三、大休文章道的な吟味で行けば間違ひないだらう</p>	<p>二、引例の妙と面白さの中に眞理が暗示され、最後に實證されて行く整然とした文理の進行</p> <p>三、鑑詰の引例によつて、實生活の上から之を實證する巧みさ</p> <p>四、最後の「微細な生物が、種がなくても自然に通くものであつたら云々」といふ辭句が冒頭の諺に相對して、一種の重みを感じしめ、冒頭の文章的な用意を再び力強く活かしてゐる点</p>	

賞	鑑	想	構	章	文	句語
<p>一、松の外の生々さ——しかしそれは松の全部ではない</p> <p>二、地中の根の偉大な營みさ</p> <p>三、松の根を思へ、根底の力を養へ</p>	<p>形式 口語、記事文</p> <p>修辭 うるほひのある鮮かさ 涙にぬれたやうなしをらしい色 あたかも生の喜が其處に躍つてゐるやうに 地上と地下の姿にそれは何さといふ甚だしい相違であらう すく／＼と伸びた幹——枝——葉先——戦ひもがき苦しみ精一ぱいの努力を 無數の太い根細い根を以て一せいに大地にしがみついてゐる 目の前にまざまざと見た時思はず驚異の眼を見はらぬわけにはいかなかつた たま／＼と烈風の吹きすさぶ時——聞いたこともある炎熱の日が——見た事もある 我々の目に秘められた地下の營 上に——欲するな先づ下に食入ることに力めよ</p> <p>語法 まざまざと——わけにはいかなかつた</p>	<p>形式 口語、記事文</p> <p>修辭 うるほひのある鮮かさ 涙にぬれたやうなしをらしい色 あたかも生の喜が其處に躍つてゐるやうに 地上と地下の姿にそれは何さといふ甚だしい相違であらう すく／＼と伸びた幹——枝——葉先——戦ひもがき苦しみ精一ぱいの努力を 無數の太い根細い根を以て一せいに大地にしがみついてゐる 目の前にまざまざと見た時思はず驚異の眼を見はらぬわけにはいかなかつた たま／＼と烈風の吹きすさぶ時——聞いたこともある炎熱の日が——見た事もある 我々の目に秘められた地下の營 上に——欲するな先づ下に食入ることに力めよ</p>	<p>形式 口語、記事文</p> <p>修辭 うるほひのある鮮かさ 涙にぬれたやうなしをらしい色 あたかも生の喜が其處に躍つてゐるやうに 地上と地下の姿にそれは何さといふ甚だしい相違であらう すく／＼と伸びた幹——枝——葉先——戦ひもがき苦しみ精一ぱいの努力を 無數の太い根細い根を以て一せいに大地にしがみついてゐる 目の前にまざまざと見た時思はず驚異の眼を見はらぬわけにはいかなかつた たま／＼と烈風の吹きすさぶ時——聞いたこともある炎熱の日が——見た事もある 我々の目に秘められた地下の營 上に——欲するな先づ下に食入ることに力めよ</p>	<p>形式 口語、記事文</p> <p>修辭 うるほひのある鮮かさ 涙にぬれたやうなしをらしい色 あたかも生の喜が其處に躍つてゐるやうに 地上と地下の姿にそれは何さといふ甚だしい相違であらう すく／＼と伸びた幹——枝——葉先——戦ひもがき苦しみ精一ぱいの努力を 無數の太い根細い根を以て一せいに大地にしがみついてゐる 目の前にまざまざと見た時思はず驚異の眼を見はらぬわけにはいかなかつた たま／＼と烈風の吹きすさぶ時——聞いたこともある炎熱の日が——見た事もある 我々の目に秘められた地下の營 上に——欲するな先づ下に食入ることに力めよ</p>	<p>うるほひ しをらしさ 驚異 しをれる 地下の營</p>	

注	意	要旨	所出	間時	字文	語句	文	章	構
<p>一、松の根に對する驚異の味をしつかり味は、せぬと主想が生きて來ない。力が生れて來ない</p> <p>二、力強さ、雄々しさ、男性的な偉大さ——を前課の「先づ農を重んぜよ」の自覺と照應させたい</p> <p>三、修辭は全体に新しい。現代文範の一例として最も適はしい材料である。内容の深さを味はふと共に形式上の新味をも感得させたい</p>		<p>善惡の二途を抱擁し、惡にも慈光を浴せしめて善導する崇高な識徳と深大な信仰に感激を得させる</p> <p>橋春暉「北窓瑣談」(有朋堂文庫)</p>	凡二時	<p>修行。所爲。承諾。諭す。感泣。</p>	<p>識徳 會衆 所爲 追放 總代 承諾 退散 修行</p> <p>みだりに 前非を悔ゆ 道德堅固</p>	<p>形式 文語体、敘事文</p> <p>語法 古典風な語法と文脈</p> <p>反語 「誰か之を導くべき」</p>			
									分段的には分たれてゐない

第五課 盤珪禪師

想	鑑	賞	注	意
<p>想の上から見れば、冒頭の二行の序と事件の叙述及び結末との三部面だらう</p>	<p>一、冒頭二行は文の序であつて、こゝで一世に高いその識徳といふものに先づ感じを持たせる</p> <p>二、惡僧放逐の申出を「よしよし」の一語で應へ、最後まで黙々としてゐる禪師の態度(禪の一妙諦)</p> <p>三、次に、がや／＼騒ぎ廻る會衆の態度(二の對照)</p> <p>四、會衆の立腹は世の常の事である、決して間違つては居ない。しかしまだ眞實の境地には入つてゐない自分の心に間隙のあることに悟入してゐない。それで騒ぎまはるのである 靜觀せしむべきである</p> <p>五、退散したければ退散せよと言ひ切る力強さ</p> <p>六、御身等の如く、修行を積み行正しき人は何所へ行つても宜しかるべし——間隙への突入。會衆の心持</p> <p>七、我なくしては彼如何せんといふ大悲悲心</p> <p>八、それを聞いて初めて悟つた時の會衆達の心中</p> <p>九、惡僧の胸中。佛心の誕生と愛の力の偉大さ</p>	<p>一、ちつと落ちついて考へさせればならぬ。しんみりした所があつてほしい</p> <p>二、文脈が現代的に又直截的に響いて來ないから、適當な補導が必要だらう</p> <p>三、下手な説教に陥らぬやうに</p>		

第四週

要旨	所出	間時	字文	語句	文	章	構	想
<p>要旨 確固不拔の信の強さと、不朽な生命を與へた献身的奉仕の至誠を汲み味は、せる</p>	<p>大槻磐溪「近古史談」「信綱と平林寺」</p>	凡二時	<p>丘。野趣。靈。詣で。一滴。精確。掃く。陰。</p>	<p>野趣に滿つ 菩提寺 代官 見積 督す なじる 手</p> <p>落 地なうるほす 草ひいで ただに 苦心をしのぶ</p>	<p>形式 口語、常体、記事文</p> <p>修辭 漸層「森あり兵あり云々」美化「玉の如き氷」</p> <p>強調「奔流が……進み來つて忽ち六里の堀に」</p> <p>語法 ただに——ばかりでなく</p>	<p>一、位置ミ背景の野趣</p> <p>二、野火止用水の現状</p> <p>三、用水起工の計畫と掘鑿工事の進行</p> <p>四、起工代官心勞と成功(主想)</p> <p>五、感慨</p>		

第五課 蒔かぬ種は生えぬ

(農村用)第六課 野火止の用水

(男子用第四課参照)

鑑	賞	注	意
<p>一、武藏野の野趣(智慧伊豆を出す伏線的な用意)</p> <p>二、信綱墓所の描寫——背景の靜かさ</p> <p>三、野火止用水の現状描寫——玉の如き、水勢</p> <p>四、安松の奉仕的精神の發露と大金を投じてそれを賞現させる智慧伊豆の偉さ</p> <p>五、工事の景氣よさと規模の大きさ</p> <p>六、一滴の水も流れて來ぬといふ結果に對して</p> <p>1、人夫等の心持</p> <p>2、信綱(智慧伊豆と稱される)の問責</p> <p>3、安松の胸中</p> <p>七、確固たる自信の強さ、安松の剛毅</p> <p>八、十埃が無くなり、野菜の出來かよい——</p> <p>1 水分が地なうるほしたのだ——人々の氣持</p> <p>2 安松の氣持(自信の一證)</p> <p>九、大雨の後の満水</p> <p>1、人々の喜び</p> <p>2、安松の安堵と喜悅</p> <p>3 信綱の感歎</p> <p>二、最後末尾の感慨——情景の對照と低曲の情</p>	<p>文章も内容も非常に立派な教材と思ふ 背景の描寫で主想を活かし、文脈の前後を呼應せしめて清新な生々とした、感じを持たせる よく味は、せたいものである</p>		

(女子用)第六課 祖母の物語

鑑	章	文	句	語	字	文	間時	旨	要
		形式 文語体、説明的な談話文 語法 唯夢のやうにも覺ゆるかな 不用のものとな、な ら、染むることなりけり、今の娘こそうらやまし けれ、行かんこそ難かるべし 想はざりし所ならん それすら——心地するに——こいふもなほおろ かなるべし 行くこそ歎かはしけれ、贅澤になれる ——變り行くなぞ 數へなば	飛脚 千里比隣 風の便り 衣食住 たしなみ食ふ おこりの風に染む	萬づの物 箴の音 夜なべげに 炊事 火をきる わづらはし 身だしなみ 習はし 手習師匠	ふ。矢立。宛名。飛脚。託す。想ふ。豚。識る。	萬づ。紡績。田舎。炊事。附木。肩。嫁。裁つ。伴 ふ。矢立。宛名。飛脚。託す。想ふ。豚。識る。	凡二時	時代の進歩とその文化の跡を顧みて起る今昔の感慨と いふやうなものに包ませる	

賞	注	意	賞	注	賞	注	賞	注
三、老の目も針の目の通さる、心地す——技巧の巧さ 四、マツチさへも不用になりさうだ——限りなき進歩 五、掃で齒を磨いてゐる氣持 六、お齒黒の煩はしさ 身だしなみよき古典的婦人の 面影 嫁と娘の區別が明らかだつたといふ面白さ 七、現代に生を得た吾々の幸福と覺悟の暗示 八、矢立の感じ 九、郵便の有難さ 昔の大儀さ 一〇、千里比隣も愚かだといふ感慨 一一、新聞紙の惠澤 一二、物資流通の有難さ 一三、しんみりした新進に對する誠め	材料が非常に多いが、それに囚はれてはいけない 情趣を専らに生かしてほしい	(農村用)第六課 盤珪禪師 (男子用) 第五課參照	第七課 洞庭湖	有が如く無きが如く、大なるが如く小なるが如く茫々 漠々とした大湖水の特殊な感じや、大陸的な感じを 味は、せ、天然の巧みさを稱へさせる	東亞同文會編「支那省別全誌」桂類三「長江十年」			

鑑	想	構	章	文	句	語	字	文	備	間時
				形式 口語、常体、説明的な記事文 修辭 誇張——一望千里、一望無邊、大洋の如き風光 一刻一刻と減す……忽ち丘となる 形容——漫々たる、茫々たる、安閑として 語法 こゝに至れば……いふべきではないか	一望無邊 干潟 水やせる 漫々たる 瀟切 嚴冬 晩春 茫々たる 現出 大体の數字に過ぎない 水か れる 安閑として 緩和 貯水槽 徐々	支那地圖、繪畫寫真類、丘陽樓記繪寫物 嚴冬。揚子江。洲。緩和。充滿。過つて。	凡二時			

月 五 週 五 第

賞	注	賞	注	賞	注	賞	注
五、急激な減水の感じと、淺瀬の船の面白さ 六、來年の増水期を安閑と待つ香氣さ 七、三四十尺の高地に横はる船を見る感じ 八、天然の巧みを説いて一大貯水槽だといふ形容のう まさ及び其の感想	一、材料は地理的であるが、主想は大自然への感激で あることを忘れてはいけな 二、大國的な氣分と得物の知れない所が、どうやら支 那の國民性の象徴でもあららしい。それを兒童に考 へさせることはむづかしからうけれども、教授者の 用意にその心が加はつてゐるよと思ふ	(農村用)第七課 野火止の用心 (男子用)第六課參照	第八課 契約	契約に關する理解を與へ法律の眞精神に觸れしめる	凡二時	契約の原則。貸借。請負。斯く。取締令。 有無。雙務。履行。文言。締結。	まくに 強制 經濟上の問題 當事者 雇傭 請負

句	畢竟 効力 暴利 不當 證書 雙方 履行 文普通 り 任意 理解 斟酌 圓滑 圓滿
文	形式 口語、常体、説明文 修辭 1、數多の引例法 2、論文風の記述法
章	第一段 前提↓故に↓殊に 第二段 説明↓しかし↓又↓けれども 第三段 説明↓又↓相互の利益↓斯くして
構	一、序説(序論、主想) 二、契約の内容と締結の自由及制限 三、當事者の權利義務と社會生活への關係 四、結尾 圓滿な運行的精神(冒頭との對比)
吟	一、第一段の主想 二、契約の内容 1、法律行為とその効果 2、自由と制限 三、契約證書と權利義務 1、契約の申込 2、契約の解除 3、履行と社會生活への影響關係
味	四、履行の精神 社會との共同精神、連帶精神

週六第

注	一、内容が堅くて複雑であるから、文理を整頓吟味する氣持で進む方がよいと思ふ 二、適當な實例を擧げる必要が多く生じるだらう 三、契約内容の理解のみに止めてはならぬ。冒頭の結尾の示す讀本精神に感ぜしめなければならぬ
意	(農村用) 第八課 庭洞湖 男子用第七課參照
旨要	山村生活の情趣にうちひたらせる 凡二時
間時	凡二時
文	山 懐。眞直。体裁。冬玉。摘草。生氣。濟む 自慢。音頭。山。稲。片端。炎。天。十用。盲。 なる。群雀。稻掛。笛。干上る。藁靴。 鳴子。
字	山あひ 左折右曲 部落 山懐 いはば 体裁 口繪 ゆかしい眺 水をはる 早苗 喉自慢 ここんで 草 いきれ よどむ 犬がき ひなた こり、内庭 夕日 にはえる 待ちこがれる
語	形式 口語、常体、記事文 修辭 對句、漸層、對照などの手法が多い
句	
文	

章	現在描寫で終始する
構	一、村の位置と山間らしい地勢の描寫 二、村の戸口と現状——山村らしい記述 三、早春の景趣——春待つ氣分 四、春の景趣——喜悅の情 五、晩春から初夏への景趣 六、草刈の風情 七、田草取の勞苦 八、川遊びの樂しさ 九、豊年を喜ぶ秋の情趣 一〇、晩秋の氣分 一一、冬の景趣
想	一、山あひを右折左曲する大川の景色 二、見渡しの利かぬ山懐、十軒は一目には見ぬ山村らしい氣分 三、「川邊町」の面白さ 四、春待つ心持、雜誌の口繪に對する不思議さ 五、明るい陽氣な春の嬉しい氣持、木々の美しさ 六、晩春初夏の生々した氣分——活動の世界へ一轉する情趣 七、朝露を踏んで草刈る氣持——山百合の美化 八、田草取の辛苦、勞働即満足の健全な心持
鑑	

賞	九、川遊びの樂しさ 一〇、豊年の喜悅、父の言葉、心にひびく祭の太鼓 一一、晩秋の美、秋祭と時雨(山村の氣分) 一二、冬の運動、元氣さ 一三、子供の天地——餘韻
注	一、描寫のうまさ、それに交へた叙情の手法など、中々味はふべき所が多からう 二、理屈抜きで、しんみりと學習を進めたいものである
意	(農村用) 第九課 契約 男子用第八課參照
旨要	(女子用) 第九課 山村 男子用に大体同じ。異なる点だけ擧げる 一、文体 敬体にしてある。女らしくしてある 二、第七段に河水の味を述べて、愛すべき氣焔を上げてる 三、川遊びの段を省略してある 四、秋祭の樂しさを語る父の詞も省略してある 五、最後の段(男子用第十一課)を二段に分けてある 冬の遊びを女らしく、おとなしく記述してある
間時	
文	

週七第

第十課 人を周旋する手紙

旨要	句語	字文	間時	旨要
候体書簡文の讀解と、候体語脈を明かにし、出來得れば特殊な語感を味はせる。	わざわざ 來訪 風情もこれ無く 依頼……の趣 次男 快活 順良 望にかなふ 同道 委細 拜眉	遣はず。周旋。拜眉。讓る。搜す。	凡一時	候体書簡文の讀解と、候体語脈を明かにし、出來得れば特殊な語感を味はせる。
	形式 候体、書簡文。 語法 これ無く、失禮の段、相尋ね候に、相成 致し くれよと、右子供は 存ぜられ候 就いては 下 されたく尙、申上候通り 先づは取りあへず			
	想構 前文、本文、末尾の普通形式 一、現代語譯と對照的に候体語法獨特の味はひを吟味して行く。 二、本文用件の簡潔明瞭な記述に對する吟味 三、候体書簡文の一般形式			
	吟味			
	章			
	文			
	旨要			

(女子用)第十課 書物の購入を頼む

候体女子書簡文の讀解、其の語脈を明かにし、且つ女性的に優しい語感を味はせる。

第十課 人を周旋する手紙

旨要	句語	字文	間時	旨要
候体女子書簡文の讀解、其の語脈を明かにし、且つ女性的に優しい語感を味はせる。	毎々 申しかれる 見立 勝手がましく かしこ	形式 候体女子書簡文 語法 候ま。何かさ 快くなるにつけ、年寄のこま さてさかく、下され候やう願上候	凡一時	候体女子書簡文の讀解、其の語脈を明かにし、且つ女性的に優しい語感を味はせる。
	想構 前文、本文、末尾の普通形式 一、女性らしい優しい感じ (語感の影響) 二、病人に對する女性らしい氣遣ひ 三、女子書簡文としての特殊な形式			
	吟味			
	章			
	文			
	旨要			

(農村用)第十課 山村

男子用第九課參照

第十一課 笑話

ユーマアの鑑賞をせしめる

旨要	所出	間時	字文
ユーマアの鑑賞をせしめる	醒睡笑(童、數珠) 富久喜多留(走り自慢)	凡一時	盜人

句語 そさう者 うへげ者 そなた

形式 文語体 對話だけを口語にした特有の形式
語法 うつむけてあるを見て 大きなる打つて感じ
言ふたれば

修辭 卒然と筆を起し、卒然と筆を擱いて、餘韻を持たせる獨特な手法

鑑賞 一、童 粗忽を氣づかずに、得意氣に濟ましてある所
二、數珠 淺はかな感心と、悟つてからでも理窟をつけて負け惜みを言ふ可笑しさ
三、走り自慢 向ふ見すが手段に囚はれてゐることを知らず、人の注意でほつと氣がつき、さぼけたやうな顔をする可笑しさ

注意 一、自然の笑ひが望ましい
二、數珠の最後の一句「さかく物は聞いて見ぬさ」の可笑味は、兒童に稍難解である。しかし、この邊の諷刺に甚だ輕妙な味があるのだから注意せねばならぬ

(農村用)第十一課 教へ草

旨要 諺語の有つ眞理とその味を味はせる

間時 凡一時。

字文 一の肥し。一種二肥三作り。實に勝つ。

句語 半作 論實

形式 但諺
修辭 嫩をかたげた乞食 仕事を追ひ追はれる

語法 省略手法
一……二……三…… 一匹……萬匹 一の肥し

章 一、勤勞 進取
二、怠惰の表象は乞食 勤勞の表象は嫩 寸鐵人を刺すといふ妙味

鑑賞 三、朝起の徳を稱する最簡の辭句 朝起の快さ
四、實際と理想は口程に兩立せぬ 百姓は實際を貴ぶ口よりも胸といふ妙味
五、足跡——勞働の象徴味 一の肥しは勞働だ
六、農業の要訣三原

注意 七、秋日和半作——秋の天候は年の豐凶の半ばを支配する 最後の五分間といふやうな味
八、春の一匹 一匹の油斷が 秋の萬匹を生む 最初の一步を油斷すな
九、田舎の人情の濃やかさ 美はしさ

一、但諺の精神は無論通俗な教訓であるけれども、その教訓を赤裸々に説教してはうるほひがなくなる、そのうるほひがある故に、但諺に味があるのだ、味が第一

第八課

第十二課 フェルナント・マゼラン

彼が世界周航の壯圖と艱難の跡を偲び、その不拔の大意志に感歎せしめる

凡三時

マゼラン肖像 世界地圖

企つ。詳か。大膽。氣象。辛酸。整ふ。兒
暴無頼。易い。幽閉。荒涼。爆発。不穩。穩
便。一隻。悲惨。蜂。賜物。偉業。

航海熱 偉業 時代の機運 辛酸をなめる 賛助 大
冒險 南下 洋々たる 兇暴無頼 反感 不和 非難
斷乎として 幽閉 聲をひそめる 荒涼たる 不毛の
地 不穩の氣がみなぎる 剛毅 反旗をひるがへす
謀反 悲惨 碇泊 功を急ぐ 故國 意志をまげる

形式 口語、常体、傳記風の記事文
修辭 身を切るやうな寒さがあつた、不平は遂に爆發
した 不穩の氣がみなぎる 不幸が頭を持ち上げる

一、序説(時代の説明)
二、生立(航海の自信)
三、世界周航の大計劃

想

- 四、準備と苦心
- 五、出發と小波瀾
- 六、困難(不平の爆發)
- 七、困難(斷乎とした處分)
- 八、マゼラン海峡の發見(喜悅)
- 九、太平洋の命名
- 一〇、太平洋横斷の困難
- 一一、マリヤナ群島での盜難
- 一二、フィリッピン諸島上陸
- 一三、暗殺
- 一四、世界周航の成功とマゼランの名譽

鑑

- 一、時代相の面白さ(第一段)
- 二、生立から豪膽なところ
- 三、彼の希望の遠大さ
- 四、準備の困難(命がけの大冒險)
- 五、出發時の揚々たる意氣(紛擾との對比)
- 六、反感不和、兇暴無頼の徒の滿ちた船中の氣分——ちつとそれを見詰めるマゼランの胸中
- 七、斷乎たる處分——聲をひそめた不平(對照)
- 八、食より起る紛擾の淺間しさを恐し
- 九、これくらゐのことで意志をまげる人ではなかつた——身命に危險が迫つても「これくらゐのこと」と一言へる豪膽さ

賞	注	意
<p>一〇、船長の反旗を見たマゼランの胸中</p> <p>一一、難破と歸航の二船を見るマゼランの氣持</p> <p>一二、マゼラン海峡發見の喜悅、船員の心持</p> <p>一三、太平洋のおだやかな氣分</p> <p>一四、食料缺乏の悲惨な有様</p> <p>一五、ごろぼう島の可笑しさ</p> <p>一六、フィリッピン到着の安心と嬉しさ</p> <p>一七、成功を急いだ失敗(同情と教訓)</p> <p>一八、世界周航の大偉業の實現と彼の名譽に對する稱讚</p>	<p>一、比較的長文だから、補説敷衍など餘り多くなりすぎぬやうにせぬと時間の不足を來すたらう</p> <p>二、抽寫でなくて記事であるから、鑑賞取扱は具体的な想像によつて活かさればならぬだらう</p>	<p>一、女子用(第十二課) 春日局</p> <p>婦女の龜鑑と稱される局が、一身を掛け赤誠を以て徳川三代將軍家光の養育に任じたその生涯を通ずる誠心に感じさせる</p>

字	語	句	文	章	構
<p>嬌男 幼名 乳母 禮儀にならへる 武威をおぢ</p> <p>高札 まかり、下らん 對面 威儀 素性 末孫 注進</p> <p>丹誠をこむ 猛き 心懐 寵愛 一方ならず、うごんず</p> <p>いづくしむ 氣色 勢に附く 心痛 序をみだる</p> <p>私人の家 さる事 思を—勞す 幼心 時めく、ありがひなし</p> <p>自害 切に 輕擧 猶豫 駭府 目もかけず 差を立てる</p> <p>長たる者 ゆくゆく 大奥 擧げて之に任ず 高ぶる 病篤し 癩瘡 神明に誓ふ 親しく 精進 建立 あまねく 教養 世の常 世の習</p>	<p>形式 文語体、傳記風の記事文</p> <p>語法 こそ—なれ ならでは 恐れしにや、まかり下らん たるべし さへ—すら まして さる事 まるらせばや ありがひなしさや 思ひけん 次いでぞ—なりたる これ—ありければなり</p>	<p>一、乳母物色の困難と公葬</p> <p>二、春日の應葬と任命</p> <p>三、竹千代の教養に捧げた誠心</p>			

<p>想</p> <p>四、國松の出生と紛擾の因、春日の心痛 五、竹千代自害の決心と春日の策動 六、家康の明裁と事件の解決 七、家光就職後に於ける春日の重用と人格 八、春日の臨終と家光の悲歎</p>	<p>鑑</p> <p>一、これこそやがては三代の云々——重大視の有様と春日應臺への伏線的な用意 二、京女らしい心持、公募の「世に珍しき」 三、春日應臺の決心と人格の片鱗 四、よき方に導かばあつたれば古今の名將云々——春日の眼光と誠心 五、お家騒動について 六、家康の明裁について 七、大奥事務一切の委任をする家光の心 八、謙讓な春日の人格 九、臨終について 一〇、決死の病褥——神明に對する信の力強き</p>
---	---

賞	注	要旨	時	文	語句
<p>二、家光の見舞と、藥を口に入れながらも飲まない悲壯な胸中 三、家光の悲歎と精進までする心持 一〇、墓所と追慕の情</p>	<p>一、語句、語法に特に注意あるべきこと 二、春日の策動に關しては多少の敷衍が必要と思ふ 三、多少女丈夫式な所があるが、所謂女丈夫式でなくして誠心の溢れから斯くせしめたといふ理解が必要である。世の常の「やり手」に陥れてしまはないやうに注意のこと</p>	<p>(農村用)第十二課 動物を愛せよ</p> <p>動物の愛らしさと、愛することの樂しさを嬉しさを味はひ悟らせ、動物に對して温い心情を持つべきことを自覺せしめる</p>	<p>凡三時</p>	<p>芝生。目抜き。都塵。露天演説。散策。物欲し。可憐。池畔。展開的。頑是。無邪氣。興がる。連絡。奇聲。丹念。一齊。致へて。口汚く。罵る。温い。</p>	<p>坦々 目抜きの 都塵 露天演説 喧々囂々 散策 ひそやか 所在なき 可憐 鬱蒼 頑是なき 奇聲</p>

<p>文</p> <p>形式 口語、叙事文 修辭 見渡す限り坦々として續く緑の芝生 河の流のやうにひた押しに續いて 喧々囂々の響も知らぬうつさりさの静かさの中に眺め入る 夫婦は子供のやうに無邪氣になつて 投げる、受取る、後れる 追越す 小鳥よ、小鳥よ、かばい、小鳥よ</p>	<p>章</p> <p>一、ハイドパークの印象 二、静かな散策、悠々たる気分 三、人馴れた雀の愛らしさ 四、ケンシントンンガーテンへ 五、ケンシントンンガーテンの森林美 六、人なつこい栗鼠の愛らしさ 七、デンマークの海濱の一村、船に集る鷗の群 八、鳴の馴々しさ、百姓夫婦の愛 九、ドイツの下宿屋、小鳥への愛 一〇、野外の動物をも愛する温い心を持って</p>
---	--

賞	注	要旨	時	文	語句
<p>六、身邊を飛交ふ鷗の愛らしさ 七、鷗にパンを與へる農夫の美はしい眞情、それに見られる船客の心持 八、鷗と船の競争? 九、下宿屋の主婦さんの美しい心 一〇、人の心は動物の心に反映する——深い味はひ 二、我國民の動物に對する態度を顧みたる時の感想 三、野外の鳥獸をも愛しようとする温情の美はしさ</p>	<p>一、動物愛護の主旨を説かんが爲に澤山の例證が引かれてゐるが、何れも我々には深い暗示と啓示を與へてくれるものばかりである 二、愛らしさを知ることが愛することの第一歩である 三、理窟と情意が離反してはならない</p>	<p>第十三課 眞の知己</p> <p>眞の知己間の至情が、如何に力強きものであるかを感激せしめる</p>	<p>凡二時</p>	<p>朋友。知己。歡樂。執つて。一旦。今生。執行。救。願。獄中。獄屋。動靜。不慮。故障。王者。</p>	<p>シレル原作の詩に據る。</p>

語句	文	章	構	想	鑑
知己 歡樂を共にする 死生の境 死刑 執行 仁愛 しおき 願意 獄卒 不安の色 本心 不慮の故障 寸刻の間 二言をばく 信義 王者の富貴 榮華 歎聲	形式 口語常体、叙事文 修辭 肩を打ち手を執つて 一旦……怒ち しかも…… 示さない 今は是までと 一命は寸刻の間に迫つた 此の時早く彼の時遅く 目前の死 手の舞ひ足の踏む所 心の奥から 一言のもとにはれつける	一、眞の知己とは何か(主想) 二、ビチアスの罪科と老父母への思ひ 三、友人ダモンの友情、ビチアスの歸郷 四、獄中に於けるダモンの動靜と信義の強さ 五、處刑の日のダモン 六、處刑直前に於ける二人の友情の實現とその極致 七、王の歎聲(主想の餘韻)	一、離合集散常なき交友の情願に對する反省的な感じ 二、死刑を宣告されて老父母を思ふ心持、願意を退けられた胸中 三、ダモンの友情と信の力、王の感じ、ビチアスの胸中 四、獄中に於けるダモンの平然たる姿		

賞	注	要旨	所出	時間	文字
五、ダモンの詞——不慮の故障だと飽くまで信じる偉大な信義 六、友の爲に死を惜まず、何等怒む所なき美しい至情 七、死刑執行直前の急迫した氣分と描寫のうまさ 八、ビチアスが歸郷の思ひ——ダモンとの對比 九、目前の死を忘れて——信義のみありて死を忘れるといふ眞情の極致(二人の心、見物人の心) 三、王の感激、歎聲(歎聲と餘韻)	一、描寫の手法に注目すべきこと 二、人物の心持といふものを十分味は、せること 三、事件の興味にのみひきつけられてはならない、主想から離れないやうに終始すること	(農村用)第十三課 麥秋 麥秋時の農村氣分とその情調、收穫の嬉しさを味は、せる	徳富健次郎「みみずのたばこ」	凡二時	たぎあき 農繁 休 初旬 雨間 増長 蔓 ちうこう はんれい うりおひ ばあ ぞうちやう つる 中耕 飯料 請負 婆さん 沸かす 濟ます ちやうけ 朝作り

語句	文	章	鑑
初旬(中、上) 増長 陸稻 よしきり(名) くひな(名) ぶゆ(名) 請負 朝作り 茶受	形式 口語、記事文 修辭 みのつた夢が日の出のやうに明るくする 猫の手でも使ひたい どうしてなか／＼ばかりはならぬ…… ……で田も植ゑねばならぬ……も刈らねばならぬ…… ……も取らねばならぬ……も反さねばならぬ……しなければならぬ……摘まねばならぬ……搗いて來ればならぬ 時も時さて、飯料の夢をきらしたので よしきりが口やかましく終日騒いでゐる くひながことことたくよひもあゝ ほたるが出る、蟬が鳴く、蛙が鳴く、蚊が出る、ぶゆが出る、はへが……のみがかなぶん、瓜ばへ、てんたう蟲 手が足らぬ手が足らぬ……やりきれない 大病人の外は手をあげてゐるものはない めくらの婆さんでも……茶ぐらゐは沸かす……や……は……でも……食ふひまはない くるくとした目を見はつて「知らないよ」と答へる 五つ六つの女の子と赤ん坊と唯二人。	一、初夏六月の田圃風情 二、作物の入手 收穫の忙しきの描寫 息をもつがせの叙述	

賞	注	要旨	時間	文字
三、時も時として——この忙しい最中に——さいふ感じ 四、大自然の活動がはじまりかける 五、蟲捕りも忙しい中にせればならぬ 六、人手の足らぬ忙しさ 一、大病人の外は——きり／＼舞ひの忙しさ 二、めくらの婆さんまで 三、食ふひまがない——豆ごころの話ぢやない! 四、きび餅の食事——飯どろろぢやない! 五、朝飯前の仕事 六、お春つ子の辨當運び 七、留守ばかりの家々——子供の描寫の巧さ	一、漸層を繰返したり、或は漸層の中に修飾を入れる手法、それが又一種のユーモアと情調さを帯びてゐる得意の手法に注目せしめよ 二、單なる美文だに見てはならぬ、農村情緒の謳歌である。喜び誇らねばならぬ。	第十四課 西洋紙の製造 西洋紙製造の大体を知らせ 人智の進歩に對する驚異的な或る感想を有たせる	凡二時	はくへん 薄片 釜 破壊 磨る 斯うして 混す

語句	文章	構想	鑑賞	注意	要旨
西洋紙 圓筒形 混す 藥液 纖維 分離 壓搾 乾燥 抄く 伴つて 除去 ロール 莫大	形式 口語、常体、説明文 修辭 見る見る中に 實に目を驚かす 夜となく晝となく 實に莫大なもの	一、原料の説明 二、製造の順序 三、粗造紙製造の順序 四、抄紙機の構造と抄紙の有様 五、巻取機を見る感じと抄紙量 六、我國の現状と感想	一、紙の原料が木材であるといふ面白さ 二、抄紙機の働きに對する驚異 三、第五段、六段の感じ（我國文化の暗示と象徴的な感じ）	一、實業的教材であるが、單なる智識を附與することに止めるやうではならぬ 二、何等かの感想を抱かしめればならぬ	簡単な廢物利用でも吾人の日常生活と國家經濟の上にとれほど重大な意義があるかといふことを感ぜしめる

(女子用)第十四課 廢物利用

間時	文字	語句	文章	構想	鑑賞
凡二時	披絲。重寶。妙。途。掛物。額面。表裝。磨る。敷す。戒む。	掃捨てるのが普通である 用ひ所 はたき 紙よりむざ／＼ 最も妙 重要記事 カード式 切抜帳 表裝 他山の石	形式 口語、常体、論文風な説明文 修辭 古きを捨て新しきを追ふ今日 或は自然の勢であらう むしむ敷すべく戒むべきことである 以て他山の石とすべきではないか 捨てるに忍びない	一、序説 二、利用の實際例 三、同 (マツチ空箱、古葉書) 四、同 (土着、古帯) 五、同 (シヤボン、茶の出殻) 六、古きを顧みない現代の缺點と獨逸での挿話 七、物に對する愛の心(主想)	一、種々の實際例に對して、工夫の妙なる点を味はせる 二、現代の古きを捨て去る趨勢に對する感じ 三、獨逸での挿話が示す教訓の味

賞	要旨	間時	文字	語句	文章	章	構	想
四、他山の石さしようではないかといふ精神 五、捨てるに忍びないといふ心持 六、物を愛するといふ美しい心情	生氣に滿ち滿ちた海の朝あけの詩情を味はせる	凡一時	東の空。眞紅。溢る。	こめる たふさ きらめく かもめ 命は溢る	形式 文語体、韻文 修辭 (形容) 夢に似たり 紫にほふ 眞紅に燃ゆる 金龍をどり 夢よりさめて 命は溢る 語法 音(修辭的に語調の上から見てもトを發音する爲の語感のあることに注意) 光たふと	一、未明の海の情趣 二、朝日を受けてかゞやく海の景趣 三、明け渡つた生氣に滿ちた海の情景		

(農村用)第十四課 海の朝

男子用第十五課参照

第十五課 海の朝

週一十第

賞	注意	要旨	間時	備準	文字	字
一、未明の遠き潮の音 二、さ霧の氣分、波浦の情趣 三、未明に船歌を聞く詩情 四、日出描字のうまさ 五、その壯嚴さ 六、命は溢る——清新な活氣に滿ちた心持	一、形容語が非常に多い 夫々の情景を思ひ浮へして味はせること 二、解釋のために詩情を棄ててはならない	明治三十七八年戰役に於る我軍人の誠忠とその悲壯な胸中に感激せしめ、國民的大意氣を味ひ感ぜしめる	凡二時	櫻井忠温「肉彈」	征衣。上途。半時。本懐。暗涙。丈夫。離分の間。無論。免れる。留守。宣戰。大詔。禮拜。未練。功名。繰返す。莊重。吹奏。沈痛。音調訓示。瀟く。裂く。碎く。踏。同胞。暇乞。	著者寫眞、戰跡記念物等

第十六課 征衣上途

語	句	文	章	構
勳員令 城内練兵場 熱望 男兒の本懐 暗涙の浮ぶ 今生 鬼の目にも涙 しばしまどろむ 靈前 ふるま ひ 別杯をあぐ 悲壯 莊重 沈痛な音調 血湧き肉 をどる 誠心誠意 ほごはる 同胞 至誠 感慨 嗚呼 敵壘 熱血	形式 口語常体、叙事文 修辭 これぞ……のたまへ 疊、い、の、最後、の、眼 すば、こはね起き、これ 血湧き肉をどる 向ふ所は 天も裂くべし 地も砕くべし 潮の如くに 巨彈耳 をかすむ 嚴寒骨をさす	第一節 一、序説 勳員令 二、城内練兵場へ集合 三、無限の歡喜と生別の感慨 四、出發の前夜 五、悲壯な我家の門出 六、同 七、聯隊長の訓辭	第二節 一、征衣上途、その意氣 二、國民の熱誠と感慨(出發の日)	
想	鑑	賞	注	意
三、同(戦場にての感慨)	一、生別の感慨に對する叙述の味 二、前夜、死後の整理をする心情 三、冷水で身を清め、大詔を奉讀する心事 四、家族との悲壯な告别 五、沈痛な聯隊前の訓辭朗讀、讀む者、聽く者の心事 六、出發の意氣 七、國民の眼に映じ耳に聽ゆる頼母しさ 八、國民の意氣とその熱誠な後援激勵 九、國民の至誠に對する感慨と感謝の念	一、原著書参照の必要がある 二、鑑賞の要項はその大綱のみを記した。一言一句にも言ひ難き味はひのあることを忘れてはならぬ	一、原書書参照の必要がある 二、鑑賞の要項はその大綱のみを記した。一言一句にも言ひ難き味はひのあることを忘れてはならぬ	一、家の整理整頓の基であり、また國民生活の源であるとも稱すべき臺所に對して、如何なる用意を有すべきかを悟らせる。 保科孝一「日本の臺所と國民生活」 凡二時 臺所參考圖面各種

字	語	句	文	章	構	想	注	意
濟む。沸く。整つて。肝心。浪費。	家政 手を加へる 採光 通風 衛生的 かりりとし てゐる 目が届く 中身 習慣 豊にす 生活の安定 と充實 ひいては 体に餘裕が出来る 浪費	形式 口語常体、論説風の説明文	一、臺所は家政の一表象である 二、構造上と設備上の注意 三、器具、材料の整理整頓 四、無駄のない生活と生活の安定充實 五、臺所整理の大切な所以(冒頭との照應、主想)	一、成るべく實際上の考察と感想を必要とする。 二、理窟や方法を知らせてだけではない 成るほど大切なことだといふ感じを得させなければならない。	(農村用) 第十六課 フェルチナンド・マゼラン 男子用 第十二課参照	第十七課 頼山陽	要旨 智徳を兼ね備へた頼山陽の人格に觸れしめ、幼時よりの刻苦勤勉と偉大な事蹟を偲ばせる。	週二十第

所出	時間	標準	文	字	語	句	文	章
近世先哲叢談 山陽行實	凡二時	山陽肖像 日本政記 日本外史 山陽筆蹟寫真類 莊子 史家。詩人。刻苦。廢す。千歳。青史。收む。委の しつ。曉。廢に就く。略々。稿本。現や。超え る。景慕。莊子。危篤。講。宴。激。越。世道。幾何 史家 詩人 勤勉刻苦 軍記 賦す 志を述ぶ 千歳 青史に列す 史學 委の 執筆 稿成る 才子 景慕 徳行の人 たまへ 報に接す 講半ばにす 母を奉 ず 慷慨激越 世道	形式 文語体、評論風の傳記文 修辭 寢食を廢するに至る 千歳青史に列す 曉に至 らざれば廢に就かず 有名なる—— 一日も筆を捨 てず 凡そ如何に これ其の千古の名を成して古人 と共に青史に列したる所以なり 悲歎や才能はず 殆ど病を忘れたるものの如くなりき 語法 如何にしてか……得ん 起床するや いへらく 現や……於てをや これ……所以なり ——すべき は……たるにあり 談……に及び	章	文	句	文	章

構	章	文	句語	字文	備準	間時	所出	旨要	注	意	賞	鑑	想	構	
一、柵のこしらへ方と、狩出し	形式 口語常体、叙事文風の説明文 修辭 まんまと…… 優しい親切らしい同族 大きな木も根こぎにされるかと思ふ程	形式 口語常体、評論風の傳記文 修辭 衆望を集める。反抗の鋒が折れる はなやか な生活をしてみたいと思はれない さながら—— 反對黨の人ですらも	夫人 賢夫人 剛直 悦服される徳 交際家 反對黨 内助 慰藉 助勢 難局に處す はなやか 評す 快 活 姑 母堂	一、八九歳既に軍記を讀みて熱中する心情 二、十三歳作の詩の有つ意氣 三、その勤勉、その刻苦に對する驚歎 四、山陽の言が論す真意の味 五、評論の精神 六、莊子を再び講ぜざりし心持 七、母への美しい情愛と母の喜び 八、病を忘れて楠公を談ずる激越さと熱意 九、事蹟の回顧	一、夫マゲソンの略傳を豫説する必要があるだらう 二、これも教訓を濃厚にし過ぎて教材の本旨から上 りするやうであつてはならない。どこまでも夫人の 徳をたへさせるのだといふ態度を忘れてはなら ない	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、刻苦勉勵の生涯 二、其の評論 三、徳行の概説 父母への奉養 四、忠君の念と功績	一、刻苦勉勵の生涯 二、其の評論 三、徳行の概説 父母への奉養 四、忠君の念と功績	一、夫マゲソンの略傳を豫説する必要があるだらう 二、これも教訓を濃厚にし過ぎて教材の本旨から上 りするやうであつてはならない。どこまでも夫人の 徳をたへさせるのだといふ態度を忘れてはなら ない	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、夫マゲソンの略傳を豫説する必要があるだらう 二、これも教訓を濃厚にし過ぎて教材の本旨から上 りするやうであつてはならない。どこまでも夫人の 徳をたへさせるのだといふ態度を忘れてはなら ない	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること

構	章	文	句語	字文	備準	間時	所出	旨要	注	意	賞	鑑	想	構
一、柵のこしらへ方と、狩出し	形式 口語常体、叙事文風の説明文 修辭 まんまと…… 優しい親切らしい同族 大きな木も根こぎにされるかと思ふ程	形式 口語常体、評論風の傳記文 修辭 衆望を集める。反抗の鋒が折れる はなやか な生活をしてみたいと思はれない さながら—— 反對黨の人ですらも	夫人 賢夫人 剛直 悦服される徳 交際家 反對黨 内助 慰藉 助勢 難局に處す はなやか 評す 快 活 姑 母堂	一、八九歳既に軍記を讀みて熱中する心情 二、十三歳作の詩の有つ意氣 三、その勤勉、その刻苦に對する驚歎 四、山陽の言が論す真意の味 五、評論の精神 六、莊子を再び講ぜざりし心持 七、母への美しい情愛と母の喜び 八、病を忘れて楠公を談ずる激越さと熱意 九、事蹟の回顧	一、夫マゲソンの略傳を豫説する必要があるだらう 二、これも教訓を濃厚にし過ぎて教材の本旨から上 りするやうであつてはならない。どこまでも夫人の 徳をたへさせるのだといふ態度を忘れてはなら ない	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、刻苦勉勵の生涯 二、其の評論 三、徳行の概説 父母への奉養 四、忠君の念と功績	一、刻苦勉勵の生涯 二、其の評論 三、徳行の概説 父母への奉養 四、忠君の念と功績	一、夫マゲソンの略傳を豫説する必要があるだらう 二、これも教訓を濃厚にし過ぎて教材の本旨から上 りするやうであつてはならない。どこまでも夫人の 徳をたへさせるのだといふ態度を忘れてはなら ない	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること	一、修辭上、語法上の吟味を十分にすること 二、教訓に陥つてはならぬ。山陽の刻苦そのものを偲 ばしめるやうに努めること

標準	稅子敦子像、下田歌子寫真
備文	遠慮 <small>えんりょ</small> 、姑 <small>しよ</small> 、慣れる。音 <small>かへり</small> みる。反省 <small>はんせい</small> 。濁 <small>にご</small> る。
語句	刀自 文學趣味 地位 一方ならず 殿 老女 典禮 反省
文	形式 口語敬体、談話体記事文 修辭 優雅な語調を帯びた女性的な修辭が多い 例へば物のわかつたお方 ほんたうに氣がきかなくて私たちを追使ふ 我事のやうにくやくしく 悪うございましたでせう ほんたうにくらしい 聞はよがしに言つてゐたのでございますもの たつてのお言葉で 機敏に器用に 心が濁つてかへつていけません 比のお話をうかつて
章	一、稅所敦子の序説 二、敦子刀自に對する陰口を聞いた腹立たしさ 三、それを刀自に告げて修養談を聞かされたこと 四、それからの自分の修養
構	一、かげぐちのにくらしさの表現 二、信頼する人に對する陰口を聞かされる不快さの女性らしい叙述
想	三、知らなかつた——さいふ返事の意外さ
鑑	

週三十第

賞	四、修養談の味 五、先方が面白半分——こちらはそれを本氣にして心を苦しめる愚さ、といふ機微
注	一、稅所敦子の略傳を補説する方がよからう 二、教訓を押し賣りしては厭氣が生じる 味は、せる中に悟らせ、修養の必要を痛感せしめるやうに努力することだ 三、下田女史のこまも補説して、いだらう
意	(農村用)第十八課 西洋紙の製法 男子用 第十四課參照
要旨	第十九課 南洋の珍果 南洋諸島の果物の珍しい風趣を想像せしめ、強烈な色調に富んだ風物の情趣を味は、せる
所出	鮎見祐輔「南洋遊記」
間時	凡二時
文字	凡二時 陽光 <small>やうかう</small> の能 <small>かど</small> を載せる。淡雪 <small>あはゆき</small> 。芳香 <small>はうかう</small> 。凝らす。誘惑 <small>いんごわく</small> 。暗黄色 <small>あんわうじよく</small> 。淡泊 <small>たんぱく</small> 。小路 <small>こうぢ</small> (せうぢ)
語句	馭者 <small>ごしや</small> 、物古 <small>ものふる</small> 、純白 <small>じゆんぱく</small> 、舌ざはり、造化 <small>そくわ</small> 、萬果の粹 <small>じゆん</small> 、惡魔 <small>あくま</small> 、誘惑 <small>いんごわく</small> 、濃厚 <small>おんこう</small> 、淡白上品 <small>たんぱくじゆんぱん</small> 、むさぼる

文	形式 口語敬体、紀行文 修辭 何かさ 快く南國の陽光の下を走る あれもこれとも手を出す 征伐にかゝつた そのまゝ、そつくり春の淡雪のやうに 芳香のみが残る 萬果の粹を一果に集む さげのあるにくくしい外皮 食ひなれた人を非常に誘惑する むさぼり食はんが爲
章	一、序説 領事館訪問 二、パタビヤの町見物 マンゴスチーンを買ふ希望 三、南洋風景(途中の眺め) 四、ウオターロー、ブレン公園の眺め 五、果物市場(マンゴスチーン等の買物) 六、マンゴスチーンの絶佳な風味 七、ドリアンの臭み 八、ドリアンと土人の生活 九、ドリアンの怪味
構	
想	
鑑	一、南洋風景と情調 二、マンゴスチーンの風味を描写した邊の氣分 三、ピットリヤ女王に關する一挿話の面白さ 四、ドリアンの臭み、形状、色彩描寫のうまさ(前段 マンゴスチーンとの對照) 五、ドリアンの落ちてくるのを下で待つてゐる土人の香氣さ加減(土人の風俗、南洋らしい暢氣さ)

賞	六、人を引きつける怪味の不思議さ 七、ドリアン出盛頃土人がそれに誘惑される面白さ
注	一、源流は紀行文である 旅情、見學氣分、珍しさ等の心持が全文に漂ふてゐる それを逸してはならぬ 二、地理、理科的の材料は背景に過ぎない 本旨と顛倒するやうな事があつてはならぬ
意	(農村用) 第十九課 植付前後の様子を報ず
要旨	喜雨に甦つた農村の歡喜を味は、せ、氣遣はせた人に對して示した感謝の心持を悟らせる
間時	凡一時
文字	降 <small>くだ</small> つて。途方 <small>とちほう</small> 。揚水機 <small>やうすいき</small> 。辛 <small>か</small> うじて。豪雨 <small>かうう</small> 。際立つ <small>きはた</small> つ。御氣遣 <small>おきぢ</small> 。
語句	御健勝 降つて 水利 ひとすら 豪雨 農來 活氣 づく 一方ならず 御氣遣
文	形式 敬体、書簡文 修辭 ひとすらに空を仰ぎ雨を待つ 一日延しに延しかれがれになりたる小川に 歡喜其の極に達す 際立ちて活氣づく

月 七 週四十第				
所出	旨 要	注 意	鑑 賞	構 想
新渡戸稻造「歸雁の蘆」	紳士的で、そして大きい態度を示した外國人の態度を觀て、此方の小さく狭い心城を反省した時の恥づかしいやうな思ひを嘯みしめさせて、修養上の訓へを味はせる。	一、極く簡単な文であるが、早天の下に嘯ぐ農家の勞苦を種々に想像せしめたり、回顧せしめたりして滲々させしめればならぬ 二、人事を盡くして天命を待つといふ農家の努力の貴さを知らねばならぬ	一、田植の出來ぬ早天の惱ましき、心配不安の心 二、他所が田植の出來るのを見てゐる苦しさ 三、かれ／＼の小川にポンプを据えて活動する心持 四、ひたすらに空を仰ぎ雨を待ちあぐむ人々の心 五、喜雨來——歡喜の極——「雨喜び」祝福の聲 六、心配かけた人達へ安心の旨を通ずる美しい情	一、前文 二、早天の苦勞を慈雨の喜ばしさ(本文) 三、挨拶

賞	鑑	想 構	文 章	句 語	字 文	周 時
一、船中退屈の想像 二、綱引の思ひつきに躍り上る船客の心持 三、日本人らしい心情——外國人の心情(對照) 四、敵を賞讃する外國人の心情とその眞意 五、氣恥づかしい、慄られたやうな思ひ(主想)	一、船中退屈の想像 二、戦況及結果と、その感想	一、船中の退屈と綱引の思ひつき(序説) 二、戦況及結果と、その感想	形式 口語常体、叙事文 修辭 榮辱此處にありと 力のあらん限り 東に走り 西にはせ あら嬉しや 之を見之を聞く 今更恥づかしくなつた 語法 さも……げに もつとも外國人は	氣味 大和民族 榮辱 茫然 ほめた、へる 懸念	凡二時 行司 榮辱 遊戯 發議 自慢	凡二時

月 七 週四十第				
章 文	句 語	字 文	間 時	旨 要
形式 口語、説明文 修辭 うらばに見積つても……に對する強敵ベタリヤてんたう蟲は、けたし其の適例であらう しかも此のベタリヤてんたう蟲は頗る貪食であつて幼蟲のみならず成蟲も盛に相手の……か食ひ喰ひ之を全滅させれば止まる	正確 うらばに見積る 發生 分布 慘害 卵囊 樹液 結實 分泌 枯死 顯著 貪食 全滅 とも食	繁殖。慘害。稻作。菌。驅除。尾端。枯死。顯著。内臟。窮す。とも食	凡三時	農家の大敵たる害蟲の暴威に恐怖せしめ、その害蟲を採り食ふ益蟲の恩恵に思ひを致させ、驅除、保護の宜しきを得ればならぬことを痛感させる 二、彼我國民性の表象である 味ふべきだ

週五十第				
旨 要	注 意	吟 味	構 想	賞
軍神としてその武勇を崇拜される中佐が又、兄弟の間に注いだ温やかな情愛を汲み味はせ、人間としての中佐の人格にも觸れしめる	一、色々な事實を知ると共にそれに歸まる所の大自然の攝理を味は、ればならぬ 二、農業の要諦は自然への同化とその利用であると言ふ事も出来る その心持と自覺を有せしめたいものだ	一、色々な事實を知ると共にそれに歸まる所の大自然の攝理を味は、ればならぬ 二、害蟲にも強敵があるといふ自然の妙計 三、イセリヤかひがら蟲の恐るべき被害 四、ベタリヤてんたう蟲の威力 一、貪食なること 二、とも食ひまですること——利用上の注意	一、蝦蟇の被害高 二、蝦蟇赤明蜂 三、うんかの被害高 四、うんかの敵 五、害蟲を捕る蟲類(總括的) 六、イセリヤかひがら蟲の被害 七、ベタリヤてんたう蟲の寄生と利用上の注意	一、船中退屈の想像 二、綱引の思ひつきに躍り上る船客の心持 三、日本人らしい心情——外國人の心情(對照) 四、敵を賞讃する外國人の心情とその眞意 五、氣恥づかしい、慄られたやうな思ひ(主想)

第二十一課 廣瀨武天の手紙

所出	時間	準備	文	字	語	句	文	章	構	想
大分縣教育會編「軍神廣瀬中佐小傳」	凡二時	中佐肖像・筆蹟寫眞等	御懇書。精讀。降つて。休神。堪へず。惠贈	先考。眞相。幸甚。先度。	懇書 拜受 再三 降つて はばかりながら 友愛の情 惠贈 武勇絶倫 先考 激賞 眞相 さることながら 幸甚の至り 一貫の精神 天佑 確信 再拜	形式 候体書簡文 修辭 誠に感激に堪へず 御厚情に報いん言葉もこれなく候 嬉し涙に暮れる 満足も之に過ぎず 有ること無きこと 御心づかひは御無用に	語法 先づ以て 降つて—儀 若し思召しもこれあり候はゞ	一、惠贈品に對する禮 二、兄との面會 三、報國丸の働きについて 四、負傷者見舞の件 五、忠誠報國の至情 六、追書		

鑑	賞	注	意	要旨	時間	文	字	句語
一、惠贈に對する感謝の心情 二、嬉し涙に暮れたといふ兄との對面にあらはれた眞情 三、兄よりの激賞を喜ぶ心情 四、姉らしい優しい心づかひに對する中佐の態度 五、最後の心強い覺悟と手紙を讀む姉の心 一、七生報國の意氣 二、天佑を確信するさいふ信念の強さ 六、追書の心やりの優しさ	一、書中の人物や、品物等は具體的に解説すること 二、本文の精神、教材の精神をしつかりつかませること 三、一個の武辨としてではなく、温かい人間としての中佐の人格に景仰せしめればならぬ	(女子用)第二十一課 嫁ける姉の許へ	嫁げる姉を慕ふ妹の眞情、我子の安否と孫の愛に心を引かれる母の情愛などを味はせせる	凡二時	御險。單衣。一入。	日にそへて なりまゐる こなたは あんよ 一入		

文	章	構	想	鑑	賞	注	意	要旨	時間	文	字	語
形式 候体書簡文 修辭 日にそへて暑さきびしうなりまさり候 一入待遠しき思ひのせられ候 語法 あらせられず候や 着せたらば……かはゆらしからん なほく	一、本文 姉の來訪を待遠しく思ふこと 二、追書 電氣鐵道のこと	一、起句のなだらかき、女性的な語感、妹の人格 二、嫁げる姉が訪れるのを待ちわびる一家の嬉しさ 三、あんよの出來かけた文字の愛らしさと、祖母の心 四、一つ身を縫うて待つ妹の心(姉の嬉しさ)	一、修辭上、言廻しのなだらかな感じに注意 二、形式上、追書(なほく書)の方式を知らせること	(農村用)第二十一課 夏の田園	夏の田園に滿ち溢れる生き力の詩趣情調を味はくせる 凡一時	粉砂。諸聲。車輪。碎け。中空(なかぞら)滴る。 朽木。	片岡 諸聲に 草いきれ あふこ いこふ よぎる					

句	文	章	鑑
せ、らぎ 中空 名残して よみがへる	形式 韻文、短詩 修辭 諸聲に鳴くせみ はたさやむとき 谷川のせ、らぎに 中空より滴る しぐんにはほ 落日の名残して 物音はよみがへる	一、午前 1、朝日のひかり—活動の象徴 2、舞ひ上る道の砂—蟬の合唱 3、今日も暑さう—言外の味、豫感の味 二、草いきれ 1、青田の中の細道を行く詩趣 2、草いきれの感じ 三、眞夏の眞晝 1、日光にひかる鐵の光 2、桑畑の眞晝 3、炎熱、剛快 四、午後二時 1、眞晝の靜寂 2、自轉車のタイヤの音—ほつこ我にかへる 五、水車 1、谷川のせ、らぎの涼しさ 2、水車の飛沫の美しさ、涼しさ	

週六十第

句	語	字	文	備	間	旨	要	注	賞
大の勞苦 海幸 こだま	風のないだ 小手をかざす 視界にはいる はしやぎ きる 目安として 右往左往 十挺櫓 船 船先 多	翼 編笠 目安 漂ふ 獲物 華やか	波先 濱の明 神の 視界 緩く 幾艘の 先導	漁村の風景繪畫寫眞 大漁の寫眞繪畫	凡二時	大漁の景氣よまさ、壯快な漁村の活動情趣を味は、せる	第二十二課 漁船歸る	一、短詩として最初の教材 しかし夏の田園詩情を味はふには全部を通じて總括的に眺める方がよい 二、短詩は兒童にも手頃だ 試作さすのも面白からう	三、車の朽木の香——官能的な詩情 六、夕暮 1、夕の灯を望むなつかしさ——安息の嬉しさ 2、落日を浴びて牛を引く——詩趣 3、夕星の光、涼しさ 4、萬物誕生の夜が来る——夜露の香

文	章	構	想	鑑
形式、口語常体、叙事文 修辭 擬聲——ざ、ざ、ざ、やつき、ほいさ、ねつさ、ねつさ、だぶりさ 修飾と形容——ぼつつり小さく 湧く／＼……小さい船が一つ又二つ 追つては逃げ 逃げては追ふ 仁王のやうになくましい 瑠璃のやうにすんだ目 紫を含んだ青色の背	一、夕日に光る海邊の景色 二、入船の知らせ 三、入船を待つ漁村の人々 四、歸船の遠景 五、大漁の目標と喜びかへる村の人々 六、濱のにぎはしさ 七、歸り着く船の壯觀 八、船から下される海幸の山	一、濱の眞砂を染める夕日の美しさ 二、だぶりのけだるい波の音 三、人々の呼聲の面白さ——景氣よまさ 四、船を待つ村の人々の心 五、「うん、うちの船か」さ砂山にかけ上る人達 六、漸次の視界に入る船——眺め渡す濱の人々 七、子供達の喜び 八、大れよに勇み立つ心	一、少年時代の熱心さ 二、實際に着眼する明るさ 三、水源涵養に實した功勞 四、郷黨の指導の熱心さ 五、大久保利通の農業施設に致した功勞と、人物を天下に求める熱心さ	一、出生生地とその少年時代 二、理論の應用と研究 三、水源涵養の功績 四、郷里に於る農業指導 五、大久保利通の知遇 六、駒場の開墾生活 七、利通の訪問と天職即趣味の生活 八、實力 九、逸話 熱心さ 二、記念碑 病歿 著書

文	句	語	字	文	間	旨	要	注	賞
形式 文語、傳記	々たる 見解 蒙額 撰	の才 俗語体 自費 理 實 會談 知遇 諾す 茫	力耕 農閑 算道 名主 涵養 大總代 新業 畝文	力耕 農閑 算道 選擇 名主 大總代 新業 里芋 培養 遺憾 勤む 諾す 一隅 荒原 鉢巻 促す 己が 櫻樹 碑 御染筆	凡二時	傳次平が農業進歩の爲に全力を捧げ盡くし偉大な功績を稱へしめ、勤勞と熱心と趣味で一貫したその生涯とその人格を仰がしめる	(農村用) 第二十二課 船津傳次平	一、描寫修飾の妙味をよく味は、せる 二、語句の吟味も、單に意義の究明だけに止めてはならぬ 語の感じや修飾上の意義等をも悟らせる、こと	九、濱邊のにぎはしさ、いそがしさ 一〇、看船時の緊張した氣分 二、えつさ、えつさの景氣よまさ 三、獲物の山、海幸の喜悅

文	章	構	想	鑑
形式、口語常体、叙事文 修辭 擬聲——ざ、ざ、ざ、やつき、ほいさ、ねつさ、ねつさ、だぶりさ 修飾と形容——ぼつつり小さく 湧く／＼……小さい船が一つ又二つ 追つては逃げ 逃げては追ふ 仁王のやうになくましい 瑠璃のやうにすんだ目 紫を含んだ青色の背	一、夕日に光る海邊の景色 二、入船の知らせ 三、入船を待つ漁村の人々 四、歸船の遠景 五、大漁の目標と喜びかへる村の人々 六、濱のにぎはしさ 七、歸り着く船の壯觀 八、船から下される海幸の山	一、出生生地とその少年時代 二、理論の應用と研究 三、水源涵養の功績 四、郷里に於る農業指導 五、大久保利通の知遇 六、駒場の開墾生活 七、利通の訪問と天職即趣味の生活 八、實力 九、逸話 熱心さ 二、記念碑 病歿 著書	一、少年時代の熱心さ 二、實際に着眼する明るさ 三、水源涵養に實した功勞 四、郷黨の指導の熱心さ 五、大久保利通の農業施設に致した功勞と、人物を天下に求める熱心さ	一、出生生地とその少年時代 二、理論の應用と研究 三、水源涵養の功績 四、郷里に於る農業指導 五、大久保利通の知遇 六、駒場の開墾生活 七、利通の訪問と天職即趣味の生活 八、實力 九、逸話 熱心さ 二、記念碑 病歿 著書

賞	
<p>六、利通自ら一百姓の傳次平に會見し非凡を見抜いた偉さ</p> <p>七、知遇に感じる真心と感謝の情</p> <p>八、駒場での開墾の熱心さ 自らを人夫の中に投ずる熱</p> <p>九、學理上の調査研究は夜でよい——精力の偉大さ</p> <p>一〇、駒場野や開き残りしくつわ蟲 詩趣の横溢と忙中の閑日月</p> <p>一一、外國人の教師に打勝つ腕前 俚諺「論に負けても實に勝て」（第十一課）と照應するがよい 彼は結核實にも論にも勝つたのだ</p> <p>一二、逸話、眞理を究め且つ之を應用して見ねば置かぬ熱心さ</p> <p>一三、藍綬褒賞下賜の名譽</p> <p>一四、死後の榮譽</p>	
注	
<p>一、傳次平の寸暇なき日常生活とその熱意が山であるそれで居て散文をものする閑日月と野趣とを持つてゐたのだ、その邊の味を棄て、はならぬ</p>	
<p>（農村用）第二十三課 漁船歸る</p> <p>男子用 第二十二課参照</p>	

第一學年 第二學期

約十六週凡六十四時間（二週四時）

月 九		月 週
週 一 第		週
要		目
<p>第二十三課 かぶと蟲</p> <p>昆蟲採集の一挿話である、かぶと蟲にからんだ少年時代の思ひ出に、蟲と子供の生活をふりかへつて見た時の一種言ひ難い美しい情調に浸らせる</p> <p>寺田寅彦（吉村冬彦）「藪柑子集」</p> <p>凡時</p> <p>蟲捕網。日。盛。捕つて。熱湯。捕らへる。器。木陰。途方。空。</p> <p>二の丸 三の丸 菓子折 朽木 みぎは 途方にくれ</p> <p>形式 口語體、敘事文</p> <p>修辭 草木の強い香 蟲は火のやう いかめしい角 胸をミジスカす 包みきれぬ喜び かはゆいあごに かけて 目を圓くして きまりの悪いやまな嬉しい</p>		<p>月 週</p> <p>要</p> <p>章 やうな 嬉しいやうな惜しいやうな かつて感じたことのない心持</p> <p>一、昆蟲採集を樂しんだこと（序説）</p> <p>二、その樂しい思ひ出</p> <p>三、かぶと蟲を捕らへた嬉しさ</p> <p>四、知らぬ母子に會つて、そのかぶと蟲を遣つてしまつた思ひ出</p> <p>五、追懷</p> <p>鑑</p> <p>一、蟲捕りの趣味と樂しさ——炎天をも厭はぬ熱心さ</p> <p>二、標本の漸次と集まつて行く嬉しさ</p> <p>三、年をさるにつけて面白く、こどもにも色々出會つたが、さういふ追懷の情となつたか、少年時代の思ひ出</p> <p>四、常山木の描寫の妙所</p> <p>五、かぶと蟲を見つけて躍り立つ心</p> <p>六、それを捕らへた時の嬉しさ</p> <p>七、母子の描寫のうまさ——子供の可愛らしさ</p>

週二第					
賞	注	意	要旨	間時	語
八、子供がかぶと虫に心を奪はれて駄々をこねる有様の真に迫つた描写 九、母親の氣持、子供の心 一〇、思ひ切つてそれを遣つてしまふ美しい情愛と満足 一一、追懐の情と餘韻	一、主観と客観とが つに融けあつた實に巧な寫實である それに思ひ出といふ幕をかけて仄かな情趣が溢れ漂ふてゐる これを捕へなければならぬ 二、人情の機微に入つた描寫のあたり、しんみりその情緒を味は、せること 理窟は抜きにして	スバルタ武士の、剛健、素朴、尙武、勤儉、犠牲的精神等、その緊張した氣風を偲ばせる	凡三時	偶然 王族 鍊磨 士氣 餘力 靴をうがつ 飢渴に耐ふ 簡明 健舌 謙讓 長幼の序 揚々 潤歩 懲戒 公式 祭儀 祖國 面目の一端 美談 自若として	偶然、收容、鍊磨、劍舞、忍耐、鍛錬、寝ぬる飢渴、耐ふる、謙讓、揚々、鍛ふ、希ふ、天日雲霞、叱す、義烈、花冠、戒む。

句	文	章	構	想	鑑	賞	注
叱す 忠勇義烈 盾 塵潔 克己 氣象	形式 文語体、記事文 修辭 精神燃ゆるが如く、いざ試みよう。 死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんより玉となりて碎けん 軍勢山野に滿ち 軍旗空をおほひて天日見えす 敵勢雲霞の如く、其他簡潔な力強い手法	語法 こそ— けれ 是— 爲なり 死する能はざる	一、スバルタ武士の聲譽(序説) 二、國立教育所の狀況 三、教育所に於ける青少年教育の一般 四、青少年の對社會的生活の狀態 五、公民としてのスバルタ武士 六、玉碎を貴ぶ氣風 七、スバルタ武士の勇武を物語る美談六篇	一、嚴格な國立教育所に於る教育に耐へしの子少年達の意志の強さ(種々具體的に) 二、青少年が謙讓の美德 三、公式、祭儀に於ける合唱が語る士氣の雄々しさ 四、美談、各篇に表はされたその意氣と壯烈さ 特に婦人の心境	一、教育上の問題を免や角言はれる課である 確固と	一、スバルタ武士の、剛健、素朴、尙武、勤儉、犠牲的精神等、その緊張した氣風を偲ばせる	凡三時

第二十五課 統計					
賞	注	意	要旨	間時	語
した教授の態度を持して居なければならぬ 二、ミリタリズムの鼓吹ではない たゞそんな風な面影を偲ばせて、輕佻淨薄な現代の人心に幾分でも或る反省を與へさせればよいのだと思ふ 三、筆談の情趣を特にしんみり味は、せよ	統計に對する理解を得させ その文化的な意義と價値を悟らせる	統計に對する理解を得させ その文化的な意義と價値を悟らせる	統計に對する理解を得させ その文化的な意義と價値を悟らせる	凡二時	統計、不能、特殊、印象、審、事項、多寡、自然現象、社會現象、學術的研究、事項、現象、印象、異、婚姻、觀察、一見、整然、事物、現象、印象、形式、文語体、説明文、修辭、簡潔な多少學術的な手法、語法、なきにあらざる……を知るべく……うかがふべく……得し

週三第					
句	文	章	構	想	意
深山から伐出された木材が筏に組まれて急流激潭を縫うて海邊に運搬される迄の経路を知らせ、壯快な筏流しの景趣を味は、せる	形式 文語体、記事文 修辭 精神燃ゆるが如く、いざ試みよう。 死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんより玉となりて碎けん 軍勢山野に滿ち 軍旗空をおほひて天日見えす 敵勢雲霞の如く、其他簡潔な力強い手法	語法 こそ— けれ 是— 爲なり 死する能はざる	一、スバルタ武士の聲譽(序説) 二、國立教育所の狀況 三、教育所に於ける青少年教育の一般 四、青少年の對社會的生活の狀態 五、公民としてのスバルタ武士 六、玉碎を貴ぶ氣風 七、スバルタ武士の勇武を物語る美談六篇	一、嚴格な國立教育所に於る教育に耐へしの子少年達の意志の強さ(種々具體的に) 二、青少年が謙讓の美德 三、公式、祭儀に於ける合唱が語る士氣の雄々しさ 四、美談、各篇に表はされたその意氣と壯烈さ 特に婦人の心境	一、教育上の問題を免や角言はれる課である 確固と

賞	鑑	想	構	章	文	句語	字文	備準	間時
四、筏流しの辛苦		八、筏流しの辛苦と同情	四、山出しの一方方法 五、山出しの困難	一、製材所に於ける木材集積の壯觀 二、河口に下り集る筏の壯觀 三、山出しの辛苦	形式 文語、傳記評論風の記事文 修辭 努力の結晶 如何ばかりなりけん かなはすなる 夢中をたどる心地 言を費せども舌の疲るゝまてには至らず 功も亦没すべからず 宜なるかな 語法 至らんや なりけんこそ——らるれ	わけもなく せき止める 堰 あば 標準 勝地 筏 <small>いかだ</small> 。氣長 <small>きなが</small> 。管流し <small>くだり</small> 。尺締 <small>しゃくじめ</small> 。操 <small>あやつ</small> る。	凡二時	瀧八丁、九里峽、筏流し、貯木場等の寫眞繪畫	

語	字	文	備準	間時	所出	旨	要	注
小説家 著作 雜著 無慮 構想 大作 過度 逆上 口痛 わづらひ 謹直 義理 書肆 なほざり 攝生 明を失す 負けじ魂 せんかたなし 遺憾 かなはす 宜 <small>うべ</small> 。亦 <small>も</small> 。	馬琴肖像 八犬傳其他著書	凡三時	瀧澤馬琴八犬傳後記「回外刺筆」中等國文教科書	馬琴が大作八犬傳の著作をなす間の、血のにじむやうな苦心の跡を偲び稱へしめる	（農村用）第二十六課 統計 男子用 第二十五課参照	第二十七課 瀧澤馬琴の苦心	一、説明文であるため、背景の描寫等が割合に大きづばであるから、色々の方法で活かして見たいと思ふ 二、詩情といふやうなものも味は、せれば結構だ	一、用語 語法共に古体を帯びてゐるから、讀解上力を注ぐこと 二、八犬傳の略筋を知らせてもよからう

週四第

賞	鑑	想	構	章	文	句語	字文	備準	間時
二、嫁の功績——馬琴の述懐		六、完成の喜悦と稱讚 一、馬琴の刻苦精勤	四、失明による悲惨な心境 三、誠直さと義理堅さ	一、序説、大作八犬傳の指示馬琴とのアウトライン 二、執筆の熱心と義理堅さ 三、失明の不幸 四、完成の苦勞、嫁の苦惱と功績	形式 文語、傳記評論風の記事文 修辭 努力の結晶 如何ばかりなりけん かなはすなる 夢中をたどる心地 言を費せども舌の疲るゝまてには至らず 功も亦没すべからず 宜なるかな 語法 至らんや なりけんこそ——らるれ	辨す 境遇 失望落膽 期待にこたふ 口授 雅言 句讀 まして いたはしき 偉なる 俺まで 局を結ぶ 宜なるかな	凡二時	瀧澤馬琴八犬傳後記「回外刺筆」中等國文教科書	

想	構	章	文	句語	字文	間時	所出	旨	要	注
四、産地と保護	三、外敵	二、習性	一、やまあらしの珍奇な形態	形式 口語常体、説明文 修辭 流暢平易な修辭で終止して、しかも面白くその氣分を出してゐる	逆立 <small>さかた</small> てる。前脚 <small>まへあし</small> 。捜 <small>さが</small> す。滑稽	凡二時	榎本秋村「生物奇談」	奇獸の一つとしてのやまあらしの習性の面白さを味はせ、大自然の妙趣に觸れしむ	（農村用）第二十七課 筏流し 男子用 第二十六課参照	第二十八課 やまあらし

週五第						
備準	間時	所出	要旨	賞	注	鑑
筆の實物 又は寫眞繪畫類 雅樂演奏繪畫類	凡一時	坪内逍遙作長詩に據る	優にやさしい武人の風雅を偲び、道のために盡くす美しいその心境を汲み味は、せる	(農村用)第二十八課 龍澤馬琴の苦心 男子用 第二十七課参照	一、理科的の材料であるが、理科的の取扱に終始せぬやう、讀本では、その理科的な材料の間から讀本としての想のあることを忘れてはならぬ	一、珍妙な形態の面白さ 二、恐ろしい形相のくせに憶病な性分を有つ面白さ 三、消極的な外敵防禦法の面白さ 四、象があつげに取られてゐる滑稽さ 五、蟻にはかなはぬさいふ点 六、熊のかしこさ 七、熊が馬鹿にされてゐる滑稽さ 八、最後の行の感想

月 十

文	間時	要旨	賞	注	鑑	文	句	語	字
異境。逐げて。至樂。錦。不毛。嬉戯。白ら。	凡二時	故郷に對する懐しさを思ひ起さしめ 愛郷愛國の精神の據つて來る所を味ひ 海外發展の志操を培ふ	一、山路にひびく深夜の筆の音 二、秘曲を調べ傳へる義光の胸中 三、時秋が主思ひの眞情 四、道の爲に死後の計を廻らす悲壯な胸中 五、別離の悲しみ	一、詩情を第一とすること 二、史實や考證についての詳細なる説明は不用	形式 文語体、韻文、七五調四句一聯叙事詩 修辭 空すみ渡る 筆の音 歸れ、とく(倒置) 野末の露と消えん時 露けき袖を分ちけり 語法 渡しつ、にあらでは…傳ふべき	敢へて 坦々たる 普空 長者 化して 芹唐 木訥 冥々 教誨 さわやぐ 宮居 延喜式 由緒 崇敬 文書 參酌 さ、やか 一輪 傳統 穠々、うた、 油然 悠久 往時	よは そばだて、汝 秘曲、とく ためらふ 、がなけれ 耳にしめ	眞清水。秘曲。調。部路。野末。	形式 文語、記事文 修辭 敢へて誇るべきなく…敢へて語るべきなし

第三十課 故郷

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字
六、最後の詩の味	五、眞の愛郷心と海外發展の意氣 四、遠ざかるに従つて更に強烈の度を加へる心情 三、草はしさの理由の情趣 二、立志成功して郷に錦を飾る男子の本懐 一、望郷の念の切々な感じ	五、結論(主想、論点)	四、故郷を離れ遠ざかるに従ひその念の切々な所以 三、故郷の意義 二、望郷の念の切なる所以 一、切々な望郷の念	誰か——察せざらんや 豈た——のみならんや 語法 非すや なんば非す 况や——於てをや	形式 文語体、論文 修辭 齒切れのよい漢文口調を以て終始する 引用法 漸層法等有り 心中に往來す 榮成り名遂げ 人生の至樂 錦を着て故郷に歸る 嚴寒不毛の地—— 百花咲満つ南方溫暖の地 木石亦知友の感云々	故舊。範圍。極遠。友邦。競ふ。青山。歎んで。	風物 異境 風土 嚴寒不毛 墳墓の地 誦す 極遠の地 戀々として 強固 貢獻 青山	形式 文語体、論文 修辭 齒切れのよい漢文口調を以て終始する 引用法 漸層法等有り 心中に往來す 榮成り名遂げ 人生の至樂 錦を着て故郷に歸る 嚴寒不毛の地—— 百花咲満つ南方溫暖の地 木石亦知友の感云々

文	間時	要旨	賞	注	鑑	文	句	語	字
修辭 敢へて誇るべきなく…敢へて語るべきなし	凡二時	我等を(我等の遠き祖先をも)温い愛の懷に抱いて哺くみ育てた郷土のしたはしさ、なつかしさを味は、せ切々たる望郷の念あらしめる	一、山路にひびく深夜の筆の音 二、秘曲を調べ傳へる義光の胸中 三、時秋が主思ひの眞情 四、道の爲に死後の計を廻らす悲壯な胸中 五、別離の悲しみ	一、語調語感のひびきをも、じつと味は、せること 二、男性的な文でそして又、人情の滿ち溢れた文である 智さ情のしつれに言ひ難い味がある。	形式 文語、記事文 修辭 敢へて誇るべきなく…敢へて語るべきなし	敢へて 坦々たる 普空 長者 化して 芹唐 木訥 冥々 教誨 さわやぐ 宮居 延喜式 由緒 崇敬 文書 參酌 さ、やか 一輪 傳統 穠々、うた、 油然 悠久 往時	よは そばだて、汝 秘曲、とく ためらふ 、がなけれ 耳にしめ	眞清水。秘曲。調。部路。野末。	形式 文語、記事文 修辭 敢へて誇るべきなく…敢へて語るべきなし

(農村用)第三十課 郷土

章	構	想	徴
いふなけれ 掌大の田園 川に臨んでは……山間に位しては…… 碧空の……又は大洋の洋々たるをよし奇勝にあらずといふもしかも甚だ愛すべきものに非ずや 古人木訥の心さながら通ふが如くしかも冥々のうちに郷人を教誨せしもの少からず 心自ら純に氣自らさわやぐ 兵馬のちまたを化しけん 思へばそもそも……芽生はそめ咲きそめにけん 観ずれば……にも……種々たる美田 一片の月山上にかゝる時 うたゝ感慨の深きをおぼゆ 故人も舊知の感あり悠久たる往時も之を目前に見るが如き心地す 語法 いふなけれ よし しかも たま／＼ 化しけん そめにけん もとこれ 致ししなるべし うたゝ切ならざらんとするも得べけんや。	一、清淨の天地 二、山、沿の傳説 三、氏神 四、史跡 五、懐古の情 六、愛郷の念	一、山村の情景野趣 二、天狗山傳説の持つ味 三、沼澤傳説の持つ味	

週六第

賞	注	意	第一課 農業	要旨	所出	間時	文
四、鎮守社の崇嚴さ 五、地名考の面白さ 六、一輪の野花にも傳統を思ひ浮べる情調 七、祖先の生活——なつかしさ 八、祖先の功績——感謝 九、悠久たる往時、山川有情切々たる愛郷の情	一、修飾が非常に多い 又一種の力強さを感じしめる よく味は、せること 二、各の郷土を自ら回顧せしめよ 三、愛郷の念は單なる美的情緒ではない。もつと深い根ざしがなくてはならない その根本的のものをいふのでなくてはならない	農業に従事するもの、幸福と、自然の中の生活が如何に興味あるものかを味は、せる	徳富蘇峰「蘇峰文選（農業の快樂）」 凡二時	機邊。忙殺。快い。禁物。和樂。總出。妙趣。	凡二時	機邊。忙殺。快い。禁物。和樂。總出。妙趣。	

卷二

第一課 農業

第二課 堀田瑞松

字	語	句	文	章	構	想	鑑	賞	注
傍觀 辛苦 愈々	忙殺 すがくしい 一家一心 妙趣 觀察者 傍觀 的 風流者 觀じ來る	形式 口語常体、評論文 俳辭 目の目も見ずに 人生に於てこれほど……ある であらうか 忠實な自然の觀察者 山は愈々……野 は益々 手法は先づ命題を掲げてその所以を説くといふ形式	一、農業は身体を健康にする 二、農業は必然に又精神を健康にする 三、農業はよく家庭的和樂を興へる 四、農業は趣味に生かせる 五、結論	一、清い空気が快い日光の中の労働 二、人力の限りをつくして自然に任せる——人力と自然の融合 三、晩餐の楽しさ 四、自然に投じ自然物を創造する趣味	一、理論の進め方とその断定に注意 二、農業に安住し得る志操を養ふといふ態度がほしい				

週七第

賞	注	意	第一課 農業	要旨	所出	間時	文
名工が一つの製作をなすまでにどれほどの苦辛を拂ふものかといふ精進の跡を偲び、業に絶したその藝術家氣質を稱へしめる	和田垣謙三「兎糞錄」 凡二時	鐵筆。載す。縁ある。千狀萬態。飛騰。變幻。如かす。慘狀。思ふ節。猛雨。衝く。浮動。疾く。脱ぐ。記憶。師事。造物。覆す。	御説 縁ある 千狀萬態 飛騰 變幻出沒 妙趣 如かす 心になかふ 呈す 思ふ節 猛雨を衝く いたかな 技に熱心なる 志なくじく 御用 雄々しく 橋げた 藻屑 寂感 謙遜 師事 造物	形式 文語、叙事文 修辭 波の形たるや、或は集り或は……或は……或は…… 變幻出沒…… 如かす……せんには 盆を覆す 猛雨を衝きて いたかな 風益々……雨愈々……水中の藻屑となる 見極めざる上は 呼べど叫べど これぞと思ふ形 脱ぎもやらで 一氣に	凡二時	鐵筆。載す。縁ある。千狀萬態。飛騰。變幻。如かす。慘狀。思ふ節。猛雨。衝く。浮動。疾く。脱ぐ。記憶。師事。造物。覆す。	

章	構	想	鑑	賞	注	意
語法 務めけるが 形こそよけれ 如かずせんには ありけん さばかりの事 退かじ なすべきのみ	一、置物蓋製作の御説 二、考案の妙と苦心 三、京都の大雨と瑞松の決心 四、橋上の冒険と製作の成功 五、藝術的信念	一、御説の名譽 二、考案の妙味と自然觀照の苦心 三、藝術の爲に身命を顧みぬ熱烈な精神 1、家人の心、瑞松の決心 2、橘番の驚き 3、橋上の恐ろしさと瑞松の心境 4、靈感を得た時の胸中 四、濡衣のまゝ、刀を執る心境——製作の三昧 五、成功と名譽 六、自然を師なりと叫ぶ主義信念の強さ	一、傳記的な補説が多少必要であらうと思ふ 二、力の満ちた筆力を感じねばならぬ 三、藝術的な心境の取扱は餘程しんみりとやらねばならぬと思ふ			

所出	間時	文	字	語	句	文	賞	注	意
徳富健次郎「みみすのたはこま」 凡二時		修辭 地に黄金の穂波が明るく照渡る 一雨々々に氣は冷えて行く 御納戸色の小さなコップを幾つも連れてりんだうが咲く ざんぐりがはうきで掃く程だ空は高くなればかん／＼音のしさうな碧瑠璃に落葉樹が最後の榮を示して黄に茶に紅に照渡る 光明は空から降り地からも湧いて来る 何といつてももうしめたものである	前二、榮。尺竹の畝	性念にきれいにならず 尺竹 繩すり かみさん 碧瑠璃 さえる ねびす請 小春		形式 口語、記事文	一、十月の感じ 二、雨、きのこ、甘藷		

想	鑑	賞	注	意	旨要
三、木々、種時 二 一、霜、紅葉の美、行事	一、日かめつきり短くなり、色々の景物に漂ふ十月の感じ 二、黄金の穂波の情趣 三、柿と蜻蛉に夕日に水霜——秋の色 四、茸狩の面白さ 五、茶の花のつゝまじやかさ、木の實の美 六、種時の忙しさ、種時の風情 七、秋の月夜の詩情 八、紅葉の美 九、村の學校の運動會の楽しさ 一〇、ねびす請——行事にあらはれる農村情調 二、小春日和の長さ	一、蘆花一流の叙景味だ 月並のやうでなか／＼さうではない 景物點綴の巧みな所、ひなびだ情趣の表現など、十分味はせるがよい 二、「夢秋」の文に續いたものだ、そのつもりで			月光の美を讀へ、月に對する雅懐を有たせる

所出	間時	文	字	語	句	文	賞	注	意
芳賀矢一「月雪花」 凡二時		美醜 照波 萬象 清涼 詩的情緒 油然 野蠻人 歌舞 千草 憂愁 苦悶 吟詠 詩歌 感吟 萬星 冷塊 古往今來 千々	感吟 萬星 冷塊 古往今來 千々	美醜 照波 萬象 分別 慰安 慈愛 休息安靜 詩的情緒 千草 憂愁 苦悶 霞敷 吟詠 感吟 冷塊	形式 口語常体、評論 修辭 赫々として……の光である……である……である 油然として 椰子の陰 寒地の水の家 千草の露の玉毎に 冷たい光が……これ程の暖みを 與へたか 又與へつゝあるか	一、月光の美感 二、月光と人生	一、美文的な情調 二、月光に和む人の心 三、歌の想 四、月光と詩歌、人生	一、月の美は誰でも感じてゐるだらう それを本文によつて想起しつゝ味はせよよい 説明は入らない	

第三課 月の光

(農村用)第三課 稻 刈

要旨	稻刈に躍り上る歡喜の情「おほみたからの一人は我ぞ」 さいふ雄健な誇らかな心持を味はひ賞せしめる
間時	凡二時
文字	躍る。三春行樂。誰が。陰雨。泥。炎天。燒鎌
語句	三春行樂 陰雨 いかづち まみれ 燒鎌 利鎌 八束穂 垂穂 田ごま おしなべて おほみたから
文	形式 文語、韻文、七五調三聯新体詩 修辭 躍れ我が胸うしのほ如く 日こそ多きに今日しも今日ぞ 刈らん我が田の稻をし刈らん 三春行樂そは誰が事ぞ 我は大地に 自然の胸に…… 炎天の下いかづちの空 八束穂垂穂 刈るは誰が身ぞ 田ごま田ごまに おほみたからの一人は我ぞ 語法 今日しも今日ぞ 稻をし
構	一、みのりの田の豊けさ 二、稻刈りの歡喜 三、剛健な我が事業(回顧) 四、勇ましくりし辛苦の戦(回顧) 五、稻束を握る觸感、鎌の切味 六、めぐみとほこり
想	

週八第

要旨	一、稻の喜び——我等の喜び 二、今日しも今日ぞ 刈らん……刈らん 歡喜に満ちくた心 三、行樂を他所に大地に蹴打つ力強さ(嬉しき回顧) 四、自然に抱かれ其の胸に育てられる尊さ(同) 五、辛苦——雄々しく勇ましい戦(同) 六、鎌を研ぎ上げる心持 七、ぐつと握る稻束の觸感、歡喜 八、ざく／＼——鎌の切味 九、津々浦々の瑞穂を思ふ心 三、尊き私の仕事、有難い誇
間時	凡一時
文字	稲野。拓く。鎮め。大木。榮行く。御前。勤。鎮守。
語句	凡一時
文	鎮守社頭の莊嚴に心をうたせ、祖先を偲び、神靈を讃へ、誠心を捧げるといふ心を有たせる
構	一、雄健な力強さを見よ 力の詩である 二、心根に食ひ入るやうな法悦の心だ 上迂りした感傷で取扱ふてはならぬ
想	

第四課 鎮守に詣てて

要旨	一個人の行爲と社會とが如何なる關係にあるかを理會せしめ、社會奉仕の眞意義を悟らせる
間時	凡二時
文字	拓く 遺業 いつきまつる 鎮守の宮居 さわやぎ かしはて 神の御ほこ 鎮めと、います
語句	形式 文語、韻文 七五調 修辭 御ほここと 神々しくも、心ながら心に通ふ 語法 起しし 多かる 先づこそ いでや
文	一、祖先の遺業と鎮守の宮居 二、禮拜 三、祖先の追憶 四、祈りと覺悟
構	一、荒野開拓の祖先の事業を偲ぶ時の感じ 二、神城の尊嚴と靈威の神秘 三、社頭の杉を見上げる詩情 四、誠の祈の心 奮發の心
賞鑑	一、教訓に流れてはならない 詩情といふものから純粹な心持にならせて味は、せら
注意	

(農村用)第四課 社會奉仕の精神

第五課 社會奉仕の精神

要旨	一、孤立生活と團體生活——社會奉仕の精神とは二、日常の實踐奉仕
間時	凡二時
文字	孤立。單獨。嚴守。汚損。危念。孤兒院。會得。崇高。致へて。吾人。石塊。利慾。
語句	凡二時
文	修辭 得て望むべからず ……が如き……が如き……が如き 他人に對して有用なるべし 公益をばかるの第二步は 致すの道 ほしいま、にするの手段 援助するの心掛 顧みざるの精神 語法 有用ならん こころ期せざるべからず……となさんか……至るべし 致へて
文	形式 文語、論文 修辭 得て望むべからず ……が如き……が如き……が如き 他人に對して有用なるべし 公益をばかるの第二步は 致すの道 ほしいま、にするの手段 援助するの心掛 顧みざるの精神 語法 有用ならん こころ期せざるべからず……となさんか……至るべし 致へて
構	一、社會奉仕の精神 二、奉仕の實踐 三、英國少年義勇團の綱領 四、社會と個人との關係 五、社會事業に對する奉仕 六、奉仕の信念
賞鑑	
注意	

週九第

味	注意	要旨	出所	間時	文
<p>三、英國少年の意氣と精神 四、個人對社會關係の密接さ 五、社會事業奉仕の精神 六、吾人の抱くべき信念</p>	<p>一、論旨そのものに注意を向けしめて深く考へしめよ 二、味はひ考へしめ悟らせよ</p>	<p>ローマの建國時代に於て、國家の危急を救ひ壯烈な勳功を立てて、國家隆昌の基を開いた二勇士の燃ゆるが如き愛國の精神を讀へさせる</p>	<p>ホラチウスの美談は「ゴルドウヰン」「ヒフテイフエマズストロイ」及び「マコーレイ」の古羅馬の歌、ムキウスの美談は「ブルターク」の英雄傳</p>	<p>凡二時</p>	<p>大騒。拔群。多勢。無勢。先途。矢表。刺す。芽生。十重二十重。稀代。並居る。俸給。刺客。シカク。捕縛。膽力。寛大。責。頂戴。御一言。</p>

(農村用)第五課 護國の眼と腕
第六課 護國の眼と腕
男子用 第六課参照

字	語句	文章	構想
<p>一対。戴く。掛く。締結。圍。礎。支へる。投槍。</p>	<p>たちごころ。拔群。橋のたもと。矢表に立つ。しざる。獨眼。非運。稀代。刺客。捕縛。膽力。自若。不敵。寛大。あまえて。先驅。運拙く。ゆめく。締結。圍を解く。</p>	<p>形式 口語常体、叙事文 修辭 こゝを先途と。さんぶと川に。二葉の芽生で摘取られた。稀代の勇士。言ひさま。じりじり燃え出す。不敵に吞まれて。鬼をもひしぐ。烈火の責よりも苦しう存じます。 語法 ……してくれよう。ゆめゆめ</p>	<p>一、ローマとエトルリヤの對抗とローマの戦略 二、ホラチウスの奮戦と負傷、功名 三、ホラチウスの名譽勳功と市民の感謝 四、エトルリヤの再舉とローマ重圍 五、ムキウスの武勇と捕縛 六、處刑の際に見せた豪膽と王の寛大に對した態度 七、和議を促進したムキウスの功と市民の喜び 八、結語</p>

鑑	賞	注	意	要
<p>一、三人の奮戦、落橋の準備 二、單身最後まで踏止る豪勇 三、落橋を見て先づ「ローマは安心」と感じる偉大さ 四、目を刺され河へ飛込むあたりの描寫 五、ホラチウスに對する市民の感謝 六、再度の重圍に陥つた市民の困窮不安 七、刺客としてのムキウスの働き 八、烈火の中に右腕を突込んで燃やして見せる豪膽さ 九、王の感激</p>	<p>一、王の寛大に態度一變するムキウス 1、態度の一變 2、寛大が烈火の責より苦しいといふ詞の味 二、和議の成立とムキウスの武功 三、結尾の餘韻</p>	<p>一、原據を参照して補足する方がいゝだらう 二、言語に絶した豪膽な振舞も要は「國家のため」に外ならぬ。徒な武辨的物語に解してはならぬ 三、ローマは一日にして成らず、建國からその全盛に至る迄に幾多の貴い犠牲のあつたことを忘れてはならぬ</p>	<p>(女子用)第六課 國字四書</p>	<p>遺子の教育に一身を捧げ、遂にその丹精は報いられ、</p>

字	語句	文章	間時	出所	構想
<p>食祿。生計に事缺く。慈む。もの學びに行く。しれく。る。まに。く。もて。しか。く。心にしめ。拮据。勉勵。心血。こふる思。おふし立て。あはれ。鑑。</p>	<p>形式 文語、記事文 修辭 一子をまうけぬ。歸らぬ旅に出立つ。母のあるあり。年重りければ。此處は斯く。……其處はし。かじか。一字一句母が心血のこもれるものなるを。紙魚のすみかさなす。あはれ。おふし立つ。語法 いかでが。得べき。遅からじ。讀まんぞ。正しき。あはれ。こそ。けれ。もて</p>	<p>松浦政泰「婦人善譚」中の四書の假名書 凡二時 繁乃、人名。膝下。歸。抱へ。主。早世。事缺く。絲。練。慈む。己。密かに。興。謙。館。請受け。鑑。</p>	<p>立身出世をする迄の艱難辛苦の有様を偲び、美はしい賢母の愛と情に感激せしめる</p>	<p>一、生計、養育の辛苦 二、四書素讀の指導につくした真心 三、子の立身出世と子の感激</p>	

月一十													
週十第													
意		注		賞		鑑		旨					
<p>一、か弱い一寡婦が貧窮の底に其の日々の活計にあへぎながら、しかも美はしい眞情を寄せて我子を慈しみ育て上げた、母としてのその眞の愛を汲み取らせることに骨折らねばならぬ 下手に教訓を強ひて文の本旨「世の常とは言ふもの、斯くばかり眞心もてその子をおふし立てしもの、思ふに世には少かるべし」の眞意に外れてはならない</p> <p>二、性辭語法 共に古調を帯びてゐる 語感等特に吟味の必要あるべし</p>		<p>一、生計の苦しさを切抜ける辛苦 絶大な母の愛</p> <p>二、假名書四書を作るほどの熱情</p> <p>三、立身と母の嬉しき 子の感激</p> <p>四、歌の眞意 母性愛</p> <p>五、眞情と賞讃</p>		<p>四、賞讃(主想)</p>		<p>一、垣根巡りを運動遊戯にする猫らしい着想の面白さ</p> <p>二、鳥に對つての心理的描寫の味</p> <p>1、これは舞禮なやつた云々</p> <p>2、籍もない分際で——法があるか</p> <p>3、にや／＼笑ふ鳥</p> <p>4、何か食つて來たに違ひない——觀察の奇抜</p> <p>5、三分間の猶豫</p> <p>6、感じの悪い奴</p> <p>7、威光に恐れて逃げたと思つたら云々</p> <p>8、黒裝束云々——恐れ</p> <p>9、めんどうだから——退却の心</p> <p>10、「あはう」の鳴聲に立腹する</p> <p>11、かんしやくに障る——のそ／＼、残念さ</p> <p>12、失敗 づぶさい奴 少々うなる</p> <p>三、鳥の動作描寫の味</p> <p>四、あきらめの理窟に含む味はひ</p> <p>1、超然主義めいた見方</p> <p>2、機を見るに敏云々——ユーモア</p>		<p>一、江戸ッ兒風の新語法が多い 現代語だから特に注意を拂ふ方がよい</p> <p>二、徹頭徹尾鑑賞である 笑ひと 低徊との絶えざる葛藤進行である</p> <p>三、漱石に關する一般的な補説を必要と思ふ</p>		<p>一、か弱い一寡婦が貧窮の底に其の日々の活計にあへぎながら、しかも美はしい眞情を寄せて我子を慈しみ育て上げた、母としてのその眞の愛を汲み取らせることに骨折らねばならぬ 下手に教訓を強ひて文の本旨「世の常とは言ふもの、斯くばかり眞心もてその子をおふし立てしもの、思ふに世には少かるべし」の眞意に外れてはならない</p> <p>二、性辭語法 共に古調を帯びてゐる 語感等特に吟味の必要あるべし</p>		<p>一、垣根巡りの發見</p> <p>二、鳥との出會</p> <p>三、鳥から受けた輕侮</p> <p>四、鳥に肉迫する</p> <p>五、失敗</p> <p>六、あきらめ</p>	
<p>(農村用)第六課 猫の垣巡 男子用 第七課參照</p>													
<p>第七課 猫の垣巡</p>													
<p>有名な漱石の猫である 輕快なユーモア超然とした禪味 低徊的な情趣等を味はしめ その作風の一端に觸れさせる</p>													
<p>夏目金之助「我輩は猫である」</p>													
<p>凡二時</p>													
<p>原本「我輩は猫である」</p>													
<p>垣巡。損ふ。首尾。籍。分際。お慰。驚當。黒裝束。人体。嘴。申子。退却。看過。鳥輩。諺。度胸。障る。侮辱。</p>													
<p>逗留 障害 黒裝束 人体 おつに 深入 看過 邸内 鳥合の衆 づぶさい</p>													
<p>形式 口語常体、叙事文</p> <p>修辭 籍もない分際 首尾よく行くとお慰 にやにや笑つてゐる 感じの悪いやつ 黒裝束……不都合だめんどうだからいつそさやう仕らうか おつにさがつて 度胸をすみて かんしやくに障る はつと思つたら づぶさいやつだ きれいきつぱりと</p> <p>語法 たゞさへ 現んや おつに</p>													
<p>一、海洋の事情と生物</p> <p>二、含有鹽分の多少</p> <p>三、含有鹽分の多少と生物</p> <p>四、海水の温度と生物</p> <p>五、海底事情と生物</p> <p>六、潮流と魚族の移動</p> <p>七、海流と水産</p>													
<p>(農村用)第七課 海洋</p>													
<p>四、作品 寫眞等の準備も多い方がよいだらう</p> <p>五、補材として何かの作品を紹介するのもよからう</p>													
<p>海洋に關する一般的な理解を得しめ、水産業國の國民たるの自覺あらしむ</p>													
<p>凡二時</p>													
<p>舞臺。棲む。淡水。鹽分。濃度。深海。水深。冷血。搜集。緩やか。浮遊。海藻。干潮。潮流。黒潮。親潮。</p>													
<p>舞臺 檢する 漏斗狀 放發 生存</p>													
<p>形式 口語、説明文</p> <p>修辭 水産業の舞臺 多大の効果をあげる 水産國たらしめる</p>													

月一十													
週十第													
意		注		賞		鑑		旨					
<p>一、か弱い一寡婦が貧窮の底に其の日々の活計にあへぎながら、しかも美はしい眞情を寄せて我子を慈しみ育て上げた、母としてのその眞の愛を汲み取らせることに骨折らねばならぬ 下手に教訓を強ひて文の本旨「世の常とは言ふもの、斯くばかり眞心もてその子をおふし立てしもの、思ふに世には少かるべし」の眞意に外れてはならない</p> <p>二、性辭語法 共に古調を帯びてゐる 語感等特に吟味の必要あるべし</p>		<p>一、生計の苦しさを切抜ける辛苦 絶大な母の愛</p> <p>二、假名書四書を作るほどの熱情</p> <p>三、立身と母の嬉しき 子の感激</p> <p>四、歌の眞意 母性愛</p> <p>五、眞情と賞讃</p>		<p>四、賞讃(主想)</p>		<p>一、垣根巡りを運動遊戯にする猫らしい着想の面白さ</p> <p>二、鳥に對つての心理的描寫の味</p> <p>1、これは舞禮なやつた云々</p> <p>2、籍もない分際で——法があるか</p> <p>3、にや／＼笑ふ鳥</p> <p>4、何か食つて來たに違ひない——觀察の奇抜</p> <p>5、三分間の猶豫</p> <p>6、感じの悪い奴</p> <p>7、威光に恐れて逃げたと思つたら云々</p> <p>8、黒裝束云々——恐れ</p> <p>9、めんどうだから——退却の心</p> <p>10、「あはう」の鳴聲に立腹する</p> <p>11、かんしやくに障る——のそ／＼、残念さ</p> <p>12、失敗 づぶさい奴 少々うなる</p> <p>三、鳥の動作描寫の味</p> <p>四、あきらめの理窟に含む味はひ</p> <p>1、超然主義めいた見方</p> <p>2、機を見るに敏云々——ユーモア</p>		<p>一、江戸ッ兒風の新語法が多い 現代語だから特に注意を拂ふ方がよい</p> <p>二、徹頭徹尾鑑賞である 笑ひと 低徊との絶えざる葛藤進行である</p> <p>三、漱石に關する一般的な補説を必要と思ふ</p>		<p>一、か弱い一寡婦が貧窮の底に其の日々の活計にあへぎながら、しかも美はしい眞情を寄せて我子を慈しみ育て上げた、母としてのその眞の愛を汲み取らせることに骨折らねばならぬ 下手に教訓を強ひて文の本旨「世の常とは言ふもの、斯くばかり眞心もてその子をおふし立てしもの、思ふに世には少かるべし」の眞意に外れてはならない</p> <p>二、性辭語法 共に古調を帯びてゐる 語感等特に吟味の必要あるべし</p>		<p>一、垣根巡りの發見</p> <p>二、鳥との出會</p> <p>三、鳥から受けた輕侮</p> <p>四、鳥に肉迫する</p> <p>五、失敗</p> <p>六、あきらめ</p>	
<p>(農村用)第六課 猫の垣巡 男子用 第七課參照</p>													
<p>第七課 猫の垣巡</p>													
<p>有名な漱石の猫である 輕快なユーモア超然とした禪味 低徊的な情趣等を味はしめ その作風の一端に觸れさせる</p>													
<p>夏目金之助「我輩は猫である」</p>													
<p>凡二時</p>													
<p>原本「我輩は猫である」</p>													
<p>垣巡。損ふ。首尾。籍。分際。お慰。驚當。黒裝束。人体。嘴。申子。退却。看過。鳥輩。諺。度胸。障る。侮辱。</p>													
<p>逗留 障害 黒裝束 人体 おつに 深入 看過 邸内 鳥合の衆 づぶさい</p>													
<p>形式 口語常体、叙事文</p> <p>修辭 籍もない分際 首尾よく行くとお慰 にやにや笑つてゐる 感じの悪いやつ 黒裝束……不都合だめんどうだからいつそさやう仕らうか おつにさがつて 度胸をすみて かんしやくに障る はつと思つたら づぶさいやつだ きれいきつぱりと</p> <p>語法 たゞさへ 現んや おつに</p>													
<p>一、海洋の事情と生物</p> <p>二、含有鹽分の多少</p> <p>三、含有鹽分の多少と生物</p> <p>四、海水の温度と生物</p> <p>五、海底事情と生物</p> <p>六、潮流と魚族の移動</p> <p>七、海流と水産</p>													
<p>(農村用)第七課 海洋</p>													
<p>四、作品 寫眞等の準備も多い方がよいだらう</p> <p>五、補材として何かの作品を紹介するのもよからう</p>													
<p>海洋に關する一般的な理解を得しめ、水産業國の國民たるの自覺あらしむ</p>													
<p>凡二時</p>													
<p>舞臺。棲む。淡水。鹽分。濃度。深海。水深。冷血。搜集。緩やか。浮遊。海藻。干潮。潮流。黒潮。親潮。</p>													
<p>舞臺 檢する 漏斗狀 放發 生存</p>													
<p>形式 口語、説明文</p> <p>修辭 水産業の舞臺 多大の効果をあげる 水産國たらしめる</p>													

吟	味	注	意	要旨	所出	間時	文	字	語
一、海洋事情に通ずることの必要なる所以 二、鹽分の含有量に相違の生ずる理由 三、鹽分の多少、生物との關係 四、溫度の相違と生物の受ける影響 五、海底の事情と生物の關係 六、潮流の利用 七、海流の恩恵	一、理科的材料である。しかしその理科的事項を理解して更に心に芽生える「或る物」が大切なのである 二、理科的吟味を餘り深めて行くよりも、それ等の影響の面白さを味はせる方がよいだらう	一、理科的材料である。しかしその理科的事項を理解して更に心に芽生える「或る物」が大切なのである 二、理科的吟味を餘り深めて行くよりも、それ等の影響の面白さを味はせる方がよいだらう	一、理科的材料である。しかしその理科的事項を理解して更に心に芽生える「或る物」が大切なのである 二、理科的吟味を餘り深めて行くよりも、それ等の影響の面白さを味はせる方がよいだらう	英傑ビスマークが其の幼少時に於ける刻苦勉勵の跡を撤回らせ、一世の大偉業を偲ばしめる	落合直文「中等國文讀本」	凡二時	卓前。故參。等輩。孤燈の下。盟。稱揚。	英名 優長 家熟 しかのみならず 幼童 年長故參	形式 文語、傳記文 修辭 スパルタ流 熟生たるの自分 不敵なる 相顧みて語なく 驚けりとか 一方の首領 史中の人たらんこと 思へば……
第八課 ビスマークの幼時									
句	文	章	構	想	鑑	賞	賞	鑑	賞
相伍す 游泳 明敏 尊輩 天賦の才 戦端 城下の盟 動成赫々 壯絶 稱揚 素志 鑑みる	形式 文語、傳記文 修辭 スパルタ流 熟生たるの自分 不敵なる 相顧みて語なく 驚けりとか 一方の首領 史中の人たらんこと 思へば……	一、ビスマークの生立、家庭生活 二、家塾生活 三、家塾生活中に現はした利かぬ氣の一片鱗 四、家塾に於る學業と傳記の愛好 五、中學に於る歴史研究と勉勵 六、偉勳と舊師への感謝、舊師の喜	一、家塾生活の嚴格さと、それに堪へしんだ偉さ 二、水泳の逸話、利かぬ氣 三、傳記愛讀とその影響——史中の人物たらんことする 四、歴史研究と刻苦勉勵の生活 五、勳成と舊師の喜悅、ビスマークの胸中 六、この物語を聞く我等の胸中	一、序説 二、學歷聲望と幽閉 三、一家の城内移轉 四、城内の夫婦生活 脱出の計畫 五、機敏な脱出計畫 六、隊長夫人の交渉 七、脱出實行 エルゼの氣轉 八、脱出の成功 國會への表白 九、マリヤの放免 三、パリーの生活 著書の完成	一、學歷が物語る天才的な人柄 二、終身幽閉の憂目 一家の悲歎 三、夫人の數願 一家せめてもの喜び 四、城内の幽閉生活 妻の健氣さ 五、トランタ利用の機智 六、隊長の留守に乘する明敏さ 七、隊長夫人へ交渉して置く用意の周到さ	ものであつた 混亂を極める 今まで隠れてゐた——忽ち輝き出した 夜々として あにはからんや——とは お含み置き下さい ありませうさ 互に勵まし勵まされて 苦心の結晶 語法 あにはからんや……さばありませうさ	ものであつた 混亂を極める 今まで隠れてゐた——忽ち輝き出した 夜々として あにはからんや——とは お含み置き下さい ありませうさ 互に勵まし勵まされて 苦心の結晶 語法 あにはからんや……さばありませうさ	ものであつた 混亂を極める 今まで隠れてゐた——忽ち輝き出した 夜々として あにはからんや——とは お含み置き下さい ありませうさ 互に勵まし勵まされて 苦心の結晶 語法 あにはからんや……さばありませうさ	ものであつた 混亂を極める 今まで隠れてゐた——忽ち輝き出した 夜々として あにはからんや——とは お含み置き下さい ありませうさ 互に勵まし勵まされて 苦心の結晶 語法 あにはからんや……さばありませうさ

注	意	要旨	間時	文	字	語	句	文
一、粗暴なる者の多くは學業を厭ふものであるがビスマークは全然それと反對であつた この邊の所に注目させればならぬ 二、語調は大体に簡潔明快で相當に力をこめてある こゝらな点も注目させたいと思ふ	大著述を完成するまでの夫婦の愛とその慘憺なる苦心と感激せしめ、學問に邁進する夫と、身命を賭して之を助ける妻の真心を讀へしめる	凡二時	國際法學。博士。好配。擲つて。紛争。幽閉。寛大。取替。紛らす。表白。露見。脱走。追手。放免。繼續。	國際法學。開祖。樞機。參與。好配。洋々たる。紛争。終身幽閉。護送。監視。寛大。夜々として。調達。計畫が熟す。お含み置き。冤。表白。露見。罪科。義烈。放免。困苦缺乏。	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる
(女子用)								
第八課 グロチウスと夫人マリヤ								
文	句	鑑	賞	賞	鑑	賞	鑑	賞
國際法學。開祖。樞機。參與。好配。洋々たる。紛争。終身幽閉。護送。監視。寛大。夜々として。調達。計畫が熟す。お含み置き。冤。表白。露見。罪科。義烈。放免。困苦缺乏。	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる	形式 口語、常体、叙事文 修辭 一世の聲望を擲つて 彼の前途は實に洋々たる

賞	注	意	要旨	時間	文
八、決斷の力 その覺悟 九、エルセの機智 その人物のしつかりしたえらさ 一〇、マリアの自白とその決心 二、義烈に感じた政府の處置——夫人の嬉しさ 三、女手に生活の困苦缺乏を支へ 夫の素志の貫徹を はからせる偉さ 三、互に勵まし勵まされる二人の愛さ辛酸 四、大著述の成功 二人の喜悅	一、夫婦愛の極致であらう 何か深い感銘を得させた いものである 二、事件が中々面白いがその事件進行中に於ける主人 公の心持の描寫は叙述されてゐない この点を逃さ ず想像せしめるやうに取扱ふがよい	農村用 第八課 ソコトラ島 豪壯な印度洋の荒波と航行の苦勞を思ひ浮べしめ、ソ コトラ島の恐ろしい形想を想像せしめ共、しかも この島一つで印度洋の荒波が平和安息の姿にかへると いふ面白い味はひを賞せしめる	凡二時	震動。空を指し。四顧。盛砂。紺青。波頭。	

構	想	鑑	賞	注	意
一、印度洋航破のうれしさ 二、印度洋の怒濤 三、印度洋真只中の風望 四、荒波との争闘——意地 五、午睡の快さ 六、静まりかへつた怒濤 七、島におどろく人聲 八、島の形相 九、感想 (一) 不可思議の島 一〇、感想 (二) 消々難い印象	一、怒濤の豪快味 男性的な狂亂 二、茫々澎湃たる印度洋の風望 三、浪さの根くらべ——元氣さ 勇壯なやうな心持 四、赤道直下、大洋の真只中の午睡の快味 五、静まりかへつた怒濤の急激な變化——ふしぎさ 六、島の形相の鋭さ 七、佛の降魔を思ひ出す感想の深き味 八、忘れ得ぬ印象の深さ	一、非常に力強い修飾をしてある 漢文調の入るもの その爲である その語感を見逃がさぬこと 二、急迫漸層の手法、譬喩活叙の筆致等、吟味に傾す るものが相當にある よく味は、せること			

第十一週

字	語	句	文	章
舷側。踏み。氣色。人並。根負け。午睡。船窓。 旋律的。形相。怒濤。降魔の相。	飄弄。巨濤。濛々。餘沫。四顧。茫々。目路。漫々 澎湃。純白。遜色。いらだつ。テツギゴルフ。しぶき 微動。起きざき。旋律的。さめめき。紺碧。形相。慰 藉。降魔。そそり立つ	形式。口語。記事文 修辭。飄弄してやれさいふ意氣込であるかの如く 船 体ものかは……斜に空を指し……波の谷に沈む 巨濤の腹中に突入せん勢 あはやさいふ間もあらせ す 波は濛々と……餘沫は飛んで大空に花を散亂す る 四顧茫々目路の限り漫々たる水であり澎湃たる 波である 近き波は 遠きに隨つて……の如く…… の如く果は……の如く遂に天空に一線を引く地平線 に及ぶ わけて……何にたさへよう 何時まで…… ぞ離れ波狂へ波 此の意地をテツギゴルフに發揮し て 一木一草をさめめめのはげ山の連続 熱帯の午 後の太陽に照らされて茶褐色にひらめく山が紺碧の 空にくつきりと浮いて 天空をかみつくやうにそ、 り立つ のこさりの齒のやうに連る 何といふ…… であらう 驚の島さも死の島さも……形相である ……さば 思へば……これぞ佛の降魔の相 語法 物かは……さば	秋の海上の氣分と釣の妙趣を味は、せる 徳富健次郎「自然と人生」 凡二時	釣。獵銃。不器用。手繰る。豆相。櫓拍子。 天心。ゆめめく。慮色。見くびる。胸の間。眼がくら む。あき足らぬ

第九課 釣

構	章	文	句	語	字	間時	所出	旨要
一、秋の海上の眺め 二、陸の秋の氣分 三、景物「かもめ」	形式。口語。營体、美文的な叙事文 修辭。船底をた、く程のゆるやかな波 雲の描寫 點 のやうに一の字のやうに 竿が空を突いてひらめく 竿の一華に黒蟻二つ 氣のせあか さもあざけり顔 に 絲がびくり しめた 重い 大きいぞ それ上 つた まる鰐だ 餌をつける はふり込む 手繰る はふり込む音……さしる音……はねこむ音 見るさ 何だ……だ 鐘が一つぼうんと あき足らぬため息 一つ 富士に見送られながら 紫流す水を緩やかに 分けて行く 一色にまけ合つて	形式。口語。營体、美文的な叙事文 修辭。船底をた、く程のゆるやかな波 雲の描寫 點 のやうに一の字のやうに 竿が空を突いてひらめく 竿の一華に黒蟻二つ 氣のせあか さもあざけり顔 に 絲がびくり しめた 重い 大きいぞ それ上 つた まる鰐だ 餌をつける はふり込む 手繰る はふり込む音……さしる音……はねこむ音 見るさ 何だ……だ 鐘が一つぼうんと あき足らぬため息 一つ 富士に見送られながら 紫流す水を緩やかに 分けて行く 一色にまけ合つて	天心。ゆめめく。慮色。見くびる。胸の間。眼がくら む。あき足らぬ	釣。獵銃。不器用。手繰る。豆相。櫓拍子。 天心。ゆめめく。慮色。見くびる。胸の間。眼がくら む。あき足らぬ	凡二時	徳富健次郎「自然と人生」	秋の海上の氣分と釣の妙趣を味は、せる	

想	鑑	賞
四、船釣り (一) 五、漂ふ暮色 六、船釣り (二) 七、船釣り (三) 八、船釣り (四)と愈々迫る暮色 九、歸途	一、秋の海の眺め 二、釣船の描寫の妙 1、点のやうに一の字のやうに(形容) 2、空を突いてひらく竿 3、笹の葉に黒蟻二つ 4、一つになつたり 二つになつたり 三、秋だ秋だ——感懐、だが馬車のラッパの音 四、からめの見方の面白味 五、釣船で交す問答の親しみと味、車轂點綴の妙味 六、漂ふ暮色の描寫の感じ(秋だ、秋だ、實に秋だ……實に靜かな秋だ) 七、鈴の音……来たな……釣獨特の心持 八、釣れ出した嬉しさ、好もしさ、忙しさ 九、大小をつぶやいたり、獨言を言つたりして、ひそかに悦び合ふ心持 一〇、飽きぬ境地と名残惜しさ 一一、船は見えぬが、楫拍子の音がするといふ味 一二、歸途の叙景と師の香の餘韻	

週二十第

注	意	要旨	間時	文	字	語	句	文	章	構
一、原文全体の印刷物でも用意したらよいと思ふ 二、何所までも、しんみりさ、味を味はふこと	第十課 保 險 保險事業に關する理解を得しめ、保險の眞精神を悟らしめる	凡二時	波つた。致命的。扶助。事故。償ふ。簡易の美はし疾病。	不歸の客 填補 致命的 相互扶助 掛金 保險事故 償ふ 混合 小口 疾病 分焼 醫療 諸般	形式 口語、當体、説明文 修辭 一夜の中に不歸の客となる 路頭に迷ふ 途を講ず 殆ど意をなすに足らない 精神に根ざす 保 險を背景とする	一、豫測出来ない人生の災害 二、保險の起因と趣旨目的 三、保險契約の成立 四、保險の種類 五、火災保險	御清福……氏の息 引見 紹介 形式、候体書簡文 修辭 並に 何分宜しく……の至りに候へ共 語法 候の活用形	通常形式 前文、要件、後尾	通常形式 前文、要件、後尾	御清福……氏の息 引見 紹介 形式、候体書簡文 修辭 並に 何分宜しく……の至りに候へ共 語法 候の活用形

要旨	間時	文	字	語	句	文	章	構	想	吟	味	注	意
紹介状の要領を悟らせる 凡一時	御清福。息。恐縮。引見。紹介。	第十一課 人を紹介する手紙 (農村用)第十課 鎮守に詣てて 男子用 第四課参照	六、運送保險 七、生命保險 八、政府經營の保險 九、簡易生命保險 一〇、健康保險 一一、保險の價値	一、災害の恐怖と人生朝露の果なき 二、保險事業の起因、趣旨、目的、精神 三、契約の成立と効力の發動 四、各種の保險事業とその内容及び目的 五、保險契約の信用價値	一、簡単な記述であつて、内容の説明等は稍々無味乾燥である 一々實例によつて、それを補足し、よくその精神を活かすやうに努力すべきである	御清福……氏の息 引見 紹介 形式、候体書簡文 修辭 並に 何分宜しく……の至りに候へ共 語法 候の活用形	通常形式 前文、要件、後尾	通常形式 前文、要件、後尾	一、用件の明瞭 二、簡潔なる記述 三、紹介状の價値	凡一時	紹介状の要領を悟らせる	御清福……氏の息 引見 紹介	御清福……氏の息 引見 紹介

要旨	間時	文	字	語	句	文	章	構	想	吟	味	注	意
紹介状の要領を悟らせる 凡一時	御清福。息。恐縮。引見。紹介。	第十一課 人を紹介する手紙 (女子用)第十一課 人を紹介する手紙 女子用 第四課参照	六、運送保險 七、生命保險 八、政府經營の保險 九、簡易生命保險 一〇、健康保險 一一、保險の價値	一、災害の恐怖と人生朝露の果なき 二、保險事業の起因、趣旨、目的、精神 三、契約の成立と効力の發動 四、各種の保險事業とその内容及び目的 五、保險契約の信用價値	一、簡単な記述であつて、内容の説明等は稍々無味乾燥である 一々實例によつて、それを補足し、よくその精神を活かすやうに努力すべきである	御清福……氏の息 引見 紹介 形式、候体書簡文 修辭 並に 何分宜しく……の至りに候へ共 語法 候の活用形	通常形式 前文、要件、後尾	通常形式 前文、要件、後尾	一、用件の明瞭 二、簡潔なる記述 三、紹介状の價値	凡一時	紹介状の要領を悟らせる	御清福……氏の息 引見 紹介	御清福……氏の息 引見 紹介

週三十第

構	章	文	語	字	備	時	旨	要	鑑	吟	味
三、オベリスクの構造と大さ	一、序説 遺蹟の現状 二、ピラミッドの構造と規模	形式 文語、説明文 修辭 興亡幾變遷……荒廢に歸したり……の大なる實に人目を驚かしむるに足るものあり 雲をしのぎてそびゆる 尖端に終る	照 けたし 埋没 變遷	遺蹟 遺蹟寫眞繪畫類 人目 塔 石碑 偉績 埋没 三機 具ふ	地圖、遺蹟寫眞繪畫類	凡二時	エジプト古代文化の跡を顧み、その傳説、學術、藝術の一般を味はせむ	第十二課 エジプトの遺蹟	一、用件の意味 二、簡潔なる記述 三、紹介狀の價值		

月二十

週四十第

時	旨	要	注	賞	鑑	想
凡三時	エジプトの東方見聞記が世界交通史上に如何に大なる影響をもたらしたか、又その大旅行の物語的な面白さやその功績等を稱へ味はせむ	第十三課 マルコ・ポーロ	一、歴史的に簡單な補説を必要とする 二、スフィンクスの傳説等も補説してよい 三、東京博物館にエジプトのミイラ一個あり 忘れず に知らせてやること	一、行商人の大旅行と冒險 二、密必烈の政策と父ポーロの意氣込 三、ポーロ父子の辛酸困苦 四、忽必烈の人物、マルコの榮達 五、突然の歸郷 1、驚きあされる故郷の人達 2、信じられぬポーロ父子のいごかしさ 六、宴會の策略の面白さ 七、獄中に於ける追想生活と編述中の心持 八、日本紹介記の珍妙さ	一、古代文化の歴史を有する所謂「古き國」に對する感じ 二、ピラミッドの規模の大さ 三、當時の文化と今日の文化（對照） 四、王室の全盛と、ミイラに對する想 五、オベリスクの大さ、建設目的の面白さ（今日と比較） 六、エジプト文字の面白さ、文字を有せる五千年前の文化 七、スフィンクスの奇怪さ、大さ	四、エジプト文字 五、スフィンクスの構造と規模

構	章	文	語	字	備
六、東方見聞記の奇説（日本紹介） 五、旅行記の編述 四、歸國せし時の珍話 三、元にての榮達 二、ポーロ父子の大旅行 一、東方見聞記の貴重なる所以	形式 文語、説明文の記事文 修辭 一時代を劃す いざやこゝに——述べん 辛苦つぶさに言ふべからず 一策を案す 燦然として目もくらまんばかりなり 事の次第 煩に堪へず 天壽を全うす 語法 いざや……述べん 語るに……以てせり たまたま	劃す 翻譯 史料 事蹟 謁見 委囑 ねざらふ 容 貌 一策 案す ルビト サフアイヤ エメラルド 燦然 恩賜 慮る 囚る 煩 編述 天壽 珍談奇説 延板 意想外	世界地圖 翻譯 世祖 謁見 大槓 委囑 才幹 慮る 囚る 煩 編述 同囚 延板		

週五十第

時	旨	要	注	賞	鑑
凡二時	植物と氣象との美的な關係を悟らしめ、植物美 氣象美（つ）を味はせむ	第十四課 植物と氣象	一、構想の非常に練られた文章である 特に吟味せしむべきであらう 二、詳細な補説は却つて内容を損ふかも知れないが元國は我が國と歴史的に大きな交渉のあつた國だから、その邊の注意を促されねばならぬ	一、行商人の大旅行と冒險 二、密必烈の政策と父ポーロの意氣込 三、ポーロ父子の辛酸困苦 四、忽必烈の人物、マルコの榮達 五、突然の歸郷 1、驚きあされる故郷の人達 2、信じられぬポーロ父子のいごかしさ 六、宴會の策略の面白さ 七、獄中に於ける追想生活と編述中の心持 八、日本紹介記の珍妙さ	植物と氣象との美的な關係を悟らしめ、植物美 氣象美（つ）を味はせむ

週六十第

第十五課 俳句

語句	文	鑑	賞	注	意
まがふ、調和、優美、艶麗、盛夏、配合、似つかはし 鮮綠、餘滴、聯想、しなやか、剛健、清楚	形式、口語常体、説明文の記事文 修辭、雲かまきがふ櫻の花、優美、艶麗な櫻の特性 滴る木々の枝、配合の妙を極む、降るかと思へば晴 れ、晴れるかと思へば降出して、形容する言葉もな い、一入鮮綠の色を増す、見るからばかなげに、一 は……一は……	一、春の氣象と春の花の美 二、季節々々に合つた植物美 三、雨の美と植物の美 四、雷雨の景色と青桐の美 五、蓮、芋の葉の露の美 六、秋雨と芭蕉の寂しさ 七、常緑木と雪の美、南天と雪の美、松の剛健美、竹 の清楚な美	一、味はひの多い文である、材料の理科的な吟味に陥 つてしまつてはならぬ 二、文の調子や、語感や、物やばらかな用語等も吟味 せざるが……		

旨要	間時	字文	修辭	鑑	賞
俳句の趣味と感興を味はせ、せる	凡二時	ぐわんてうしき 元朝の子規。	見るものにせん、月ば……日は……のたり、 やれ打つな、岩にしみ入る、うねりかな、無くもがな 空や、靜かさや、菜の花や、其他倒置、季、切字等多 し	「元朝の」の句 元朝の何となく改まつた嚴かな感じに、富士の壯嚴 清淨をさらへた味、二句の見るものにせんの味 「菜の花や」の句 初春の陽氣さ、のどけさ 「春の海」の句 「のたりのたり」の味、春の海ののんびりした氣持 「ひねもす」の句の利き方 「島々に」の句 春の島々に灯のともつた海上の夕景色 寫生的な子規らしい調子 「五月雨を」の句 水嵩を「集めて」に、水勢を「早し」に現はして、最上 川の實相を活かしてゐる点	つとち、かんでゐる氣持 「水かれて」の句 「水かれて」川の趣 「橋行く人」寒さに稀な行人の足音、聞いてゐる氣分 一、語句などは平易だから餘り碎かぬこと 二、修辭的な吟味の方が面白からう 三、切字に注意すること、俳句特有の手法である 四、作者の時代、俳壇に於ての地位等補説するがよい 五、味はふこまが全仕事である

「やれ打つな」の句
萬物の愛の味、一茶の人格、
「やれ」の利き工合
「夕立や」
「家を廻りて」の面白さ
家鴨の聲と夕立の氣分
「靜かさや」の句
「岩にしみ入る」の寂靜境
夏と蠅の詩興、山中の感じ
「青蜻蛉」の句
秋晴の遠山さ、空の赤蜻蛉の美しさ
「白露を」の句
「こぼさぬうねり」の妙趣
優しさ、清さの感じ
「黄菊白菊」の句
黄菊白菊の氣高さ、風韻
「雁の腹」の句
鮮明な感じと氣分
「舟の上」と「雁の腹」の照應のうまさ
「雉子たつて」の句
冬の枯野の一景趣、即興的なさへ方への妙
「皿をふむ」の句
蒲團の中にもぐつてゐて、鼠の足音を聞いても、ぢ

旨要	間時	字文	句語	文	鑑	賞
（女子用）第十五課 歳末の十日 簡単な日記文の要領を知らせ、歳末氣分を味はせ、せる	凡二時	しもぞけ、やいほ、ざんに 霜解。歳暮の雑煮。	みそさざい、春が来た	形式、口語常体、日記文 修辭、簡潔な現在記述の手法	一、一日一日さ加つて行く歳末の氣分 二、女の子らしい記述の味	

<p>鐵</p> <p>二、のんびりした田圃情調</p> <p>二、かげろふや鐵で追ひやるむら鳥</p> <p>一、かげろふに包まれて立つ情趣</p> <p>二、のんきな鳥——春の一景物</p> <p>三、鐵で追ふ——ユーモア 春らしい感じ</p> <p>三、麥秋の忙しさと日の光</p> <p>一、麥はこりの中に開いてくる鐵の音</p> <p>二、參はこりの中に開いてくる鐵の音</p> <p>四、しるなべに笠のしづくや早苗とり</p> <p>一、辨當持の早苗取り</p> <p>二、農繁期情調の一つ</p> <p>五、朝露によこれて涼 爪の泥</p> <p>一、朝露にぬれる夏朝の涼しさ</p> <p>二、よごれた泥も一つの風情</p> <p>六、牛叱る聲にしき立つ夕かな</p> <p>一、シツと牛を叱る聲——夕色</p>		<p>句語</p> <p>鞍つば</p>	<p>字文</p> <p>畑打つ。鳥。鐵。早苗。夕。小坊主。</p>	<p>(農村用)第十五課 俳句</p>
<p>賞</p> <p>一、動くとも見えて畑打つ男かな</p> <p>一、……とも見えて——春らしい陽氣さ、なごやが</p> <p>二、のんびりした田圃情調</p> <p>二、かげろふや鐵で追ひやるむら鳥</p> <p>一、かげろふに包まれて立つ情趣</p> <p>二、のんきな鳥——春の一景物</p> <p>三、鐵で追ふ——ユーモア 春らしい感じ</p> <p>三、麥秋の忙しさと日の光</p> <p>一、麥はこりの中に開いてくる鐵の音</p> <p>二、參はこりの中に開いてくる鐵の音</p> <p>四、しるなべに笠のしづくや早苗とり</p> <p>一、辨當持の早苗取り</p> <p>二、農繁期情調の一つ</p> <p>五、朝露によこれて涼 爪の泥</p> <p>一、朝露にぬれる夏朝の涼しさ</p> <p>二、よごれた泥も一つの風情</p> <p>六、牛叱る聲にしき立つ夕かな</p> <p>一、シツと牛を叱る聲——夕色</p>		<p>注意</p> <p>一、「しるなべ」は「汁鍋」</p> <p>二、「鞍つばに小坊主乗るや」は一本に「小坊主乗せて」とある 後者に據つてその意を攝つて置いた</p>	<p>賞</p> <p>七、しがが驚いて飛立つた風情</p> <p>二、鞍つばに小坊主乗るや大根引</p> <p>一、子供を運れた大根引だ——情調</p> <p>二、鞍つばに乗つかつてゐる子供の姿</p> <p>三、親達は大根引、子供は鞍つば……その情調</p> <p>八、大根引大根で道を教へけり</p> <p>一、田舎の無難作で素朴で、大根のやうにぶつきらば、な野趣</p> <p>二、大根で道をさす百姓の姿</p>	<p>目</p>

第一學年 第三學期

約十一週凡四十四時間 (二週四時)

<p>月 一</p> <p>週 一 第</p>		<p>月 週</p>	<p>要 目</p>
<p>第十六課 年頭の十日</p> <p>日記文の要領を知らせ、新年の氣分を味はせせる</p> <p>凡二時</p> <p>附録。泊る。</p> <p>書初 年始 わき たわむ</p> <p>形式 口語、常体 日記文</p> <p>修辭 簡潔な現在記述の手法</p> <p>賞</p> <p>一、新年らしい氣分</p> <p>二、男子らしい氣分</p> <p>三、「ねすみ」を逃がした感想の面白さ</p>		<p>賞</p> <p>「負うた子に」の句</p> <p>暑くるしい、むしむしする氣持</p> <p>「蚊帳の波」の句</p> <p>秋風に、ほつき、秋立つ氣分をささる心境</p> <p>「蚊帳の波」「顔にふる、や」の味</p>	<p>要 目</p> <p>「負うた子に髪なぶらる、暑さかな」</p> <p>「蚊帳の波顔にふる、や今朝の秋」</p>
<p>賞</p> <p>碧海郡に於る農業の異数の進歩を逐げてゐる現状を知らせ人の和み共同的精神が凡ての事業にどれほど大きい根柢をなすかを痛感させる</p> <p>凡二時</p>		<p>賞</p> <p>「負うた子に」の句</p> <p>暑くるしい、むしむしする氣持</p> <p>「蚊帳の波」の句</p> <p>秋風に、ほつき、秋立つ氣分をささる心境</p> <p>「蚊帳の波」「顔にふる、や」の味</p>	<p>要 目</p> <p>「負うた子に髪なぶらる、暑さかな」</p> <p>「蚊帳の波顔にふる、や今朝の秋」</p>
<p>賞</p> <p>男子用第十五課に同じ</p> <p>異なる点は左の二句だけ</p>		<p>賞</p> <p>「負うた子に」の句</p> <p>暑くるしい、むしむしする氣持</p> <p>「蚊帳の波」の句</p> <p>秋風に、ほつき、秋立つ氣分をささる心境</p> <p>「蚊帳の波」「顔にふる、や」の味</p>	<p>要 目</p> <p>「負うた子に髪なぶらる、暑さかな」</p> <p>「蚊帳の波顔にふる、や今朝の秋」</p>
<p>賞</p> <p>男子用第十五課に同じ</p> <p>異なる点は左の二句だけ</p>		<p>賞</p> <p>「負うた子に」の句</p> <p>暑くるしい、むしむしする氣持</p> <p>「蚊帳の波」の句</p> <p>秋風に、ほつき、秋立つ氣分をささる心境</p> <p>「蚊帳の波」「顔にふる、や」の味</p>	<p>要 目</p> <p>「負うた子に髪なぶらる、暑さかな」</p> <p>「蚊帳の波顔にふる、や今朝の秋」</p>

語句	文	章	構	想
丘陵 荊棘 旱害 頑冥 起工 請願 篤志家 開墾 爾來 往年 教導 首腦者 根柢 人の和 水利組合 信用組合 販賣組合 購買組合 利用組合 寒村 人煙 活氣横溢 富邑	形式 文語、説明文 修辭 徒に小松生ひ茂りたる丘陵、若しくは荊棘にとざされし荒野のみ多く耕地さては僅かに其の間に散在せしに過ぎざりき 夏日早天類に至り農民の困苦は實に名状すべからざるものありき 農民亦既に悟りて用水の必要を感ずるや切なり かくて往年の丘陵荒野は拓かれて概ね美田と化し今や此の用水に灌漑せらる、耕地は八千町歩の多き上る 百方努力す 老若よく其の和を得協力一致以て諸種の經營に當るの美風を成せり 其の活動實に目ざましきものあり かつては丘陵荒野の間に散在して……寒村はかくて……田圃連り人煙接して活氣横溢せる富邑となれり 語法 彼の濃厚が志 ……するや切なり	一、過去の窮狀 二、灌漑用水の開墾事業と耕地の新生 三、農學校の活動 四、共同的精神と諸施設 五、結尾(現狀)		

吟	味	注	意
一、丘陵荒野の殺風景と恵まれざる農村の悲境 二、都築彌厚の奉仕の事業と其の病歿の惜しき 三、公共事業に對する妨害——頑冥と利己 四、明治時代に於る村民の自覺活動と事業の完成 五、一本の水路に生きたる耕地八千町歩といふ驚異 六、農學校活動の目ざましき、卒業生の着實と熱心 七、人の和、供同的精神の偉大さ 八、諸施設とその活動、利用の目ざましき 九、貧窮の一寒村より富邑たる模範村へ——感慨の情		一、具體的な補説數術を必要とする。 二、各種産業組合の事業内容について一般的理解と必要及眞價を悟らせるために稍々細密に亘り、此際補説して置くのもよいだらう 三、一村發展の原動力は人の和と共同的精神である よく味は、せることだ	都會と田舎の長所短所を論ずる手法の面白さを味は、しめ、都會に出づべき場合と田舎に留るべき場合とをよく判断すべきを考へしむ 凡二時 美む。高屋。費は。煩ひ。汚す。

第十七課 都會と田舎

語句	文	章	構	想
四通八達 百般 得失 知見 技能 開發 あくがる 形式 文語、議論文 修辭 何れかよき 其他、對句法、漸層法等多し 語法 ……思ふべく……羨むべしげにや 得られざるもの一もあるなし まして……をや 宜しく……すべきなり あらずや	一、他人を羨む人情の弱點 二、都會の長所を叙述した手法のきびきびした味 三、田舎の長所叙述が都會の欠点をねらつてゐる手法の巧さ 四、結論の力強さ 五、語調、語感の快さ 六、理路の整然たる疊み方	一、序論 他人の生活を羨む人情 二、都會の長所と短所 三、田舎の長所 四、結論 田舎を出づべきか留るべきかの結論		

要旨	所出	時間	標準	字文	語句	文	章	構	想
上毛三山の雄を稱へしめ、山に對する審美的な態度を得しめる 松本亦太郎「渡り鳥日記」 凡二時	松本亦太郎「渡り鳥日記」	凡二時	地圖、三山の寫眞繪畫	山骨。餘。展開。蜿蜒。山容。山骨。あらは。晴人。郷黨相倚る。鐵色。藤色。はで。君臨。名山。	上毛 余 展開 蜿蜒 山容 山骨 あらは 晴人 郷黨相倚る 鐵色 藤色 はで 君臨 名山	形式 口語、評論風の記事文 修辭 夢の如く淡く大空に浮いて、まが落しに東南にひらけて 眼界の果を筑波が守る 天にかみつきたうな峻しい姿 郷黨相倚るの姿	一、三山の位置 二、山容 三、赤城の氣品と山色 四、山色		

(農村用)第十七課 上毛の三山

男子用 第十八課参照

第十八課 上毛の三山

語句	文	章	構	想
四通八達 百般 得失 知見 技能 開發 あくがる 形式 文語、議論文 修辭 何れかよき 其他、對句法、漸層法等多し 語法 ……思ふべく……羨むべしげにや 得られざるもの一もあるなし まして……をや 宜しく……すべきなり あらずや	一、他人を羨む人情の弱點 二、都會の長所を叙述した手法のきびきびした味 三、田舎の長所叙述が都會の欠点をねらつてゐる手法の巧さ 四、結論の力強さ 五、語調、語感の快さ 六、理路の整然たる疊み方	一、序論 他人の生活を羨む人情 二、都會の長所と短所 三、田舎の長所 四、結論 田舎を出づべきか留るべきかの結論		

要旨	所出	時間	標準	字文	語句	文	章	構	想
上毛三山の雄を稱へしめ、山に對する審美的な態度を得しめる 松本亦太郎「渡り鳥日記」 凡二時	松本亦太郎「渡り鳥日記」	凡二時	地圖、三山の寫眞繪畫	山骨。餘。展開。蜿蜒。山容。山骨。あらは。晴人。郷黨相倚る。鐵色。藤色。はで。君臨。名山。	上毛 余 展開 蜿蜒 山容 山骨 あらは 晴人 郷黨相倚る 鐵色 藤色 はで 君臨 名山	形式 口語、評論風の記事文 修辭 夢の如く淡く大空に浮いて、まが落しに東南にひらけて 眼界の果を筑波が守る 天にかみつきたうな峻しい姿 郷黨相倚るの姿	一、三山の位置 二、山容 三、赤城の氣品と山色 四、山色		

句語	文	章	構	想	鑑	賞	注	意						
夕やみ 荒涼 こよひ 分脈 嘖煙 輪郭くつきやう	形式 口語、叙事文 修辭 日暮れ道遠きを感じながらも 日はこつぷりと暮れた 一帶の村落を我が物顔に青みがかった水のやうな光を放つてゐる 月の光に灰色に染まつて大空を衝いてゐる 聞くともなしに村落の人語の遠くに聞ゆるのを聞いたりしてゐた 此の聲の近づくのを待つともなしに待つてゐた たくましげな体の黒い輪郭	一、阿蘇山麓の一村に漂ふ青闇情調 二、月下の阿蘇の嘖煙 空車の響 三、馬子唄 四、馬子の印象 五、餘情	一、山村の夕暮時のにぎやかさ 1、仕事の仕舞 2、かまごの火の情趣 3、老若、男女、子供の聲、歌、笑 二、荒涼たる草原を出て、村のにぎはしさの中に身を投じた時の心持 三、月下の阿蘇——物凄さ、雄大さ 四、疲れた足を休めて、人語を聞くともなしに聞いて	形式 文語、傳記文 修辭 西すべく東すべし 羨望の念禁するこゝ能はず 隣邦に誇る時なくして止まんや 語法 細大もらさざらんとする 止まんや	一、大帝即位時代の露國事情 二、船舶に興味を有せし幼年時代 三、土耳其戰爭と素志の實現 四、留學方針と自らの觀察研究 五、大英帝國の觀察と大海軍建設の決心 六、歸國後の政治と功蹟	一、船に對する幼時の熱心さ——(大海軍建設の伏線) 二、國家文化の開發に任ずる熱心 三、自ら海外觀察を行ふ熱情 四、大英海軍の偉觀に決心を固める意氣 五、内治外交、國勢發展に全生命を致した偉勳 一、創業當時の露國事情は稍々詳に具体的に補説の必要あらん。	二、國家の隆昌には英明なる君主の果敢さその徳化が無くならない 我が 明治大帝と對照して言ひ難い味はひのある点等をも考へしめてよいと思ふ	形式 口語、叙事文 修辭 日暮れ道遠きを感じながらも 日はこつぷりと暮れた 一帶の村落を我が物顔に青みがかった水のやうな光を放つてゐる 月の光に灰色に染まつて大空を衝いてゐる 聞くともなしに村落の人語の遠くに聞ゆるのを聞いたりしてゐた 此の聲の近づくのを待つともなしに待つてゐた たくましげな体の黒い輪郭	一、阿蘇山麓の一村に漂ふ青闇情調 二、月下の阿蘇の嘖煙 空車の響 三、馬子唄 四、馬子の印象 五、餘情	一、山村の夕暮時のにぎやかさ 1、仕事の仕舞 2、かまごの火の情趣 3、老若、男女、子供の聲、歌、笑 二、荒涼たる草原を出て、村のにぎはしさの中に身を投じた時の心持 三、月下の阿蘇——物凄さ、雄大さ 四、疲れた足を休めて、人語を聞くともなしに聞いて	形式 文語、傳記文 修辭 西すべく東すべし 羨望の念禁するこゝ能はず 隣邦に誇る時なくして止まんや 語法 細大もらさざらんとする 止まんや	一、大帝即位時代の露國事情 二、船舶に興味を有せし幼年時代 三、土耳其戰爭と素志の實現 四、留學方針と自らの觀察研究 五、大英帝國の觀察と大海軍建設の決心 六、歸國後の政治と功蹟	一、船に對する幼時の熱心さ——(大海軍建設の伏線) 二、國家文化の開發に任ずる熱心 三、自ら海外觀察を行ふ熱情 四、大英海軍の偉觀に決心を固める意氣 五、内治外交、國勢發展に全生命を致した偉勳 一、創業當時の露國事情は稍々詳に具体的に補説の必要あらん。	二、國家の隆昌には英明なる君主の果敢さその徳化が無くならない 我が 明治大帝と對照して言ひ難い味はひのある点等をも考へしめてよいと思ふ

(農村用)第十八課 山里の夕

「忘れ得ぬ人々」の一節である 阿蘇山下の夕色を味はせ、知らぬ人から受けた過去の古き印象を懐かしむといふやうな心持を味はせせる

國木田哲夫「獨歩全集」

凡二時

荒涼 懐かし。分脈 一峯 新月。村落。空車。反響。馬子唄。感情。手綱。

週三第

第十九課 ベートル大帝

ある心持

五、山に谷にこだまする空車の響
六、夕やみの中をほがらかに流れる馬子の唄
七、唄の面白さ
八、馬子の元氣よさ、氣持よき印象
九、馬子の姿をちつと見送る心持

一、獨歩獨特の色彩——自然に引きつけられる心持、人物に對する一種の人懐かしさ等、よく味はせ、せることだ
二、行文の間にも一種の味が含まれてゐる 平凡のやうでしかも何所さといふ事なく人の心を引きつける

大ロシア帝國の基を築いたベートル大帝の人物を知らしめ、國家隆昌の機運を開くまでの堅忍不拔なその努力、その精神を稱へ、その事蹟を偲ばしめる

凡三時

中興 英主 羨望の念 留學 遇す 隣邦 遊歴 英明果敢 君主

句語	文	章	構	想	鑑	賞	注	意		
形式 文語、傳記文 修辭 西すべく東すべし 羨望の念禁するこゝ能はず 隣邦に誇る時なくして止まんや 語法 細大もらさざらんとする 止まんや	一、大帝即位時代の露國事情 二、船舶に興味を有せし幼年時代 三、土耳其戰爭と素志の實現 四、留學方針と自らの觀察研究 五、大英帝國の觀察と大海軍建設の決心 六、歸國後の政治と功蹟	一、船に對する幼時の熱心さ——(大海軍建設の伏線) 二、國家文化の開發に任ずる熱心 三、自ら海外觀察を行ふ熱情 四、大英海軍の偉觀に決心を固める意氣 五、内治外交、國勢發展に全生命を致した偉勳 一、創業當時の露國事情は稍々詳に具体的に補説の必要あらん。	二、國家の隆昌には英明なる君主の果敢さその徳化が無くならない 我が 明治大帝と對照して言ひ難い味はひのある点等をも考へしめてよいと思ふ	形式 口語、叙事文 修辭 日暮れ道遠きを感じながらも 日はこつぷりと暮れた 一帶の村落を我が物顔に青みがかった水のやうな光を放つてゐる 月の光に灰色に染まつて大空を衝いてゐる 聞くともなしに村落の人語の遠くに聞ゆるのを聞いたりしてゐた 此の聲の近づくのを待つともなしに待つてゐた たくましげな体の黒い輪郭	一、阿蘇山麓の一村に漂ふ青闇情調 二、月下の阿蘇の嘖煙 空車の響 三、馬子唄 四、馬子の印象 五、餘情	一、山村の夕暮時のにぎやかさ 1、仕事の仕舞 2、かまごの火の情趣 3、老若、男女、子供の聲、歌、笑 二、荒涼たる草原を出て、村のにぎはしさの中に身を投じた時の心持 三、月下の阿蘇——物凄さ、雄大さ 四、疲れた足を休めて、人語を聞くともなしに聞いて	形式 文語、傳記文 修辭 西すべく東すべし 羨望の念禁するこゝ能はず 隣邦に誇る時なくして止まんや 語法 細大もらさざらんとする 止まんや	一、大帝即位時代の露國事情 二、船舶に興味を有せし幼年時代 三、土耳其戰爭と素志の實現 四、留學方針と自らの觀察研究 五、大英帝國の觀察と大海軍建設の決心 六、歸國後の政治と功蹟	一、船に對する幼時の熱心さ——(大海軍建設の伏線) 二、國家文化の開發に任ずる熱心 三、自ら海外觀察を行ふ熱情 四、大英海軍の偉觀に決心を固める意氣 五、内治外交、國勢發展に全生命を致した偉勳 一、創業當時の露國事情は稍々詳に具体的に補説の必要あらん。	二、國家の隆昌には英明なる君主の果敢さその徳化が無くならない 我が 明治大帝と對照して言ひ難い味はひのある点等をも考へしめてよいと思ふ

（農村用）第十九課 農業倉庫

要旨	農業倉庫施設の便益なる所以を理解させ、施設精神と利用價值とを考究させる
時間	凡二時
文	穀。穀。風。改裝。荷造。販賣。寄託者。混合。合。敏活。比較的。賣却。簡易。現物。擔保。融通。證券。省け。
語句	貯藏設備 實價 調製 改裝 寄託者 混合保管 風土 地味 敏活 比較的 賣却 現物 擔保 發行 證券 生産者 融通
文章	形式 口語、説明文 修辭 爲に——尙——随つて——それ故に——然るに——又………する、こによつて………同じ結果を得、又………
構想	一、農業倉庫の意義 二、混合保管 三、價格の調節 四、農産物取引上の便利 五、設立の便益
吟味	一、農業倉庫の取扱内容

第二課 警察と國民

要旨	警察と國民の密接な關係をよく味は、しめ、治警の眞精神を悟らせる
時間	凡二時
文	興行。無賴漢。立憲治下。了解。力む。
語句	了解 興行 無賴漢 立憲治下 了解 力む
文章	形式 口語常体、論説 修辭 ……にも………に………にも………云ひ………云ひ………云ひ………のであるか
構想	一、突如と筆を起し 二、結尾に餘韻を持たせて終らしめてある 三、問答を挿入して、内容を推移させてある
吟味	一、混合保管の利益、取引の敏活 二、價格調節の利益、不利な賣却を避ける 三、倉庫證券の便益 四、倉庫受渡上の便益 1、現物受渡上の便益 2、資金融通の利便 五、倉庫設立の精神と利用上の價值
注意	一、簡潔に説明されてゐるから、よく理解され得るわけであるけれども、矢張り抽象的な所が多いから適當に具體的に考究せしめなければならぬ

第二十一課 かにん

要旨	可笑しみの中に含まれてゐる教訓の味を味は、せる
時間	凡一時
文	柳里恭「雪萍雜誌」
文章	可笑しみの中に含まれてゐる教訓の味を味は、せる
構想	一、警察と國民の生活上との交渉 二、警察に對する理解 三、警察改善の根本義（論旨） 四、警察に對する理解がもたらす社會的價值
吟味	一、交渉關係を論ずる理路のうまさ 二、警察に對する攻撃の矛盾を指摘する手際 三、「なぜその改善をはからぬのであるか」の力 四、論旨を進めて根本義を解く理路の明かさ 五、幸福な社會生活
注意	一、論旨の明快、理路の整然さ、等論説としての要諦に注意すること 二、見識の養成である 理窟を覺悟させるのではない 三、社會的の理解である 警察の批評ではない 四、警察制度の大略を補説してよい

第二十二課 村上義光

要旨	教訓に陥らぬやう注意
時間	凡一時
文	柳里恭「雪萍雜誌」
文章	可笑しみの中に含まれてゐる教訓の味を味は、せる
構想	一、突如と筆を起し 二、結尾に餘韻を持たせて終らしめてある 三、問答を挿入して、内容を推移させてある
吟味	一、文旨を意見する知つたか振りの可笑しみ 二、指もて數へる可笑しみ 三、「また一字ふねたり」の可笑味 四、「四字にてかにん致し侍るなり」の味 五、意見した者の立腹、寓意の伏線的なあらはれ 六、文旨の悟りと直理の味 七、諷刺と餘韻
注意	一、教訓に陥らぬやう注意 二、可笑味が第一である その中の寓意を味ふのである 理窟でこね上げぬこと

構	章	文	句	語	字	文	備準	間時	旨要
									義光の壯烈悲壯な最後と、その誠忠義烈に感激あらしむ 凡二時
							吉野方面地圖、義光父子暮寫眞類		
							命の綱 新手 すべて 痛手 事急なり かしこけれど もむざ／＼ 落ちる 物の具 弔ふ 後世 やぐら 自害 集ふ つ／＼がなく けしき いらつ 御しるし		
							形式 韻文、七五調叙事詩 修辭 命の綱 嵐の前の花(吉野、嵐の前の花、散る 何れも縁語) つひに散るべき 雲霞の如き 風に木 の葉の散る如く(形容と倒置) 御名を冒す いかで さる(こ)省略法) 語法 なれや いて……ばや 集めさせ(使役の助動 詞、轉じて敬語) 張らせらる いかで、さる(こ) 落ちんや げにもとや思しけん 敵兵ばら(複數接 尾語)		
							一、宮の御覺悟 二、御奮戦 三、最後の御酒宴		

構	章	文	句	語	字	文	備準	間時	旨要
									四、義光の忠節と覺悟 五、六、義光の忠諫 七、主従の訣別 八、義光の壯烈な最後 九、宮の吉野落
							一、宮の悲壯なる御覺悟、縁語の美 二、最後の奮戦の雄たけび 三、最後の酒宴の悲壯な場面 四、義光決死の計謀の壯烈さ 五、宮の、臣下をあはれみ給ふ御仁慈 六、忠誠申し奉りながら御物具の紐をこく義光の態度 七、主従生別の際に垂れ給ふた仁慈に満ちた宮の御言 葉 八、壯烈なる義光の最後 九、「最後の様を見置けや」と……語氣		
							一、太平記を原據してゐる 具体的に補説を必要と する箇所も多いだらうが その爲に切角の詩情を損 ふてはならぬ 二、義光の子、義隆の最後も知らせてやつてよい 語氣、語勢、語感等の味も棄て難いと思はれる		

(女子用)第二十二課 織

構	章	文	句	語	字	文	備準	間時	旨要
									織の詩情、純真な乙女心を味はせ 凡一時
							機械の繪畫 機。布目。緯目。緯。緯。緯。		
							さつまつ 鳴きつれ 箆 箆 箆		
							形式 韻文、新形式叙事詩 修辭 織りましよ、きりはたり ちやう／＼(擬聲と 反覆) 一の詩と二の詩との對應的修辭		
							一、父上の羽織 二、母上の袴		
							一、擬聲の面白さ、反覆の味 二、松にまつ／＼の風の情趣 三、寒い折の父上の羽織だ、心をこめてといふ純情 四、母の袴に春ののどけさを持つて行つた手法 五、母に對する純情 六、田舎や山家の乙女の美しく純な生活		
							一、機械の気分情趣が第一だ 二、「孝行者である」などと説教してはいけない		

週六第

(農村用)第二十二課 海 苔

男子用 第二十三課参照

構	章	文	句	語	字	文	備準	間時	旨要
									手際のない描寫と海濱生活の味はひの中に、海苔の製 造に關する一般を知らしめる 凡三時
							背月。日向。消息。目印。凍える。託す。及。		
							形式 口語當体、叙事文風の説明文 修辭 肌にしむやうに いやに寒いぞ 身輕に立立つ 風が吹かうが指先が凍えようが ぞつしり腕にこ たへる さざ波が足ななふる 右手は直に左手を助 けて 一日の勞苦は……なるのである		
							一、海苔採り 二、二月半ば迄さ、後の海苔採り 三、海苔採りに行く景趣 四、採取の好もしさ 五、さし潮と作業の一團落		

賞	鑑	想	構	章	文
六、岸へ歸る 岸邊のたき火 七、満潮の採取場 二、海苔すき 一、海苔すきの作業(概説) 二、原料の精製 三、すき方 四、乾場への運搬 五、乾場の有様 六、仕上(結尾)	一、濱風の冷たさ 霜の朝の氣分 鷓鴣の面白味 二、嬉しそうな話聲 三、村中總出のにぎやかさ 四、ざく／＼と砂をふむ氣持 五、採取の手つきのうまさ、勞動の楽しさ 六、さし潮の氣分、足をなぶる小波 七、ざるの中の海苔の色と香 八、岸邊のたき火の情趣 九、今まで作業してゐた採取場に満々潮のさしたのを振返る氣持 一〇、刻み方の調子よさ 一一、すきかたの輕妙さ 一二、乾場の美事さ 一三、乾場に満ちる海苔の香	形式 口語、説明文 修辭 潑刺たる鮮魚の山巨鱈躍り細鱈飛び紅白青黄あらゆる色が交錯散亂する 今や……目が廻るほど忙しい 晝夜を分たず荒波に活動すること十餘日船はおびただしい獲物を満載してひたすらに漁港へ急ぐのである	一、概説 二、用船の具備要件 三、網の構造 四、投網 五、曳網 六、揚網 七、獲物の山 八、獲物の整理、網の處理 九、結尾	一、網の構造、考案の面白味、大いさ 二、投網のうまさ、むづかしさ 三、曳網中の注意 四、揚網時の活氣 五、獲物の山、うれしさ、美しさ、景氣よさ 六、獲補整理の楽しい忙しさ 七、港入りの歡喜	

句	語	字	文	間時	旨	要	注
交錯散亂 碎水	遠洋漁業 漁族 要件 徘徊 滿載 堅牽 積載 鐵船 頂点 水壓 あんかう(名) 萬般 プロペラ ウインチ 監視 留意 一括 滑車 潑刺 巨鱈 細鱈	網中。操縱。要件。風浪。獲物。滿載。積載。場へ。穂網。絲目。水壓。鋼製。マニラ麻。整へ。測り。繰出す。船橋。監視。留意。操る。故障。一括。滑車。括つた。鮮魚。籠。收め。船倉。碎水。揚網。	凡二時	汽船トロール漁業の一般を理解せしめ、遠洋漁業の愉快さや勇壯な活動振りを味はひ賞せしめる	一、無味平板な説明文にならず、描寫を挿入して終始する生き／＼した構想や手法は十分吟味に價する 二、何の滯滞もなく、輕快に、極めて自然に説明を進めて行く筆致を味はふべきである	(農村用)第二十三課 汽船トロール漁業	一、汽船トロール漁業の我國、及び世界に於る現状につき大体解説する方がよいだらう 二、數字的な解説も必要な箇所があるだらう。

賞	鑑	想	構	章	文
六、岸へ歸る 岸邊のたき火 七、満潮の採取場 二、海苔すき 一、海苔すきの作業(概説) 二、原料の精製 三、すき方 四、乾場への運搬 五、乾場の有様 六、仕上(結尾)	一、濱風の冷たさ 霜の朝の氣分 鷓鴣の面白味 二、嬉しそうな話聲 三、村中總出のにぎやかさ 四、ざく／＼と砂をふむ氣持 五、採取の手つきのうまさ、勞動の楽しさ 六、さし潮の氣分、足をなぶる小波 七、ざるの中の海苔の色と香 八、岸邊のたき火の情趣 九、今まで作業してゐた採取場に満々潮のさしたのを振返る氣持 一〇、刻み方の調子よさ 一一、すきかたの輕妙さ 一二、乾場の美事さ 一三、乾場に満ちる海苔の香	形式 口語、説明文 修辭 潑刺たる鮮魚の山巨鱈躍り細鱈飛び紅白青黄あらゆる色が交錯散亂する 今や……目が廻るほど忙しい 晝夜を分たず荒波に活動すること十餘日船はおびただしい獲物を満載してひたすらに漁港へ急ぐのである	一、概説 二、用船の具備要件 三、網の構造 四、投網 五、曳網 六、揚網 七、獲物の山 八、獲物の整理、網の處理 九、結尾	一、網の構造、考案の面白味、大いさ 二、投網のうまさ、むづかしさ 三、曳網中の注意 四、揚網時の活氣 五、獲物の山、うれしさ、美しさ、景氣よさ 六、獲補整理の楽しい忙しさ 七、港入りの歡喜	

句	語	字	文	間時	旨	要	注
交錯散亂 碎水	遠洋漁業 漁族 要件 徘徊 滿載 堅牽 積載 鐵船 頂点 水壓 あんかう(名) 萬般 プロペラ ウインチ 監視 留意 一括 滑車 潑刺 巨鱈 細鱈	網中。操縱。要件。風浪。獲物。滿載。積載。場へ。穂網。絲目。水壓。鋼製。マニラ麻。整へ。測り。繰出す。船橋。監視。留意。操る。故障。一括。滑車。括つた。鮮魚。籠。收め。船倉。碎水。揚網。	凡二時	汽船トロール漁業の一般を理解せしめ、遠洋漁業の愉快さや勇壯な活動振りを味はひ賞せしめる	一、無味平板な説明文にならず、描寫を挿入して終始する生き／＼した構想や手法は十分吟味に價する 二、何の滯滞もなく、輕快に、極めて自然に説明を進めて行く筆致を味はふべきである	(農村用)第二十三課 汽船トロール漁業	一、汽船トロール漁業の我國、及び世界に於る現状につき大体解説する方がよいだらう 二、數字的な解説も必要な箇所があるだらう。

週七第									
時	所	旨	要	鑑	賞	注	意	想	文
凡一時	藤岡作太郎「東園遺稿」	親友に對する温い友情や、地方的な色彩等を味は、せる	第二十五課 人形を贈る	一、先覺者、世の指導者即ち大いなる教育者としての人物を十分味得せしむべく努力すること 二、補説を要する箇所多し	六、米國への遣使、慶應義塾の創設 七、慶應義塾の發展と名譽、教育方針 八、西洋知識開發の努力 九、榮譽と終焉	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	形式 候体、書簡文 修辭 事もや、ものにや 何程か御立腹遊ばされ 語法 候事もや 致候ものにや等
凡一時	藤岡作太郎「東園遺稿」	親友に對する温い友情や、地方的な色彩等を味は、せる	第二十五課 人形を贈る	一、先覺者、世の指導者即ち大いなる教育者としての人物を十分味得せしむべく努力すること 二、補説を要する箇所多し	六、米國への遣使、慶應義塾の創設 七、慶應義塾の發展と名譽、教育方針 八、西洋知識開發の努力 九、榮譽と終焉	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	形式 候体、書簡文 修辭 事もや、ものにや 何程か御立腹遊ばされ 語法 候事もや 致候ものにや等	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や

週七第									
時	所	旨	要	鑑	賞	注	意	想	文
凡一時	藤岡作太郎「東園遺稿」	親友に對する温い友情や、地方的な色彩等を味は、せる	第二十五課 人形を贈る	一、先覺者、世の指導者即ち大いなる教育者としての人物を十分味得せしむべく努力すること 二、補説を要する箇所多し	六、米國への遣使、慶應義塾の創設 七、慶應義塾の發展と名譽、教育方針 八、西洋知識開發の努力 九、榮譽と終焉	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	形式 候体、書簡文 修辭 事もや、ものにや 何程か御立腹遊ばされ 語法 候事もや 致候ものにや等	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や
凡一時	藤岡作太郎「東園遺稿」	親友に對する温い友情や、地方的な色彩等を味は、せる	第二十五課 人形を贈る	一、先覺者、世の指導者即ち大いなる教育者としての人物を十分味得せしむべく努力すること 二、補説を要する箇所多し	六、米國への遣使、慶應義塾の創設 七、慶應義塾の發展と名譽、教育方針 八、西洋知識開發の努力 九、榮譽と終焉	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	形式 候体、書簡文 修辭 事もや、ものにや 何程か御立腹遊ばされ 語法 候事もや 致候ものにや等	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や

週七第									
時	所	旨	要	鑑	賞	注	意	想	文
凡一時	藤岡作太郎「東園遺稿」	親友に對する温い友情や、地方的な色彩等を味は、せる	第二十五課 人形を贈る	一、先覺者、世の指導者即ち大いなる教育者としての人物を十分味得せしむべく努力すること 二、補説を要する箇所多し	六、米國への遣使、慶應義塾の創設 七、慶應義塾の發展と名譽、教育方針 八、西洋知識開發の努力 九、榮譽と終焉	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	形式 候体、書簡文 修辭 事もや、ものにや 何程か御立腹遊ばされ 語法 候事もや 致候ものにや等	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や
凡一時	藤岡作太郎「東園遺稿」	親友に對する温い友情や、地方的な色彩等を味は、せる	第二十五課 人形を贈る	一、先覺者、世の指導者即ち大いなる教育者としての人物を十分味得せしむべく努力すること 二、補説を要する箇所多し	六、米國への遣使、慶應義塾の創設 七、慶應義塾の發展と名譽、教育方針 八、西洋知識開發の努力 九、榮譽と終焉	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	一、蘭語を棄て直に英語に就く明敏さ 二、海外渡航の熱心さ 三、歐洲巡遊の得意さと觀察の熱心さ（著書として現はる） 四、私塾創設の意氣 五、名譽と教育主義の清新さ 六、教育の熱心さ、文化啓蒙、社會教化の功績 七、榮譽と満足、感謝	形式 候体、書簡文 修辭 事もや、ものにや 何程か御立腹遊ばされ 語法 候事もや 致候ものにや等	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や

第二十六課 故郷の花

時	所	旨	要	鑑	賞	注	意	想	文
凡一時	平家物語（忠度郎普事）	優にやさしき武人の風流を偲ばせ、忠度の人物とその悲劇的場面を味は、せる	第二十六課 故郷の花	一、自然優長なる京都風に云々——氣の利いた味 二、閉口の色をあらはしたさいふ正直な面白い場面 三、これ幸と逃げ出したをかきさ 四、乗車の時になつてまげられ買はされた面白味 五、思ひ出の可笑味	一、家禽品評會の案内 二、書簡拜借の依頼 三、祭禮不參の詫と桑苗買求めの依頼	一、行文の簡明 二、簡潔の中の禮讓	一、書簡文の試作練習まで引きのばさなくてもよからうと思ふが、日常生活上時々必要も起り又、折々は來翰にも接する機会も多からうから、大体に於て實用的の價值さといふ邊に重きを置いたらよいだらう 二、候の活用法も大体の形式を呑込んで居らればいけない 一々口語と翻譯的に對照せぬと意味がはつきりしないやうではいけない	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や	形式 候体、書簡文 修辭 簡潔に、要領を得たるもの 語法 相成候はんかと存じ 願はるまじく候や

文	字	語	句	文	章	構	想	鑑	
高らか 事の体 ものあはれ 撰集 こよなき まかり越す 秀歌 引合 忘れがたみ 疎略 宜ふ 屍 おぼしくて 口すさじ いさご 件の 勅勘	高らか 事の体 ものあはれ 撰集 こよなき まかり越す 秀歌 引合 忘れがたみ 疎略 宜ふ 屍 おぼしくて 口すさじ いさご 件の 勅勘	形式 文語(古体) 戦記物語 修辭 取つて返し 許におはして 高らかに申されける 事の体何となうものあはれなり こよなき歌 歌ごもの中に 屍の山野にさらさばさらせ 西をさしてぞ歩ませ給ふ ありし有様 さざ波や 荒れにしな、むかしながらの 生涯の面目 語法 いづくより……げん 許におはして 申されけるは 候ふ 苦しかるまじ 得ばと 候ひつるに ゆめく……存すまじう候 いと あはれに覺はて さざなみや、あれにしな、	形式 文語(古体) 戦記物語 修辭 取つて返し 許におはして 高らかに申されける 事の体何となうものあはれなり こよなき歌 歌ごもの中に 屍の山野にさらさばさらせ 西をさしてぞ歩ませ給ふ ありし有様 さざ波や 荒れにしな、むかしながらの 生涯の面目 語法 いづくより……げん 許におはして 申されけるは 候ふ 苦しかるまじ 得ばと 候ひつるに ゆめく……存すまじう候 いと あはれに覺はて さざなみや、あれにしな、	一、忠度俊成卿を訪れる都落の途申 二、自作の集を俊成に渡し希聖を述べ 三、俊成卿の思ひ 四、千載集所載「小波や」の名歌	一、落人ぞ知つて門を閉ぢ打騒ぐ物々しき 二、事の体何となう物あはれなり——悲哀の情趣	三宅恒方「天使の翅」 凡二時 翼(はね)。由緒。 飛翔 由緒正しい	形式 口語常体、論文風の説明文 修辭 いろいろにこじつけある	一、飛行機で昆蟲の仲間入りをするやうになつた(命題) 二、鳥の翼の動物學上の解釋(説明) 三、昆蟲の翅の動物學上の解釋(説明立證) 四、結尾	一、命題の味 二、繪本の面白さ 三、「畫家も困るさ見えて云々」の觀察の妙 四、蝙蝠、天使、天狗、飛魚の引例の面白さ 五、家光の口を引張り出した面白さ、昆蟲にそれを當嵌めた巧みさ

週八第

賞	注	意	旨要
三、風雅の所懐を述べる忠度の眞情——涙 四、俊成の感動 五、今は浮世に思ひおくこそなし——心のさわやかさそのうれしさ 六、詩を口ずさむ忠度の胸中 七、見送りながらそれを聞く俊成の胸中 八、撰集を編む時の俊成の心持 九、さざ波の歌の味 一、調子のうまさ 二、さび 三、懐古の風韻	一、語法が古文体で稍々難解の点もあるが、何よりもその語調語感に味があるのだから、その方面に力を注ぐやうにしたい 二、補説は簡單でよいが、忠度、俊成については比較的細かく補説する方がよいだらう 三、朗讀を繰返し繰返すうちに、自然に、固有のうま味を悟ることが出来るであらう	鳥の翼と昆蟲の翅を比較対照しつゝ、人間の飛行機に縁を結ばせて、學術的な事項を平易に説き來る巧さを味は、せる	有史以來未曾有と稱せられた奉天大會戰の壯絶な戦況を知らせ、我が軍の奮戰の面影を思ひ浮べしめる 凡四時

第二十七課 鳥の翼と昆蟲の翅

出所	時間	文字	句語	文章	構	想	鑑	注	意
三宅恒方「天使の翅」 凡二時	凡二時	翼(はね)。由緒。	飛翔 由緒正しい	形式 口語常体、論文風の説明文 修辭 いろいろにこじつけある	一、飛行機で昆蟲の仲間入りをするやうになつた(命題) 二、鳥の翼の動物學上の解釋(説明) 三、昆蟲の翅の動物學上の解釋(説明立證) 四、結尾	一、命題の味 二、繪本の面白さ 三、「畫家も困るさ見えて云々」の觀察の妙 四、蝙蝠、天使、天狗、飛魚の引例の面白さ 五、家光の口を引張り出した面白さ、昆蟲にそれを當嵌めた巧みさ	一、餘り學術的な解剖をせぬこと 二、説明や論じ方に注目させるがよい	二、説明や論じ方に注目させるがよい	

三 月

第九週

要旨	時間	文字	句語	文章	章
有史以來未曾有と稱せられた奉天大會戰の壯絶な戦況を知らせ、我が軍の奮戰の面影を思ひ浮べしめる 凡四時	凡四時	汚名。根據。鎖す。膚。躍る。断つ。精銳。手裏一掃。連絡。窮追。風塵。抵抗。防禦。據守。遺棄。枚擧。右翼。據る	汚名 す、ぐ 擁す 周密 方策 戦機 敵叢 作戰 計畫 右翼 牽制 壓す 精銳 天馬 精兵 惡戰苦闘 迂回 逆襲 逐次 おびやかす なげうつ 風塵 潰亂 軍門 抵抗 防禦 神速 據守 失踪 輜重車 輔遺棄 猛烈 伏屍	形式 文語、戦記 修辭 なさく 意なく 非常の覺悟 末っ方 堅氷河水を鎖し寒風膚をつんざく 勇氣勃々 突如として 天馬空を行くの勢 驚知るべきなり 猛烈立ちて 敵叢堅うして惡戰苦闘を重ぬ 破竹の勢を以て 息をもつかせず砲火をあげせる 伏屍累々として山野に充滿す 力盡きて軍門に降る 隻影を留めず 枚擧に暇あらず 實に有史以來未曾有の大戦長戰激戦にして……古來稀なる大勝なりき	第二十八課 奉天附近の大會戰

第二十八課 奉天附近の大會戰

構	想	鑑	賞	注	意	旨要	間時	文	字
一、兩軍の對峙 二、戦線の大さ 三、我が作戦計畫 四、右翼戦 五、左翼戦 六、中央軍の戦闘 七、乃木軍の迂回退路遮断運動 八、總攻撃、敵軍潰亂 九、敵軍の逃走とわが大勝 二、結尾		一、戦記獨特な語調語感 二、壯絶な我軍の士氣 三、行軍出動の機敏さ等 四、大勝に關しての感懐	一、原據として「日露戦史」を参照するがよい 二、補説を細かにして、本文から脱線せぬやうに			(女子用)第二十八課 贈物 贈答の心得とその精神を悟らせよ 凡二時		吉凶禍福。贈る。慶弔。中元。現物。序。虚禮。携ふ。	

句語	文	章	吟	味	注	意	旨要	所出	間時	字
吉凶禍福 慶弔 風習 慣習 選擇 用不用 隨時 現物 實利 虚禮 非禮 うとくなる 交情 ゆかし 適合 至情	形式 文語、評論風の説明文 修辭 感情を害す 恩を謝し勢に報ゆ 實利に流れて 不快の念を抱かしむ 往來も……交情も亦うさくな り行く 贈らざるに如かず		一、贈物の精神 二、中元歳暮の心得 三、土産物に關する心得 四、諸注意	一、方法方式は家事作法等に譲つてよい 二、その精神眞意を悟らせぬやうに導くこと			(農村用)第二十八課 春近し 早春海濱の自然美を賞せしめ、春待つ樂しい心持を味 はせよ	相馬昌治「砂上漫筆」 凡二時		氣遣ふ。麗か。快さ。冬圍。家並。

句語	文	章	構	想	鑑
群青 陰鬱 紺碧 川尻 渚 冬圍 蕭然	形式 口語、記事文 修辭 天地は全く思ひもかけぬ……「ありがたい」か うした叫を…… 海の上にも砂濱にも春の光が麗か に 遠くの岬には霞が……砂濱にはもうかげろふが 紺碧にないだ海には船べりに日光を受けた漁船が…… ……かやくやうに見えた 全身を照らす日光の暖か さに吹く風の冷たさも……時ぐらゐる殿かな自 然美を感じることはない 私の背後では緩やかな波 の音が絶間なく續いてゐた	語法 ともするこ 一わたり ……なんかのやうに	一、一夜に變る春色 二、快き早春の空 三、濱邊の春色 四、遠山の景色 壯麗な自然美	一、めつきりと春めく一日——驚きと喜び 二、「有難い」こまで思ふ北國の人達の胸中 三、海邊に漂ふ早春の色 1、砂濱の陽炎、岬の霞、日光に輝く漁船 2、風、子供、大人 3、冬圍を取除いた晴やかさ 4、遠山の名残の雪——眺め入る心持	

第十週

句語	文	章	吟	味	注	意	旨要	間時	文	字
學校園を愛する心持や、園藝的趣味を味はせよ 凡二時	形式 文語、美文風の記事文 修辭 漸くたけなはならんぞす 五六日を出でずして ほころび出づべく あ、希望多き春よ……もの ゆめか、凶事の無かれかし 宜しからざりしため か 可成りの出来 校の飛ぶよりも早しそか 暫し の程ぞ 待たる、ものは秋の日にこそ 語法 忘れられぬべし ゆめ……無かれかし				一、全文に溢れる喜びと力、行文の新味、自然の美し さ等、一言一句おろそかに讀まれぬ材料だ 二、背景は海濱、早春の海邊である 特殊の色と匂ひ がある筈である		第二十九課 學校園		昇級。培ひ。鵝頭。驅除。收穫。山東菜。來賓。	たけなは ほころぶ 培ひ 驅除 蚊やり

構	想	鑑	賞	注	意
一、冒頭 二、果樹園 三、苗床、菊、コスモス 四、鶯頭、一悲劇の挿話 五、除蟲菊 六、蔬菜園 七、天候に對する心配 八、樂しみ(結尾)			一、植物學や園藝の講義に流れてけ困る 二、情趣から外れぬやうに注意 三、女子用はその一部分異なる所あれども、たゞ女らしい描寫に過ぎぬ、その積りで取扱へばよい	一、植物學や園藝の講義に流れてけ困る 二、情趣から外れぬやうに注意 三、女子用はその一部分異なる所あれども、たゞ女らしい描寫に過ぎぬ、その積りで取扱へばよい	一、植物學や園藝の講義に流れてけ困る 二、情趣から外れぬやうに注意 三、女子用はその一部分異なる所あれども、たゞ女らしい描寫に過ぎぬ、その積りで取扱へばよい

(農用村)第二十九課 奉天附近の大會戦

男子用 第二十八課参照

週一十第

章	文	句	語	字	文	問時	所出	旨	要
							徳富猪一郎「國民小訓」	凡二時	國史に眼覺むべきを悟らしめ、國民的自覺と覺悟を感得せしめる
									系圖 功科表 經典 方便 考慮 平等觀 歴史觀 本義 形式的 自主 体面 精神的 詳に 國性 總括 雄辯 一旦緩急 證人 精詳 固陋頑冥 守舊思想 保守退嬰 烏國根性 詭激狂妄 危險思想 浮華輕薄 模倣精神 閑却 株守 うのぼれ 醉生夢死 精神的寶庫
									形式 文語、議論文 修辭……なり……なり……なり 十國あれば……百國あれば…… ……にあらす……にあらす……にあらず……にあらず…… ……や……や……や……や……するも…… ……がため……するも……が爲……するも……がため

第三十課 國史に還れ

構	想	鑑	賞	注	意	
	一、我が國史は國の寶庫經典である 二、特殊の國性を維持することが獨立國の本義 三、國史は日本民族の誇である 四、國史に立たずして日本民族の意義はない 五、思想的不健實も皆國史に立たざる故である 六、國史に還れ、國民生活の意義をつかめ		一、國史に對する觀方の鋭さ 二、獨立國の體面維持を精神的に説く觀方 三、國史を背景にして諸相を眺める立場 四、思想と國史の交遊 五、結論の力強さ	一、力の満ち／＼た文である その力をさらへその力を味はふべきである 二、論法の疊み方を吟味せねばならぬ	一、力の満ち／＼た文である その力をさらへその力を味はふべきである 二、論法の疊み方を吟味せねばならぬ	一、力の満ち／＼た文である その力をさらへその力を味はふべきである 二、論法の疊み方を吟味せねばならぬ

第二學年 第一學期

約十六週凡六十四時間 (二週四時)

月	四	月	週
週	一	第	一
要		目	
卷 三 第一課 春晴千里			
要旨	所出	間時	備準
春の旅情と景物の具閑さを味は、せ、艶麗優雅な筆致を賞せしめる	大和田建樹「雪月花」	凡三時	地圖 (東海道、京都市) 京都名勝繪葉書類
文	字	語	句
澄む。波路。遠近。懐かし。現。大原女。舞臺。櫻門。鐘。踏む。點綴。大悲閣。途に。夕陽。彩る。	詠す 朝日將軍 鳩の浦風 大原女 あこがれる 一幅 四條詣 香煙 讀經 岩根 點綴 たげなほ さまざざん 暮色 四望唯寂寞		
章		文	
一、序説		一、市中の散策(序説)	
二、東海邊の風物		二、清水寺附近の春景色	
三、湘南地方の情趣		三、御室の春	
四、駿河灣邊の景色		四、嵐山の春	
五、名古屋地方の眺望			
六、琵琶湖畔の景趣			
七、京都情緒			
二、京都遊覽紀行			
形式 文語、美文体、紀行文		形式 文語、説明文	
修辭 全文殆ど對句法を以て修飾してある 之に連鎖		修辭 畢世の心血をしぼる 十年苦心の作 紙魚のす	
漸層等の手法を加へ美文特異の格調を保たせてある		みかとなる 堪難き遺憾の情 手の中の珠と慈む	
語法 何ものか……漏れん			

月	週	要	目
週	二	第	二
要		目	
第二課 五百羅漢の畫幅			
要旨	所出	間時	備準
律義に堅い人達の心情を中心に、私物私心を持たず義氣に厚い名僧の心境、苦心慘澹たる畫家の心境を味は、せ、小さき一片の義理が如何に大なる功績を致したかに感懐あらしめる	藤岡作太郎「國文學史講話」の序文	凡二時	本誓寺。供養。懸列ね。善く。前賢故實。辱くも。上木。折節。漏る。珠。慈む。婿。里方。遣はす。大徳。聖。衆生。濟度。便。往生。脱稿。亡者。施主。功德。齋戒。往生の縁。遺憾。
文	句	語	章
五百羅漢 畫幅 苦心慘澹 大作 供養 善く 畢世 心血 辱くも 神號 動機 書肆 上木 折節は 前まかる 衣服調度 押問答 腕、まめく おぼす 大徳 名僧 聖 託しまゐらす 衆生濟度の便 往生の縁 脱稿 亡者 施主 功德 施主 功德 ふさはし 沐浴 齋戒 什物	形式 文語、説明文	形式 文語、説明文	形式 文語、説明文
修辭 畢世の心血をしぼる 十年苦心の作 紙魚のす		修辭 畢世の心血をしぼる 十年苦心の作 紙魚のす	
みかとなる 堪難き遺憾の情 手の中の珠と慈む		みかとなる 堪難き遺憾の情 手の中の珠と慈む	

章	構	想	鑑	賞	注	意
<p>身まかりぬ 草葉の蔭にも 淨土宗の大徳古今の名僧 涙ぐむまで有難く 善いかな…… 如何にもして…… 足るものな …… なりとかがや</p> <p>語法 或は……なるべし 身まかる なりぬべし か、りしなりけり 送げられたりければ 如何にしてか……べき ……なれ ……かや</p>	<p>一、冒頭</p> <p>二、前賢故實の大作なる所以と稿本上木の困難と容齊の遺憾</p> <p>三、律義な商人の義舉、行誼の義氣、前賢故實の出版完成、五百羅漢畫像の由來</p>	<p>一、前賢故實の權威</p> <p>二、二商人の義理堅さと義舉の美しさ</p> <p>三、行誼の人格と客齊の歡喜</p> <p>四、客齊親恩の眞情、畫像由來に關する感慨</p>	<p>一、語調、文脈古態を帯びて一種の重みを有つてゐる 落着いて吟味せねばならぬ</p> <p>二、用語に佛語多し よく意解すべきこと</p> <p>三、佛教思想上の事項の取扱ひも十分の用意を必要とする 一片の語句としての解釋も、深い意氣あらしめたい</p>	<p>一、語調、文脈古態を帯びて一種の重みを有つてゐる 落着いて吟味せねばならぬ</p> <p>二、用語に佛語多し よく意解すべきこと</p> <p>三、佛教思想上の事項の取扱ひも十分の用意を必要とする 一片の語句としての解釋も、深い意氣あらしめたい</p>	<p>二、起源の面白さ</p> <p>三、漢字構成上の巧さ、面白さ 六法則の吟味</p> <p>四、發達進化の經路</p>	<p>一、漢字の構造につきては、その大体を知らせるだけでもよいが、六法に即して稍々詳しく具体的に説明して置く方がよいと思ふ</p> <p>二、ローマ字綴なども餘暇に教へてやつてよいと思ふ</p> <p>三、エジプト文字は卷二エジプトの遺跡の課にオベリスクの挿繪がある 連絡させるがよい</p>

週三第

第三課 文字

章	文	句	語	字	文	間時	旨	要
<p>一、文字の價值</p> <p>二、文字の意義と沿革</p> <p>三、漢字の構造</p> <p>四、假名文字の製作</p> <p>五、文字の發達と進歩變化</p> <p>六、文字の種類</p>	<p>形式 口語、常体、説明文</p> <p>修辭 其の大半は文字の功に歸しなればならない 繪畫の域を脱す</p> <p>語句 ……であつて 然も……である</p>	<p>前代 世態 思想 通ず 後人 功に歸す 書記す</p> <p>備忘 あはせ用ふ 草体 域を脱す</p>	<p>世態。符號。然。備忘。象。つて。割いて。超える。</p> <p>音標。草体。象形。</p>	<p>世態。符號。然。備忘。象。つて。割いて。超える。</p> <p>音標。草体。象形。</p>	<p>凡三時</p>	<p>文字の文化的價值を吟味し、世界に於ける主要なる文字の起源や構成上の面白さを味はせしめる</p>	<p>一、生き／＼した比喩を洗練された活喩の連鎖で終始してゐる その妙味を味はせしめるのである しかしそれは文章法的な取扱ばかりでなく、事象に對する 觀照的な吟味をさせるべく取扱ふことを要とする</p> <p>二、鳥の名等は究明する必要はない</p>	<p>一、所と時</p> <p>二、鳥の聲の描寫</p> <p>三、湖上の風望</p> <p>一、湖畔の朝景色、座敷に入る朝日の氣分</p> <p>二、雲海の眺め杉のほこ、鋸齒の山容</p> <p>三、自分の呼吸の外何の物音もない静けさ</p> <p>四、小鳥の合奏、應答の面白さ</p> <p>五、高音の變調</p> <p>六、山鳥らしい急調な鳴聲</p> <p>七、鶯の聲の混聲、形容描寫の妙</p> <p>八、低音描寫の巧さ</p> <p>九、湖上の風望、谷が深く見わたる感じ</p>

文	句	語	字	文	間時	所出	旨	要
<p>形式 口語、常体、記事文(寫生)</p> <p>修辭 全体に比喩が多く、更にそれを活喩的に描寫し</p>	<p>調和 急調 織成す 顰口 つぶやく 低調 不平 漢々</p>	<p>雲海 ほこ 我物顔 高音を張る り、しい 空山</p>	<p>雲海。合奏。高音。漂ふ。</p>	<p>凡三時</p>	<p>高濱清「新寫生文」</p>	<p>鳥の聲の美しさを稱へ、寫生文の妙趣を味はせしめる</p>	<p>第四課 鳥の聲</p>	<p>一、漢字の構造につきては、その大体を知らせるだけでもよいが、六法に即して稍々詳しく具体的に説明して置く方がよいと思ふ</p> <p>二、ローマ字綴なども餘暇に教へてやつてよいと思ふ</p> <p>三、エジプト文字は卷二エジプトの遺跡の課にオベリスクの挿繪がある 連絡させるがよい</p>

週四第

第五課 感情

章	文	句	語	字	文	間時	旨	要
<p>一、所と時</p> <p>二、鳥の聲の描寫</p> <p>三、湖上の風望</p> <p>一、湖畔の朝景色、座敷に入る朝日の氣分</p> <p>二、雲海の眺め杉のほこ、鋸齒の山容</p> <p>三、自分の呼吸の外何の物音もない静けさ</p> <p>四、小鳥の合奏、應答の面白さ</p> <p>五、高音の變調</p> <p>六、山鳥らしい急調な鳴聲</p> <p>七、鶯の聲の混聲、形容描寫の妙</p> <p>八、低音描寫の巧さ</p> <p>九、湖上の風望、谷が深く見わたる感じ</p>	<p>形式 口語、常体、説明文</p> <p>修辭 其の大半は文字の功に歸しなればならない 繪畫の域を脱す</p> <p>語句 ……であつて 然も……である</p>	<p>前代 世態 思想 通ず 後人 功に歸す 書記す</p> <p>備忘 あはせ用ふ 草体 域を脱す</p>	<p>世態。符號。然。備忘。象。つて。割いて。超える。</p> <p>音標。草体。象形。</p>	<p>世態。符號。然。備忘。象。つて。割いて。超える。</p> <p>音標。草体。象形。</p>	<p>凡三時</p>	<p>文字の文化的價值を吟味し、世界に於ける主要なる文字の起源や構成上の面白さを味はせしめる</p>	<p>一、生き／＼した比喩を洗練された活喩の連鎖で終始してゐる その妙味を味はせしめるのである しかしそれは文章法的な取扱ばかりでなく、事象に對する 觀照的な吟味をさせるべく取扱ふことを要とする</p> <p>二、鳥の名等は究明する必要はない</p>	<p>一、所と時</p> <p>二、鳥の聲の描寫</p> <p>三、湖上の風望</p> <p>一、湖畔の朝景色、座敷に入る朝日の氣分</p> <p>二、雲海の眺め杉のほこ、鋸齒の山容</p> <p>三、自分の呼吸の外何の物音もない静けさ</p> <p>四、小鳥の合奏、應答の面白さ</p> <p>五、高音の變調</p> <p>六、山鳥らしい急調な鳴聲</p> <p>七、鶯の聲の混聲、形容描寫の妙</p> <p>八、低音描寫の巧さ</p> <p>九、湖上の風望、谷が深く見わたる感じ</p>

時	凡三時
文	憎悪。悔悛。修練。緊要。慈恵。偏す。怨恨。抑制。憤む。反省。憤怒。西諺。選す。顛倒。推奨。襲來。測る。逸る。膽勇。識者。侮る
語	發動 人格修養 要件 處世 緊要 仁愛慈恵 至善 至美 德義 ゆるかにす 好む所 偏す 憎惡怨恨 交情 離反 抑制 長ぜん 終身 恕 智徳 功を積む 憤怒 言行 常軌 逸す 冷靜 西諺 言動 服す 品位 怒を遷す 難事 いたく 稱せり 成功 利達 排斥 萌芽 推奨 憂懼 天變地異災厄 共に謀る 膽勇 識者
文	形式 文語、論文風の説明文 修辭 ……するも……するも 至善、至美なる、其の好む所に偏して公平を失す 火を以て火に加ふるが如し 怨恨を買ふ 古今東西其の例に乏しからず 怒の最後の瞬間は後悔の最初の瞬間なり 修養至る 無能なる弱者 何時我が身邊に襲來せんも測り知るべからず 天命に任ずる 血氣の勇に逸る 獨り自ら……識者の笑を免れず
章	語法 ……下すのみ、顧みざれ
構	一、感情修練の必要

週五第

想	二、憎惡怨恨の抑制 三、憤怒を憤むべきこと 四、嫉妬の抑制 五、憂懼に對する修練
吟	一、感情の接觸離反と交情との關係 二、仁愛慈恵の至情 三、憎惡怨恨の醜さ、襟度の廣狹 四、西諺の眞意とその教訓の味 五、嫉妬の醜さ、他人の長所推奨の美しさ 六、憂懼を遷さける眞實の道と暴勇
注	一、論說風の筆致で多少難解の所もあらうが、文の調子から止むを得ない所でもあらう 平易に具體的に取扱ふやうに用意すべきである
要	第六課 ヘスタロツチ 教育界千古の偉人ヘスタロツチがその生涯を一貫して教育に捧げた至誠至愛の人格、精神を讀へしめ、その面影を思ひその精神に感激せしめる
時	凡三時
文	街頭。粗服。開塾。怠慢。堅忍不拔。毫。粗漏。淵源。寓す。革命。窮乏。熟睡。幾何。忌む

月五

字	劇烈。關節炎。患ふ。謁見。顛倒。
語	まごふ 品性 純良 熱情 救世濟民 荒蕪の地 怠慢 遁走 毫も 粗漏 蟄居 寓す ゆるがせにする 餘波 流離 廢寺 窮乏 同僚 忌む 諄々として 倦む 逸事 劇烈 關節炎 患へて 謁見 顛倒 低回俯仰
文	形式 文語、傳記文 修辭 非難の聲を以て報いられ 全人類の名を以て 其の極に達す 百方勸誘する 看護至らざるなし 察するに餘りあり 諄々として チューリヒ市街頭 行人旅客をして其の像下に低回俯仰せしむるもの 眞に故なきにあらず
章	語法 思へらく
構	一、冒頭 二、少青年時代と生立 三、ノイホフの貧民教育とその著書の感化 四、スタンツの孤兒教育 五、名聲と晩年の生活、終焉 六、逸話 七、結尾（評論、第一段冒頭との對應）
想	一、銅像の具へた風貌の味

週六第

賞	二、貧民教育をやる熱情 三、自ら反省して世の非難に堪へ更に堅忍努力を積む 意氣と熱意の偉大さ 四、プロキヤ王妃の述懐 五、孤兒教育の困難辛勞、起居寢食を共にする愛の心の偉大さ 六、貧民學校で排斥される世態とヘスタロツチの人格 七、事業の成功と其の名譽及びその熱情 八、晩年に於て日常生活が物語る熱情 九、逸話の味
注	一、結尾の一段に注目すること 二、愛と努力と熱意である 感激である 生温い説明ではない 角張つた解釋ではない 讚仰である
要	第七課 川柳 川柳趣味を鑑賞せしめ 川柳の一般について會得せしめる
出	講風柳樽其他
時	凡二時
文	額。

句語	さかく 勢 あさり とはうづもなく かしこまり 背高
鑑	<p>「武藏坊」 七ツ道具からの諷刺の味 さかくの修辭的な利き方さ味 「義貞の」 鎌倉勢も踏みつぶしたが、その前にあさりなも踏みつぶした あさりこそよい迷惑である その皮肉の味 「尊氏」 逃げも逃げたものだ、途方圖もないさ、いゝ諷刺 「道間へば」 一度に動くの妙味、田舎情緒の味 「寝てゐても」 母性愛をねらつた手際、人情の機微 「長話」 蜻蛉一匹で長話を生かした味 「取次に」 煤拂ひの時の可笑しみ 「黒犬を」 反對措辭の可笑しみ 「雨宿り」 所在なさの氣持と、機微</p>
賞	<p>「犬を見て」 「背中へ腹」の可笑しみ 「いゝ着物」 子供心の機微 「はしこ賣」 行商人らしい氣軽さと、口の軽さうな態度 「知つた人」 子供心の機微 「いゝ所へ」 兩方の得意さ、兩方の高慢さ、その皮肉 「人を汲出して」 「人を汲出す」の可笑しさ</p>
注	<p>一、皮肉、諷刺、寸鐵人を刺すといふ妙趣である 説明てはいかない 悟りである 導きである 發見である そしてそれが究極には笑に到達するものだ 二、補材を他に色々探つて來てもよい しかし選擇に注意を要する 飛んだものが飛出すから</p>
第八課 噴油	
要旨	油井噴出の壯觀を想ひ浮べしめ、その狀景を味はせ
所出	杉村廣太郎「ひこみの旅」

句語	珍客 うごめく 一天 沛然 驟雨 先驅 草雙紙 黃龍 餘瀝 轟々 火先 火氣 さもすれば
文	形式 口語、常体、犯行文 修辭 何だか楽しみなやうな心配なやうな……覺はたすばやさばかり……見やれば 大蟬…… 赤犬…… 波の花…… 黃龍…… 一天……沛然として…… 其他口調の上に、文語「汲取るさころ一千樽にして」 「去んぬる」等が交つて調子を張つてある 語法 去んぬる
章	一、序説 二、噴油に對する期待 三、自噴光景 四、全 五、噴出の量、火事 六、人夫の作業 七、他方面の見物へ
構	
想	
賞	<p>一、石油自噴の不思議さ 二、加津保深油井の噴出量のひこみさ 三、自噴目撃前の期待さ、その氣分 四、噴出光景の壯觀 五、油井火事の恐しさ 六、人夫達の作業さその有様</p>
注	<p>一、地理、理科に墮ちてはならぬ 二、壯觀そのものが主である 材料的事實はその背景である 顛倒してはならない</p>
(女子用) 第八課 雀	
要旨	「愛は死よりも、死の恐怖よりも強い」——この主想を靜かに落ちついた氣持で味はせ
所出	ツルゲエネフ散文詩(生田春月譯)
間時	凡二時
字文	逆立て。戦く。怪物。衝動。
句語	ささみ足 忍びやか つぶて 恐怖 後じさり 衝動 敬虔の念
文	形式 口語常体、叙事文 修辭 忍びやかに 見やる 哀な絶望の叫 その安全

章	構	想	鑑	賞	注	意
文脈	<ul style="list-style-type: none"> 一、犬の態度の變化 二、一羽の子雀 三、親雀の突然な救助 四、親雀の有様 五、親雀に對する同情 六、犬の心 七、自分の執つた態度 八、死よりも強い愛の偉力 	<ul style="list-style-type: none"> 一、二ささみ足になつた足の有様 二、子雀の姿態描寫の巧さ、可憐さ 三、親雀の悲壯な態度、その胸中 四、「彼の目には」云々の同情の念の有つ餘韻 五、犬も亦此の力を認めたとに違ひない——愛の偉力 六、愛は死よりも強い——敬虔の念に打たれた感慨 	<ul style="list-style-type: none"> 一、構想は便宜上之を區分して見たが、普通文の構想とは大いにその趣を異にしてゐる。それは矢張り散文詩の形式を具へてゐるためである。注意すべきである。 二、靜かに一言一句を味はふべきこと 	<ul style="list-style-type: none"> 一、構想は便宜上之を區分して見たが、普通文の構想とは大いにその趣を異にしてゐる。それは矢張り散文詩の形式を具へてゐるためである。注意すべきである。 二、靜かに一言一句を味はふべきこと 	<ul style="list-style-type: none"> 一、構想は便宜上之を區分して見たが、普通文の構想とは大いにその趣を異にしてゐる。それは矢張り散文詩の形式を具へてゐるためである。注意すべきである。 二、靜かに一言一句を味はふべきこと 	<ul style="list-style-type: none"> 一、構想は便宜上之を區分して見たが、普通文の構想とは大いにその趣を異にしてゐる。それは矢張り散文詩の形式を具へてゐるためである。注意すべきである。 二、靜かに一言一句を味はふべきこと

第七週

要旨	文	句語	字	文	吟	味
<p>第九課 旅行先より先輩へ</p> <p>卷二「人を紹介する手紙」に連絡した、その旅行先より紹介を依頼した先輩へ對して取りあへず送信した手紙である。紹介に對しての厚意と配慮に對する感謝の眞心を汲取らせる。</p>	<p>形式 候体書簡文</p> <p>修辭 唯々當惑…… 暗夜に光明を得たる心地</p> <p>語法 候活用形</p>	<p>御懸論 御配慮</p>	<p>凡一時</p> <p>懇諭。名刺。不馴。偏に。</p>	<p>一、感謝の念</p> <p>二、視察の熱心さ</p> <p>一、材料的に詳細な解説を必要としない</p> <p>二、あつさり進行すること</p>	<p>（女子用）第九課 歸宅の日取を問合はず</p> <p>里の祖父の病氣見舞に行つてゐる母に對して歸宅の日取を問合せて手紙である。病人や母や、突然訪問の來客に對して表はされた情味を味はせる。</p>	<p>一、材料的に詳細な解説を必要としない</p> <p>二、あつさり進行すること</p>

文	間時	旨	要	意	注	賞	鑑	想	構	章	文	句語	間時
<p>第十課 ナホレオン</p> <p>英傑ナホレオンの曲折多き生涯の歴史と、その大事業を成さしめた根本である、艱難努力の精神剛毅不屈の氣象に感動せしめる</p>	凡五時			<ul style="list-style-type: none"> 一、女生らしい候活用形、及び言ひ廻し等特に注意すべきである 二、發信者とし子といふ娘の温い心やりが全文の生命である、發信者といふものを見落してはならない 	<ul style="list-style-type: none"> 一、女生らしい候活用形、及び言ひ廻し等特に注意すべきである 二、發信者とし子といふ娘の温い心やりが全文の生命である、發信者といふものを見落してはならない 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	<ul style="list-style-type: none"> 一、病氣見舞と留守宅の様子 二、歸宅の日の問合せ（本文） 一、病人に對する情味（久々にての御いでとて云々） 二、留守宅の次郎の様子を報する心持 三、鈴木夫婦に對する心やり 	凡一時

文	句	語	字
<p>形式 文語、傳記文</p> <p>修辭 他日赫々たる功業を成すの素質たり 天地を震撼す 一代の英雄が風雲に乗じて回天の事業を成すべき時は來れり 勇名頼に高し 其の凱旋してパリに入ると市民歡呼して之を迎へ辭讓一時に加はる人心動搖す 破約の罪を鳴らして 時恰も晩春積雪尙山谷を埋め將卒其の行を危む 豈余を妨ぐるアルブ山あらんや 外政の鋒をなまめ 擧げて敷ふべからず 儀容堂々として場を臨み 一舉にして……積</p>	<p>奇兵 監視 配所 弱点 絶海 憤死 末路</p>	<p>英傑 遭遇 つとに 剛毅不屈 助成 克己 歎稱 赫々 ひとごとく 異日 震撼 豫言 狂暴殘虐 底止 回天 風雲 暴政 激す 頼に 境を犯す 窮地 動搖 統轄 解散 峻嶺 昂然 政策 締結 財政 制度 法典 編纂 金融機關 創設 貢獻 民望 博す 儀容 堂々 帝冠 積年 切齒 失意 銳鋒 撤す 紛糾 用兵 王國 共和國 威力 膨す 反抗 雄圖 抑壓 長驅 舊都 豪邁不屈 掩擊 踊躍 屈辱 衆寡 訓練 區々 脱出 恩顧 及 盛衰浮沈 畢生</p>	<p>粉碎。同盟。屋舎。凌ぐ。鎮す。凍死。勇致。還る。及。委憤。陥る。衆寡。脱出。一期即。</p>

<p>年の怨恨を散ぜんさす あゝ余をして……たらしめば……得べきに 失意察すべきなり 其の用兵の機敏なること鬼神の如し 全土を靡す 軍旗の向ふ所將卒走り帝王拜す 征逐萬里無人の境を行くが如く馬驅して舊都モスコを衝く 時に天既に寒く積雪滿地軍を行るべからず 屋舎の以て寒を防ぐべきなく 糧食の以て飢を凌ぐべきなし 豪邁不屈のナボレオンも 堅氷廣野を鎖し深雪行路を埋め兵馬の凍死するもの其の數を知らず 加ふるに勇敢なるコサツク兵の機に乗じ 掩撃するあり 列國は踊躍して積年の屈辱に報ゆる此の時に在り 如何せん衆寡敵せず 訓練の功を積まず 議論區々にして容易に決すべくもあらず 皇帝萬歳の聲湧くが如く 及に血ぬらすして 全土また色を失ふ 此の一戦は……世の知勇を振るひて……其……するや……成らず……得ず百計……に盡きて終に…… 配所の月に對して榮華の昔をしのびつゝ憂憤六年五十三歳を一期として此の孤島に歿せり 希世の英傑ナボレオン亦此の凡情を脱する能はず……天地を震撼し帝王の帝王と歌はれたる身を以て空しく絶海の孤島に憤死せる其の末路何ぞそれ哀なる</p> <p>語法 ……たらしめば……得べきに 豈……あらんや</p>
--

週八第

<p>一、生立 二、將校時代 三、第一統領となる 四、オーストリア征討 五、内治の整頓 帝號を稱す 六、トラファルガーの敗戦 七、アウステルリッツの大戦 八、プロシヤ攻略 二、配流終焉まで</p>	<p>一、幼時に受けた艱難辛苦が忠實克己、勤勉な精神を剛毅不屈の氣象を助成したといふことに關する反省 二、ルソーの豫言に胸を躍らすナボレオンの心中 三、世の亂れと英雄の奮起 四、バリー凱旋の揚々たる威風 五、三十一才に第一統領となつた時の胸中 六、アルプの峻険を軍行する意氣 七、内治に於けるナボレオンの功績と民望 八、帝位即位式の儀容 九「あゝ余をして」の感慨と失意</p>
--	--

<p>二、モスコ行軍の威風 三、モスコ敗走の失意 四、再び帝位に即きし時の歡呼と列國の驚愕 五、ワテローの敗戦 六、敗戦後の失意と投降の心持 七、配所の感慨と憤死の胸中 八、ナボレオンに對する評言の含蓄、感慨</p>	<p>一、補説を要する箇所多けれども、詳細に過ぎざるやう考慮すること 二、奈翁の好戦的な態度を汲み採らんとするのではない、その意氣を汲み取らんとするのである 時代といふものを忘れてはならない 現代に奈翁の生命のあるのには何か現代的な所以がある筈である 三、最後の評言に注目せねばならぬ。最も重要な一項である</p>	<p>賞</p>	<p>意</p>	<p>注</p>	<p>要</p>	<p>旨</p>
--	---	----------	----------	----------	----------	----------

(女子用)第十課 小野寺十内の妻

十内の妻丹女の家の爲一族が擧つて義に殉じたその後を追ひ、自らその行に類へた義氣、風流のたしなみありし生涯、夫妻の濃やかな間柄等に感じ入らせる

<p>凡二時</p> <p>辭世。丹女。音信不通。類へ。感。堪能。風雅。嗜。外山。死手。行方。嗣ぐ。自及。經義。</p> <p>辭世 里方 義舉 くみせず 藩中 離散 嗣ぐ 類へり 自及 義烈 みまかる 經義 堪能 風雅の嗜 外山 よみぶり 死手 あづま路 よりより 返歌 そこもと 涙せきあへず</p> <p>形式 文語、傳記文 條辭 夫は……子は……自及して果てぬ これを思ひ彼を思ひし丹女の心の中あはれ加何ばかりなりけん 秋といはせの(懸詞) またあふ坂を(念) もみぢがつ散る 死手の山こえ 思ひの雲の立ちそふや 數にもれなん身の行方かな。 思へばく(聲)し 語法 言越しし旨もあればとて 斯くありしにも似ず みまかりきとなり たぐへやせまし 斯くてや人の 住みぬらん たちそふや こそ……なれ</p>	<p>一、略傳 夫を助け子を勵まして義舉に殉ぜしめ、婦道を全うして果てた義氣 二、和歌の嗜 三、一族に對する評言稱讚 一、辭世の悲壯な心持</p>
---	---

週九第

要	賞	注	意
壯大美妙、千變萬化窮りなき空の景色を讀へしめ、豪	<p>二、里万の不義理を思ふ丹女の心</p> <p>三、京都にある丹女の胸中</p> <p>四、絶食して死する義氣</p> <p>五、風雅の嗜に生きた日常生活</p> <p>六、春風の歌の存心地（人おごろかす）</p> <p>七、登瀛の歌の秋思（秋といはせ、かつ散る）</p> <p>八、「別れても」の歌</p> <p>離愁と心の覺悟</p> <p>九、「故郷に」の歌</p> <p>松にことよせて妻を思ふ心</p> <p>一〇、「別れ行く」の歌</p> <p>切々とした哀別の情</p> <p>二、「よりよりに」の歌</p> <p>死を思ひ妻を思ふ綿々の情</p> <p>三、「返歌の如何に悲しかりけん」の思ひ</p> <p>四、秀和の手紙「そこもと云々」の示す感じ</p> <p>一四、結尾、感慨の情、賞讃の情</p>	<p>一、和歌の意味がむづかしい 十分な用意をしないとその心境に觸れさせることが困難だらう</p> <p>二、義と文の二道一如な所に注目せねばならぬ</p>	<p>一、冒頭序賦の感じ</p> <p>二、朝雲の色彩變化の美しさ、然も毎朝同じからずといふ餘韻</p> <p>三、碧空の爽快さ</p> <p>四、離合集散常なき雲の眺の面白さ</p> <p>五、入道雲の奇觀</p> <p>六、夕立空の気分、霧間もれる日の光、虹の美</p> <p>七、秋空の透きさほるやうな氣持</p> <p>八、夕映の美しさ</p> <p>九、夜の空の神秘</p> <p>一〇、地上の風景を美化する空の景色の價値</p> <p>二、その舉例された名勝の美</p>

第十一課 空の景色

壯大美妙、千變萬化窮りなき空の景色を讀へしめ、豪

旨	問時	備準	文	語	句	文	章	構	想
快壯重な美を味は、せる	凡二時	適當な繪畫寫真類	くわんまん あかづきま せうごく やまけ たちこ かわは	綾漫。曉。疊々。山の端。立籠む。覆はれる。	きょうじゆめ さんえう けん	興趣。山腰。現す。	壯大美妙 瞬時 曙光 靨露 曉靄 碧空 爽快 離合集散 蛟龍 天馬 金箭 疊々 興趣 星辰 洪大 無邊 景物 雨奇嗜好 一抹 ゆかし	形式 文語、美文風の記事文 修辭 對句、連鎖、比喩、引用等隨所に多し 語法 深からずや 覺ゆるにあらずや	一、序説、變化窮りなき美 二、曉雲團圞く朝空の美觀 三、夏空の雲の奇觀 四、驟雨の空の壯觀 五、秋空の爽快な美しさ 六、夕空の美觀 七、夜の空の美觀 八、結尾 地上の景色を美化する

鑑	賞	注	意	要旨	問時
<p>一、冒頭序賦の感じ</p> <p>二、朝雲の色彩變化の美しさ、然も毎朝同じからずといふ餘韻</p> <p>三、碧空の爽快さ</p> <p>四、離合集散常なき雲の眺の面白さ</p> <p>五、入道雲の奇觀</p> <p>六、夕立空の気分、霧間もれる日の光、虹の美</p> <p>七、秋空の透きさほるやうな氣持</p> <p>八、夕映の美しさ</p> <p>九、夜の空の神秘</p> <p>一〇、地上の風景を美化する空の景色の價値</p> <p>二、その舉例された名勝の美</p>	<p>一、美文的である 文の力と美はそれから来たものだ</p> <p>その邊の呼吸がむづかしい</p> <p>二、解釋のために文の美を顧みないやうでは困る</p> <p>三、引用された和歌俳句は具体的に指摘すべきものと</p> <p>思ふ。</p>	<p>一、美文的である 文の力と美はそれから来たものだ</p> <p>その邊の呼吸がむづかしい</p> <p>二、解釋のために文の美を顧みないやうでは困る</p> <p>三、引用された和歌俳句は具体的に指摘すべきものと</p> <p>思ふ。</p>	<p>西洋の家庭と日本の家庭との組織上及び形式上の異なる點を明かにし、お互の特徴を比較して國民性的色彩を味は、しめる</p>	凡二時	

(女子用)第十一課 西洋の家庭

字	語	文	章	構	想	吟	味	注
到來物 清楚 絨氈 いぶす くしげづる 打ちくつろいで 睦び合ふ	形式 口語常体、説明文 修辭 主婦たる人の 清楚にして趣の深い ……ながら……ながら又は……のは	一、西洋の客間 二、西洋人の家庭生活 三、西洋の主婦の勤め 四、西洋婦人の日常と嗜み 五、日常の仕事	一、客間のはでやかさ（日本の清楚との對比） 二、晚餐の禮儀の正しさと樂しさ 三、來客接待の風習（日本の風習との對比） 四、主婦の任務は東西同一であること 五、食品の買出しに行くつゝ、ました 六、日常の質素な又勤勞を好む風習 七、衣服の世話に關する世評が東西似てゐる面白さ 八、日常の仕事、訪問時間の一定された都合好さ	一、日本家庭の缺點に對する改善方面の事項に關接的に觸れるものである				

月 六 週 十 第											
意	要旨	備準	間時	句語	文	章	構	想	吟	味	注
二、日本は日本としての美点あることを忘れてはならない の 西洋の模倣であつてはならない	第十二課 望遠鏡と顯微鏡	望遠鏡及顯微鏡の文化的價値を顧みさせる 實物又は寫眞繪畫	凡二時	實距離 觀望 精巧 斑点 星學 遺体 形質 病原	形式 口語常体、説明文 修辭語法 別に特記すべきものなし	一、望遠鏡の偉力と發明及改良進歩 二、望遠鏡の功績 三、顯微鏡の發明と改良進歩 四、顯微鏡の偉力と功績	一、偉力に關して 二、星學、細菌學の進歩と文化的功績 三、人智進歩の偉大さ	一、理科的教材であるが、その本旨を誤つてはならぬ 二、前課に空の景色、本課に望遠鏡と顯微鏡大課にバクテリアその連絡を保たしめた編纂上の用意を知つ			
て置きたい	第十三課 バクテリア	各種バクテリア標本及び繪畫類 顯微鏡 擴大。假定。肝要。	凡二時	微細 擴大 自体 分裂 假定 繁殖 寄生 暴威 たくましくする 肝要 醗酵 累々	形式 口語常体、説明文 修辭 暴威をたくましくする 累々として慘澹たる光景は實に見るに堪へないであらう	一、バクテリアの大きさ 二、繁殖力 三、人体に有害なるバクテリア 四、人生に有益なるバクテリア 五、腐敗に關する感慨 (バクテリアの恩恵)	一、これも理科的教材であるが、理科的吟味のみで満足してはならない それ等は單に材料であつて文				

週一十第

月 六 週 十 第											
意	要旨	備準	間時	句語	文	章	構	想	吟	味	注
の 本旨はその材料的な事項から生れる所の感懐そのものである 履き違へてはならない	第十四課 阿閉掃部	望遠鏡及顯微鏡の文化的價値を顧みさせる 實物又は寫眞繪畫	凡二時	實距離 觀望 精巧 斑点 星學 遺体 形質 病原	形式 口語常体、説明文 修辭語法 別に特記すべきものなし	一、望遠鏡の偉力と發明及改良進歩 二、望遠鏡の功績 三、顯微鏡の發明と改良進歩 四、顯微鏡の偉力と功績	一、偉力に關して 二、星學、細菌學の進歩と文化的功績 三、人智進歩の偉大さ	一、理科的教材であるが、その本旨を誤つてはならぬ 二、前課に空の景色、本課に望遠鏡と顯微鏡大課にバクテリアその連絡を保たしめた編纂上の用意を知つ			
三、主人公の奇遇 四、主人公の出世と評言 (主想)	(女子用)第十四課 甲冑堂	各種バクテリア標本及び繪畫類 顯微鏡 擴大。假定。肝要。	凡二時	微細 擴大 自体 分裂 假定 繁殖 寄生 暴威 たくましくする 肝要 醗酵 累々	形式 口語常体、説明文 修辭 暴威をたくましくする 累々として慘澹たる光景は實に見るに堪へないであらう	一、バクテリアの大きさ 二、繁殖力 三、人体に有害なるバクテリア 四、人生に有益なるバクテリア 五、腐敗に關する感慨 (バクテリアの恩恵)	一、これも理科的教材であるが、理科的吟味のみで満足してはならない それ等は單に材料であつて文				

語句	文	章	構	想	鑑	賞
城下 奥州筋 あき寺 心根 いでたちて 凱陣 矢面 契る 先立つ 義烈 軍めく ゆゝし	形式 文語、敘事文 修辭 引用「東遊記」原文	形見ばかり歸りぬ 勇ましげにいであちて 孤梟のすみかこいふも餘りあり 大破に及び 弓矢取る身今はの一言 袖を絞る 世にもめでたき例ならずや 故あるかな 苦しげなる息の下に 語法 ……こそ契りし ……だに にや	一、東遊記の引用、序説 二、由來、兄弟の討死、嫁の孝養と雄々しき 三、兄弟の最後と感想	一、兄弟揃つての忠死 二、母の悲歎(義經主従の心痛) 三、嫁の健氣(雄々しき)(母のほゝ笑) 四、繼信の悲壯な最後、今宵の一言の思ひ 五、感想にあらはれた主想 六、「軍めく」の句(東隱)	「軍めく」「花あやめ」の對、雄と優 「卯の花や」(小華山人) 「卯の花」「をとし毛ゆゝし」優と雄	

注	意	要	旨	間時	字文	語句	文	章	構
一、文脈占し 調子に乗せしめること至難に思はる 十分の用意あるべし 二、俳句の味は解説むづかしからんも、ちつこかみしめて味は、せたいものである		租税に關する一般的理解を得しめ國民としての自覺あらしめる	凡二時		遂行。充てる。徴集。賦課。檣ね。變更。隆昌 安寧 遂行 充てる 徴集 財貨 官督事業 過半 施設經營 現品 賦課 租庸調 消費者 課税標準 膨脹 變更 隆昌		形式 口語、常体、説明文 修辭 納める者の負擔に歸する 凡そ納税と	一、租税の意義 二、地方自治團體の租税 三、租税の變遷 四、名稱 五、直接税と間接税 六、課税標準	

週二十第

想	吟	味	注	意	要	旨	間時	備準
七、租税の膨脹と國家の隆昌 八、國民たる者の覺悟	一、國家事業の數々 二、租税徵集の目的(意義) 三、現品勞力賦課と貨幣納付の便不便 四、各種租税の内容 五、直接税と間接税 六、課税標準 七、國家の隆昌と經費の膨脹、租税額の増加 八、税率の改變 九、國民としての自覺		一、凡その理解を得しめばよい 餘り詳細な解剖をやると却つて繁雜になつて困るかも知れない 二、理解と自覺とは二にして一である		水を中心にした日本各地の風景美を稱へ、水がどれほど景色に大きな影響を及ぼすものであるかを味はせ	凡二時		各地山水景色寫眞

第十六課 水と風景

文	字	語句	文	章	構	想	鑑
佳麗。曲浦。海濱。冠。隱見。溪流。遊人。 鏗。四。映。豪。壯。震。は。す。飛。瀑。提。げ。白。帆。 疎。山。禽。沼。澤。懸。る。	江山 林泉 風光 佳麗 水色 長汀曲浦 冠たり 隱見 林谷 瀑流 偉觀 鬱々 一條 竹籬 豪壯 怒濤 提げて 長江 靜寂 蘆荻 山禽 沼澤		形式 文語、評論風の説明文 修辭 對句、連鎖等の諸手法多く、漢文口調で終始し 一種壯快な趣を持たせてある	一、冒頭序説、水の價値 二、海岸の眺 三、湖水の美 四、林泉山骨の美と水 五、小流の風情 六、水の諸相	一、冒頭序説の味 二、海岸風景の據る所——海、水 三、湖水の美、溪流瀑布の美 四、急流奇岩怪石の美 五、深谷森林の美と水 六、月の瀨、高雄の風情と水		

賞	注	要旨	間時	準備	字文	語句	文	章
七、春の野を流れる一條の水 八、庭園を曲折する細流の趣 九、水邊の盤の風情 一〇、怒濤、飛瀑の壯觀 一一、平和の海、春の海、長江の白帆 一二、沼澤の靜寂	一、地理に脱線してはならぬ 二、準備を十分整へて置くがよい	天然記念物保護の意義を明かにせしめ、天與の寶を愛護する精神を抱かしめる。	凡二時	各種天然記念物寫真繪畫類	風致。毀損。價值。損ふ。圖會。比較的。	天然物 風致 毀損 不慮 損ふ 絶滅 代表的標本 着目 固有 指定 純林 珍種 露出 恩惠 岩窟 天與 ゆるかぜにする	形式 口語常体、説明文 修辭 絶滅に類す 今にして…… 天與の寶	

第三十週

賞	注	要旨	間時	所出	字文	語句	文	章
一、天然記念物保存の必要 二、我國に天然記念物の豊富なること 三、我國に天然記念物の實例 動物 四、同 植物 五、同 地質礦物 六、保存の急務と愛護の精神	一、天然物滅亡の惜しき 二、實例の動植物の特質と價值 三、現代に於る保護法と古人の眞意 四、現代人の自覺	一、材料は當然理科的實業的のものであるが、その貴重なる所以を明かにすることが肝要である 二、各地の天然記念物及びそれに準すべき物件について補説することは必要なことである	凡二時	權勢に怖ぢず所信を貫く古武士の意氣を賞せしめる 吾妻鏡卷九文治五年九月七日の條	色目。實否。即從。僞。言上。家人。口狀。 嫡流。生捕。和殿。勳功。具に。鹿毛。憚る 有体。		形式 文語、傳記文 修辭 深く心に銘す 明を失ふ 眞に察すべきなり 親身も及ばぬ世話 安き心もあらず 秒を銀に化し 分を金に化し 擧げて	

第十八課 由利八郎の意氣

賞	注	要旨	間時	字文	語句	文	章	
六、立腹せずしてその意氣に感じ入る頼朝の偉さ	一、「意氣」と「無意味な反抗」とを取り違へてはならぬ 二、第一段尋問の必要を生じた話の筋道を明かに整へる必要がある。	不幸悲慘のどん底に居て、しかも美ばしい眞情を以て 慈善の誠を致した愛の極致に感激せしめる	凡二時	遺言。銘し。釘。惠。狂ひ。嗜好品。千々に。扶養。真婦。携へ。仕打。攝生。境涯。引較へ。親身。生涯。憐む。	色目 實否 即從 よも 有体 言上 家人 過分 嫡流 相續 奇怪至極 つぐむ 手づから 和漢 死 和殿 黒絲をぞし 鹿毛 申條 めじうご 意地 あまつさへ 不覺 なびかす 管領 憚る なじる	形式 文語、叙事文 修辭 くわつと怒り 過々の口狀たとへんに物なし 斯くて沈み果つべきにあらじ 武名隠なければ 餘り さへば不覺ならずや まるにても彼のめじうごの意地の強さよ	語法 よも……申さじ 掛ければこそ……なつたれ 給はんや よな いかでか……ざらん こそ……た れ いかでか……いばん 滅しける時 いひけるも の せられけり等過去完了けり甚だ多し	一、搶の功名争ひ 二、景時の取調と八郎の意氣 三、重忠の取調と八郎の言上 四、頼朝の召出と八郎の意氣 一、功名争ひの紛らほしさ 二、景時に向つて八郎の述べた言葉の理路と意義 三、重忠の禮節の正しさ(景時との對照) 四、禮節には屈する八郎(兩人の心の中) 五、頼朝に向つて憶する所なく所信を述べたる意氣

(女子用)第十八課 慈善家キヤサリン

賞	注	要旨	間時	字文	語句	文	章	
六、立腹せずしてその意氣に感じ入る頼朝の偉さ	一、「意氣」と「無意味な反抗」とを取り違へてはならぬ 二、第一段尋問の必要を生じた話の筋道を明かに整へる必要がある。	不幸悲慘のどん底に居て、しかも美ばしい眞情を以て 慈善の誠を致した愛の極致に感激せしめる	凡二時	遺言。銘し。釘。惠。狂ひ。嗜好品。千々に。扶養。真婦。携へ。仕打。攝生。境涯。引較へ。親身。生涯。憐む。	色目 實否 即從 よも 有体 言上 家人 過分 嫡流 相續 奇怪至極 つぐむ 手づから 和漢 死 和殿 黒絲をぞし 鹿毛 申條 めじうご 意地 あまつさへ 不覺 なびかす 管領 憚る なじる	形式 文語、叙事文 修辭 くわつと怒り 過々の口狀たとへんに物なし 斯くて沈み果つべきにあらじ 武名隠なければ 餘り さへば不覺ならずや まるにても彼のめじうごの意地の強さよ	語法 よも……申さじ 掛ければこそ……なつたれ 給はんや よな いかでか……ざらん こそ……た れ いかでか……いばん 滅しける時 いひけるも の せられけり等過去完了けり甚だ多し	一、搶の功名争ひ 二、景時の取調と八郎の意氣 三、重忠の取調と八郎の言上 四、頼朝の召出と八郎の意氣 一、功名争ひの紛らほしさ 二、景時に向つて八郎の述べた言葉の理路と意義 三、重忠の禮節の正しさ(景時との對照) 四、禮節には屈する八郎(兩人の心の中) 五、頼朝に向つて憶する所なく所信を述べたる意氣

標	想	鑑	賞	注	意
一、生立 二、家庭の不幸 三、一寡婦二兒の救済 四、コレラ流行と貧民救助 五、孤兒貧兒の救済と孤兒院の設立 六、評言	一、主人の遺言を心に銘する建氣さ、偉さ 二、家庭の不幸に堪へしかも活計を女手に引き受けて奮闘する覺悟 三、母子の發狂と家計の困難 四、しかも他人を救済する情 五、寡婦の仕打ながめゆ博い心 六、コレラ流行時の適切な處置 七、孤兒貧兒救済の大事業を成し遂げた愛の力 八、評言	貧窮のどん底からの博愛 勤儉と勞作の賜物	一、慈善博愛は、名の爲ではない 人間愛の眞なる現れてなくてはならぬ 貧の底に居てなほ人を愛し憐むといふことは常人のよくなし得ることではない キヤサリンの偉大は其處にある 二、訓話に囚はれて厭味を生じしめてはならぬ 兒童と共にキヤサリンの愛に泣き、人格の光を仰ぐのだといふ態度で行かねばならぬ		

月七 週四十第

賞	鑑	想	標	章	文	句語	字文	間時	旨	要
一、未明に残月を踏んで牛を追ひ行く爽快さ 二、朝露の草刈しつこりさ濡れる心地よさ 三、朝明けの快さその美しさ 四、歸路の楽しい心持、露をふくんだ百合、満足さ 五、少女の優しい心持、露をふくんだ百合、満足さ	形式 韻文、七五調、叙事詩 修辭 影踏みて 吹くや朝風そよ／＼と また／＼と星露の白玉ふみしだき 籠にそへたる にほへるまみの(百合とまみに懸る)	一、曉の牛飼ひ(男の子) 二、曉のまぐさ刈(少女) 三、朝仕事の歸路(男子) 四、同 (少女)	農村の爽快な夏の曉の詩情を味は、せ勞働の楽しさを賞せしめる 凡一時	語注 いかでもらひて食ふべきか 繼ぎてや それこそ幸ならぬ 頼みつればこそ……なれ	一、文脈、古体を帯びて稍難解である 修辭的に語法的によく噛みこなさねばならない 二、文の主旨は出典たる雲萍雜志を見れば一層明かである	また、く まぐさ 生氣 朝ぼらけ まみ	男の子。 麗か。 生氣。 少女。 少女子。 胸の邊。	凡一時	農村の爽快な夏の曉の詩情を味は、せ勞働の楽しさを賞せしめる	一、生立から不興を蒙るまで 二、主人の放蕩破産、困憊と中吉の忠誠 三、中吉の主人再興と主人の感謝

注	意	第二十課 中吉の誠實	要	旨	所出	間時	文	字	語	句	文
一、しみりした氣持で讀むこと 二、味はふことが肝腎 詩情は理窟では流れない		身の不興を顧みず只管に主家の再興に全力を捧げた忠誠眞實なその精神を稱へしめ、幼にして認められた童心の如何に立派であつたかを顧みさせる	柳澤洪園「雲萍雜志」卷二 凡二時	豪富。 間屋。 童。 態。 直にして。 謀む。 不興。 奢。 遣ふ。 潜む。 煙の代。 三年。 疫。 導引。 罵し。 たくはへ。 小商。 感涙。 元手。 素性。 起ち居。 詳に。	豪富 歸るさに 牀机 物こし しこなし 懸 すぎはひ ゆがめるを嫌ひ 訥辯 非を擧げ 不興 忍びけり 心のゆるみ 煙の代 導引 なりばひ 起ち居いさ、か そこばく たよりさす 徘徊 素性 事の上し 詳に 主従 再興 忠功	形式 文語、叙事文 修辭 休らひ 介抱しつるしこなしの懸なること尋常ならず 忠言耳にさからふのならひ 名におふ豪富					

賞	鑑	想	標	章	文	句語	字文	間時	旨	要
一、文脈、古体を帯びて稍難解である 修辭的に語法的によく噛みこなさねばならない 二、文の主旨は出典たる雲萍雜志を見れば一層明かである	形式 韻文、七五調、叙事詩 修辭 影踏みて 吹くや朝風そよ／＼と また／＼と星露の白玉ふみしだき 籠にそへたる にほへるまみの(百合とまみに懸る)	一、未明に残月を踏んで牛を追ひ行く爽快さ 二、朝露の草刈しつこりさ濡れる心地よさ 三、朝明けの快さその美しさ 四、歸路の楽しい心持、露をふくんだ百合、満足さ 五、少女の優しい心持、露をふくんだ百合、満足さ	農村の爽快な夏の曉の詩情を味は、せ勞働の楽しさを賞せしめる 凡一時	語注 いかでもらひて食ふべきか 繼ぎてや それこそ幸ならぬ 頼みつればこそ……なれ	一、文脈、古体を帯びて稍難解である 修辭的に語法的によく噛みこなさねばならない 二、文の主旨は出典たる雲萍雜志を見れば一層明かである	また、く まぐさ 生氣 朝ぼらけ まみ	男の子。 麗か。 生氣。 少女。 少女子。 胸の邊。	凡一時	農村の爽快な夏の曉の詩情を味は、せ勞働の楽しさを賞せしめる	一、生立から不興を蒙るまで 二、主人の放蕩破産、困憊と中吉の忠誠 三、中吉の主人再興と主人の感謝

(女子用)第二十課 鏡

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字	文	間時	旨	要
六、明治天皇御製の御趣意と御教訓	三、鏡の靈威	一、親房の言を引き、鏡の明白なることを述ぶ	一、親房の言を引き、鏡の明白なることを述ぶ	一、鏡の明白なることを述ぶ	形式 文語、説明文 修 やがては 知らるゝぞかし 申すこと申すも長し 鏡をかがみにて	私心の 萬象 是非善惡 類へ言ふ 閻魔の廳 淨玻璃の鏡 佛者 寓言	凡二時	萬象の眉 逆立つ。省る。寓言の 慎む。畏し。	凡二時	凡二時	婦女の魂たる鏡の靈威を味は、せたしなみあるべきを悟らしめる	
五、古來より鏡を尊ぶ風習の美しさ	二、感情の表出、怒の醜さ	二、婦女の鏡、日常のたしなみ	二、婦女の鏡、日常のたしなみ	二、婦女の鏡、日常のたしなみ								
四、閻魔の廳の淨玻璃の寓言の味	一、親房の言(神皇正統記)の含蓄	三、古來よりの美風、修養の功を積むべきこと	三、古來よりの美風、修養の功を積むべきこと	三、古來よりの美風、修養の功を積むべきこと								
三、鏡の靈威	二、感情の表出、怒の醜さ	四、閻魔の廳の淨玻璃の寓言の味	四、閻魔の廳の淨玻璃の寓言の味	四、閻魔の廳の淨玻璃の寓言の味								
二、感情の表出、怒の醜さ	一、親房の言(神皇正統記)の含蓄	五、古來より鏡を尊ぶ風習の美しさ	五、古來より鏡を尊ぶ風習の美しさ	五、古來より鏡を尊ぶ風習の美しさ								
一、親房の言(神皇正統記)の含蓄	二、感情の表出、怒の醜さ	六、明治天皇御製の御趣意と御教訓	六、明治天皇御製の御趣意と御教訓	六、明治天皇御製の御趣意と御教訓								

週五十第

構	章	文	句	語	字	文	間時	所出	旨	要	意	注
二、夕立を取逃す惜しさ	一、千天に夕立を待つ人の心	形式 口語常体、叙事文 修 驚歎の目を見はつて、其の青空すら餘さじものなき ひと押しに押寄せ 大地のあへぎ 音を聞かぬが不思議 空のどの一寸四方でも動いてゐないところはない 仰ぎ見る我等は流れる雲に引きずられて……	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること			
一、千天に夕立を待つ人の心	二、夕立を取逃す惜しさ	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること			
二、夕立を取逃す惜しさ	一、千天に夕立を待つ人の心	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること			
一、千天に夕立を待つ人の心	二、夕立を取逃す惜しさ	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること			

鑑	想
七、雲の活動描寫	一、千天に雨を待つ心持
六、乾物を入れる忙しさ	二、おかみさんとの問答の面白さ
五、「夕立が来るぞ」一言の感じ	三、夕立を取逃した物惜しい氣持
四、暗雲を背景にして立つた樹々の緑	四、暗雲を背景にして立つた樹々の緑
三、夕立を取逃した物惜しい氣持	五、「夕立が来るぞ」一言の感じ
二、おかみさんとの問答の面白さ	六、乾物を入れる忙しさ
一、千天に雨を待つ心持	七、雲の活動描寫
	八、大軍の散開にたさへた味
	九、雨雲に閉込められた大地
	十、低迷重疊する暗雲の運動
	十一、雷鳴のまじる氣分
	十二、見上げる足もどが動きかけるやうな氣分
	十三、雲の切れから投下される日光

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字	文	間時	旨	要
八、顔を上色にして震へ出す氣持	九、アカの不安氣な有様	一、すん／＼進行すること 活喻を殺さぬやうに	二、夕立を取逃す惜しさ	一、千天に夕立を待つ人の心	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること
九、アカの不安氣な有様	二、夕立を取逃す惜しさ	二、すん／＼進行すること 活喻を殺さぬやうに	二、夕立を取逃す惜しさ	二、夕立を取逃す惜しさ	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること
二、夕立を取逃す惜しさ	一、千天に夕立を待つ人の心	二、すん／＼進行すること 活喻を殺さぬやうに	二、夕立を取逃す惜しさ	二、夕立を取逃す惜しさ	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること
一、千天に夕立を待つ人の心	二、夕立を取逃す惜しさ	二、すん／＼進行すること 活喻を殺さぬやうに	二、夕立を取逃す惜しさ	二、夕立を取逃す惜しさ	形式 口語常体、叙事文	驚歎 あへぎ 魅せらる おも屋 おしめり	凡二時	壯麗な夕立の情趣を味は、せる	徳富健次郎「みみずのたはごと」	第二十一課 夕立雲	一、形だけをたへてはならない 靈威を感得せしめねばならない	二、引用の和歌、詞の眞意を見つめしむること

週六十第									
第二十二課 會社									
要旨	間時	文字	語句	文章	構	想	吟		
一般會社の内容及び組織を知らせ、社會的文化的經營事業に對する理解を得しむ	凡二時	負債。皆濟。監査。就任。	諸般 無限責任 負債 辦濟 提供 皆濟 連帶 有 限責任 業務執行 權限 員數 就任 處理 手腕	形式 口語常体、説明文 修辭 凡て簡明な記述手法で終始する	一、會社の意義 二、會社の種類 三、合名會社 四、合資會社 五、合名會社と合資會社の組織 六、株式會社 株式のこと 七、同 組織のこと 八、株式合資會社	一、會社設立の目的と、その意義 二、有限、無限責任の區別			
三、株式の概念 四、株式會社の組織と業務の運轉 五、重役選舉の心得 六、株式合資會社の特徴	注	一、無味乾燥に流れ易い材料である種々の實例等によつて潤ひを持たせるやうに用意せねばならぬ (女子用)第二十二課 夕立雲 男子用第二十一課と同一教材。同課參照							
味									

第二學年 第二學期 約十六週凡六十四時間(一週四時)

月 九									
週 一 第									
要旨	所出	間時	準備	字	語	句			
史的背景を持つ叙景を主とし通信文の風格を味はせ、相模灘の月色を叙した雄健な筆致を賞せしめる	徳富猪一郎「蘇峰文選」	凡二時	返子風景寫眞	衣。寓。口碑。恰當。富岳。名島。別莊。漫談。	物の悲しさ 晚餐 寓 相携へ 恩澤 恰當 蒼茫 突元 雜沓 錦繡 亂松 蛇行 祠堂 門をたく 濤聲 漫談 怪雲 黒紗 うたた 寂寥 三五の村舎 寓居 みぎは 蘆洲 六代御前 鬼火 雨点 兩三 寂寥				
形式 候体、書簡文 修辭 何時の間にやら 夢の如く淡く雪舟のふがきし 淡墨畫に似たり 不思議なるかな 海上に天あり天 上に海あり……音楽を奏し候 思ひきや……とは 夢漸く濃やかなる これ漁燈かこれ鬼火か 折しも 雨点兩三はらばらと	語法 思ひきや……とは	一、前文 二、海上の夜景 三、森戸川橋上の風光 四、森戸神社附近の絶景 五、突渡崎と井上椿陰訪問の奇遇 六、梧陰との漫談 七、歸路の静寂さ 八、同	一、秋風身にしむ、物の悲しさ 二、恰當の觀月臺——面白さ						
要旨	第二十三課 返子だより	月 週	目	月 週	要旨	目			

賞	注	意	要	旨
三、蒼茫たる海上の風望 四、月光描寫の巧さと感じ 五、突渡崎の奇岩怪石 六、思はの邂逅のうれしさ 七、友人訪れて漫談の時を過す愉快さ 八、祭の後の寂寥さ 九、村々の静かな眠 一〇、蘆洲を吹く風の寂しき涼しさ 一一、漁火が鬼火かの感じ 一二、雨点雨三の感じ	一、雄健な筆致、壯重な風格、これが全文の生命である よく味得せしめればならぬ 二、漢語、地名等に特別の解説を必要とするものがある 三、井上梧陰とは當時の文部大臣井上馨である 四、候体手紙文の形式に據つた叙景の特殊な趣きは本課に最もよく現れてゐると思ふ	(女子用)第二十三課 地震	地震の災害の最も激しく、又多い我國に於て、吾人がそれに對する日常の用意や、其の原因種類等の一般的な理會を得しめようとする	

間時	備準	文	字	語	句	修	辭	構	想					
凡三時	各地地震の被害約真類	地震 <small>ちんじん</small> 、既成 <small>きせいちやう</small> 、爆發 <small>ばくはつ</small> 、誘引 <small>いんいん</small> 、餘震 <small>よしん</small> 、埋立地 <small>うみたてち</small> 、泥砂 <small>でいしや</small> 、響ろ <small>ひびく</small> 、避難 <small>ひなん</small> 、煉瓦 <small>れんが</small> 、塀 <small>あつりやく</small> 、壓力 <small>あつりやく</small> 。	地殼 <small>ちかく</small> 、構成 <small>けいせい</small> 、物質 <small>ぶつしつ</small> 、蓄積 <small>ちやくせき</small> 、壓力 <small>あつりやく</small> 、波動 <small>はたう</small> 、斷層 <small>だんそう</small> 、適例 <small>ていれい</small> 、激動 <small>げきどう</small> 、粗造 <small>そざう</small> 、不安定 <small>ふあんてい</small> 、外力 <small>あうりき</small> 、潮汐 <small>うしほ</small> 、誘引 <small>いんいん</small> 、除去 <small>ていぞ</small> 、大破 <small>たいは</small> 、壞的 <small>わい</small> 、餘震 <small>よしん</small> 、安定 <small>あんてい</small> 、震原 <small>しんげん</small> 、斷崖 <small>だんが</small> 、地形 <small>ちけい</small> 、震動 <small>しんどう</small> 、地盤 <small>ちばん</small> 、土質 <small>つちしつ</small> 、地割れ <small>ちわり</small> 、壓死 <small>あつりやく</small> 、狼狽 <small>ろうたい</small> 、津浪 <small>つなみ</small> 、大慘害 <small>たいさんがい</small> 、精神的 <small>せいしんてき</small>	形式 口語常体、説明文 修辭語法 別段に無し	一、地震の意義 二、斷層地震 三、火山地震 四、地震の誘因 五、餘震 六、震動の強弱と地質地形 七、上下動 水平動 八、被害 九、避難の注意 一〇、火災の注意	形式 口語常体、記事文 修辭 全く新しい現代文である 歐文脈風な所や言ひ廻しなどに新味がある ほかの黄色を言雖く懐かしいものに思はせる 何とも言へずしんみりした氣持になつて 今咲きかけてゐるつぼみの幾つか々ある 明日の朝になればしぼんでしまふばかりの花だけに 咲く時の清新な趣は格別なものかも知れない 等	一、月見草に對する好尚 二、輕井澤で見た月見草 三、我家の庭で見た月見草 四、靜寂觀	一、色彩と柔かさ夕暮のすがすがしき、懐かしき 二、山霧の流れる野邊に咲き續く可憐な花、その間を言葉少なに歩く、しんみりした氣持と靜寂さ 三、開花の味、喜びと静けさの味 四、花の命に對する感じ 五、咲き開く花を見守る心、靜寂、悟道	賞 一、靜寂感の流動である それを見抜けばよい 二、遠慮なモンチメンタルになつてはいけない 靜寂な感傷ではない、壯嚴だ 三、原文を参照して見る方がよいかも知れない	注 一、靜寂の象徴として見たる月見草の美を賞せしむ 阿部次郎「北郊雜記」七、「靜寂」の一節	間時 凡一時	備準 實物、繪畫寫真類	字文 目 <small>ま</small> のあたり。	句語 清新 同宿 しなれる 悟を開く

週二第

吟	味	注	意	旨	所出	間時	備準	字文	句語
一、地震の恐ろしさ、その大脅威力と人生 二、各種地震の原因、大き、恐ろしさ 三、避難の注意、火災の注意	一、理學的な材料である それを根據とすることには必然的に重なる事である けれどそれが全部ではない 故に理科の吟味に際してはならぬ 二、關東地震、山陰地震等近時その被害は目に新しい所である これを見逃してはならない 具体化としても引例法としても極めて適切なものである	(男子用) 第二十四課 地震 女子用第二十三課と同一教材。同課参照	(女子用) 第二十四課 月見草	「靜寂」の象徴として見たる月見草の美を賞せしむ 阿部次郎「北郊雜記」七、「靜寂」の一節	間時 凡一時	備準 實物、繪畫寫真類	字文 目 <small>ま</small> のあたり。	句語 清新 同宿 しなれる 悟を開く	

文	章	構	想	鑑	賞	注	意	
形式 口語常体、記事文 修辭 全く新しい現代文である 歐文脈風な所や言ひ廻しなどに新味がある ほかの黄色を言雖く懐かしいものに思はせる 何とも言へずしんみりした氣持になつて 今咲きかけてゐるつぼみの幾つか々ある 明日の朝になればしぼんでしまふばかりの花だけに 咲く時の清新な趣は格別なものかも知れない 等	一、月見草に對する好尚 二、輕井澤で見た月見草 三、我家の庭で見た月見草 四、靜寂觀	一、色彩と柔かさ夕暮のすがすがしき、懐かしき 二、山霧の流れる野邊に咲き續く可憐な花、その間を言葉少なに歩く、しんみりした氣持と靜寂さ 三、開花の味、喜びと静けさの味 四、花の命に對する感じ 五、咲き開く花を見守る心、靜寂、悟道	賞 一、靜寂感の流動である それを見抜けばよい 二、遠慮なモンチメンタルになつてはいけない 靜寂な感傷ではない、壯嚴だ 三、原文を参照して見る方がよいかも知れない	注 一、靜寂の象徴として見たる月見草の美を賞せしむ 阿部次郎「北郊雜記」七、「靜寂」の一節	間時 凡一時	備準 實物、繪畫寫真類	字文 目 <small>ま</small> のあたり。	句語 清新 同宿 しなれる 悟を開く

第二十五課 日本の風土

要旨	日本の風土の一般を理解せしめ、祖國が有する天恵の誇を知り愛國の情を感じしめる
時間	凡二時
文字	禽鳥。凍雲。覆よ。餘裕。奔馬。
句語	豊饒 氣壓 陰雨 連日 凍雲 密雲 層々
文	形式 口語常体、説明文 修辭 試みに……廣がりを見よ 一望十里の青田に下立つ 秋は花よりも美しい紅葉が……ひざり我國に於てのみ見られるのである 凍雲日光をさへぎり 密雲層々空を覆ふに南方を顧みれば一天片雲なくまばゆき日の光が山岳原野を照らして数十里の風光が一望に入るのに驚くのである 綠樹鬱蒼として 茫茫たる大平野 急流奔馬の如く
構	一、全土の廣がり(位置) 二、動植物の天恵 三、天與の氣候 四、山川の美
想	一、全土の廣がりの長さ、天與の誇
鑑	

第三週

賞	二、珍鳥の誇、我國のみの植物美 三、季節氣候の順調な推移變化と米産及風光 四、山居美、火山美 五、急流溪谷の美
注	一、「地震」の課で我が國土に對し稍々悲觀的な感情に支配されたのが、本課に於て天恵の明るさを認め、國土愛の眞情を喚び起し、國土を稱へるのであるその態度がなくてはならない 二、地理的な吟味になつてしまつて、ねらひ所である國土愛の主旨を損つてはならない
要旨	大英國の國運を開き、世界無比の發展を遂げしめたビクトリア女帝の治世と、其の英明至誠の生涯を讀へしめる
時間	凡二時
文字	高齡。治世。塗り。拓き。類々。賢相。容れ。施政。得失。究む。紛雜。閱覽。齡。皇婿。侵す。貞淑。造詣。
句語	高齡 治世 前古未曾有 一敗地 塗り 類々 霸權 形勢 善用利導 賢相 明君 天與 利害得失 外交
文	形式 口語常体、説明文
構	一、全土の廣がり(位置) 二、動植物の天恵 三、天與の氣候 四、山川の美
想	一、全土の廣がりの長さ、天與の誇
鑑	

第二十六課 ビクトリヤ女帝

第二十七課 罐詰

賞	六、家庭に於る女帝、貞淑の徳 七、慈愛の心と下情に通達する誠意 八、その修養
注	一、歴史的補説を必要とす 二、逸事逸話も織り交せて潤ひを持たせるのもよい 三、女帝の治世は我が明治維新の大事業に當り給ふた明治天皇の御治世と契繋するものがある
要旨	罐詰製造の大略を知らせ、文化的事業に對する理解を得しめ現代文明の進歩を顧みさせる
時間	凡二時
備準	工程説明圖 工場寫真繪畫類
文	密閉。接觸。水系。流獲。陸揚。内蔵。假締機。緩く。脱氣筒。隙間。漂着。空處。容器。
句語	細菌 密閉 外界 接觸を斷つ 死滅 内容物 調味工程 流獲 陸揚 内蔵 優に 脱出 漂着 空處
文	形式 口語常体、説明文
章	修辭語法 別に特殊なものなし
文	事件 紛雜 外交文書 閱覽 皇婿 多幸多福 生涯 温容 威嚴 貞淑 造詣 熟達 下情
章	形式 文語、傳記文 修辭 遂に前古未曾有の隆昌を極め 一敗地に塗れ 今や……一躍して 生まれながらにして此の強國を統治するの幸運を得たり 發明類々として現れ 此の大任に當るやよく賢相の言を容れ施政宜しきを得てあつばれ明君の譽を四海に専らにせしは誠に其の英明なる天資と……至誠さに依らすんばあらず 誠に多幸……いふべし 温容玉の如き中に侵すべからざる威嚴を具へ
構	一、女帝治世の概説 二、大英帝國隆昌の次第 三、女帝が國政に勵精した治蹟 四、皇室の繁榮と國家の繁榮 五、女帝の人格と修養
想	一、天資の英明と勵精 二、賢相の言を容れ施政宜しきを得しめた手腕 三、裁可の慎重さ 四、皇室の繁榮と國家の繁榮が相伴へる慶び 五、温容の中の威嚴
鑑	

週四第				構		想		吟		味		注		意		
文	句語	間時	旨要	賞	注	意	賞	注	賞	注	賞	注	賞	注	賞	
形式 韻文、五七調叙景詩	たそがれ かややかに あや雲・落つる日	凡一時	落日の美と壯嚴さを讃へ、詩情を味はせしむる	六、義朝の義平賞讃の胸中	一、語勢語感の味が大切である	二、息をもつがせぬといふ感じを損はぬやう注意	三、戦記といふもの、大體の情趣を悟らせることが眼目であり同時に古典に對する一つの理解を得しめれば十分である	四、歴史的補説の要あれども、簡明なるべし	一、原理解	二、種類と用途	三、銚籠製造工程と機械文明の極致	四、貯蔵期間に關する挿話の面白さ	五、良否観別法とその理由	六、食用上の注意	一、機械文明に對する驚異である これを知らふべきことだ	二、準備の寫眞繪畫をよく利用すべきこと

第二十八課 落日

週五第				構		想		吟		味		注		意		
文	句語	間時	旨要	賞	注	意	賞	注	賞	注	賞	注	賞	注	賞	
形式 韻文、五七調叙景詩	たそがれ かややかに あや雲・落つる日	凡一時	落日の美と壯嚴さを讃へ、詩情を味はせしむる	六、義朝の義平賞讃の胸中	一、語勢語感の味が大切である	二、息をもつがせぬといふ感じを損はぬやう注意	三、戦記といふもの、大體の情趣を悟らせることが眼目であり同時に古典に對する一つの理解を得しめれば十分である	四、歴史的補説の要あれども、簡明なるべし	一、原理解	二、種類と用途	三、銚籠製造工程と機械文明の極致	四、貯蔵期間に關する挿話の面白さ	五、良否観別法とその理由	六、食用上の注意	一、機械文明に對する驚異である これを知らふべきことだ	二、準備の寫眞繪畫をよく利用すべきこと

第二十九課 待賢門の戦

字	文	間時	所出	旨要	賞	注	意		
上り。御返。	うつて 臆病。兵衛。武者所。利陣。見参。縦横。横。端武者。弓。杖。下知。踏張り。突立	凡三時	平治物語(待賢門の軍附信賴落つる事)	戦記の情趣を味はせ、軍記物語に現はれた昔の面影を懐ひしめせしむる	六、義朝の義平賞讃の胸中	一、語勢語感の味が大切である	二、息をもつがせぬといふ感じを損はぬやう注意	三、戦記といふもの、大體の情趣を悟らせることが眼目であり同時に古典に對する一つの理解を得しめれば十分である	四、歴史的補説の要あれども、簡明なるべし

週五第				構		想		吟		味		注		意		
文	句語	間時	旨要	賞	注	意	賞	注	賞	注	賞	注	賞	注	賞	
形式 文語 戦記(叙事文)	馬ごも ひが目 後裔 くつばみ 誰人ぞ 見参 端武者 左近の櫻 右近の橘 もみたりける 弓杖つく 平將軍 再来 引具す 下知 かいばさみ 鏡 御邊 浮足立つたる 足を立てかね	凡一時	落日の美と壯嚴さを讃へ、詩情を味はせしむる	六、義朝の義平賞讃の胸中	一、語勢語感の味が大切である	二、息をもつがせぬといふ感じを損はぬやう注意	三、戦記といふもの、大體の情趣を悟らせることが眼目であり同時に古典に對する一つの理解を得しめれば十分である	四、歴史的補説の要あれども、簡明なるべし	一、原理解	二、種類と用途	三、銚籠製造工程と機械文明の極致	四、貯蔵期間に關する挿話の面白さ	五、良否観別法とその理由	六、食用上の注意	一、機械文明に對する驚異である これを知らふべきことだ	二、準備の寫眞繪畫をよく利用すべきこと

第三十課 興國の民

文	句語	間時	旨要	賞	注	意		
形式 文語、散叙式説明文	興國發展の素懐を遂ぐべき吾等國民が、平業より具備すべき諸特性を吟味せしめ、興國發展の大意氣を培ふ	凡二時	興國發展の素懐を遂ぐべき吾等國民が、平業より具備すべき諸特性を吟味せしめ、興國發展の大意氣を培ふ	六、義朝の義平賞讃の胸中	一、語勢語感の味が大切である	二、息をもつがせぬといふ感じを損はぬやう注意	三、戦記といふもの、大體の情趣を悟らせることが眼目であり同時に古典に對する一つの理解を得しめれば十分である	四、歴史的補説の要あれども、簡明なるべし

月十

文	句語	間時	旨要	賞	注	意		
形式 文語、散叙式説明文	興國發展の素懐を遂ぐべき吾等國民が、平業より具備すべき諸特性を吟味せしめ、興國發展の大意氣を培ふ	凡二時	興國發展の素懐を遂ぐべき吾等國民が、平業より具備すべき諸特性を吟味せしめ、興國發展の大意氣を培ふ	六、義朝の義平賞讃の胸中	一、語勢語感の味が大切である	二、息をもつがせぬといふ感じを損はぬやう注意	三、戦記といふもの、大體の情趣を悟らせることが眼目であり同時に古典に對する一つの理解を得しめれば十分である	四、歴史的補説の要あれども、簡明なるべし

章	短を捨つるに吝ならず他の長を採るに敏なり
構	一、目的と實行元氣と進取 二、思慮と決斷 三、活動性 四、自信の力 五、不倒の精神 六、艱苦自彊 七、忠實去華 八、義務の責任感 九、謹嚴と公德心 一〇、雅量 一一、長短融通 一二、團結一致の力 一三、至誠奉公
想	一、各項の精神を一々吟味し、補説し、考究して行く 二、大國民の品性とその意氣を自覺せしめる 三、輕兆浮薄を特にいますむべきである 四、世相と人心の趨勢を察して反省せしめる 五、理想目的と實行努力が相反してはならぬ 六、満ち溢れる力を汲ましめよ 他人の事ではない 我が事である
吟味と注意	

週六第									
第一課 讀書									
要旨	讀書の必要を痛感せしめ、自己修養の第一要諦として の自覺を得しむ								
間時	凡二時								
字文	接觸。嗜好。大抵。割く。詠す。								
語句	啓發 際限 至善至徳 大成 九牛の一毛 畢世の力 あたら 接觸 品性 趣味 藏書								
文	形式 議論文 修辭 論文の特色としての疑説法——何のために學 校に學ぶか ……ためである ……は十分であるか 否々……								
章	語法 あたら 一應もつともなここと 必ずしも され ばこそ								
構	一、修養が生涯を通じて必要なる所以 二、學校設立の趣旨と卒業後の修養 三、修養の方法は第一は讀書 四、時代の進歩と國民讀書の必要 五、讀書の餘暇を作らねばならぬ 六、讀書と國家の消長、圖書館設立趣意								
想									

鑑	一、理路の整然さ 二、歸納手法のうまさ 三、自己教育の覺悟 四、讀書と趣味及び品性 五、書寫を止むなくせしめられた古人の苦心→現 代讀書の簡易さ(對比、今昔の感) 六、宣長の歌の妙味 七、國民の讀書と國家の消長
賞	一、卒業前の兒童に取つて好箇の教材である 力をこ めて教授すべきものと思ふ 二、修養とは單に道徳的修養のみを意味するのではな い趣味上にも職業上にも必要なる廣義の意味を有し てゐる 狹義に解して説教に終るやうな事があつて はならぬ 三、良書の選擇、標準等についても相當な考慮を拂ふ 方がよからう 四、亂讀さかぶれ讀みに對する警告も必要のやうに思 はれぬ
注	
意	
第二課 干潟の舟	
要旨	心の煎らるゝ愚かしゝを悟らせ、日常茶飯事にも先き 先きの用意あるべきことに感ぜしめる

週七第									
幸田成行「潮待ち草」									
所出	凡二時								
間時	凡二時								
字文	さから 逆ふ。間切る。煎らる。巧者。繋ぐ。檢め。 愚かし。								
語句	舟をやる。間切る。押切る。意地。そこりて。干潟 あだに。煎らる。巧者。素人。心のぞかに。足もつれ 檢め繕ふ。舟の中につきて。いさ。更に。今に。								
文	形式 記事文 修辭 風に逆らひて……流に逆らひて 春の日の潮 のそこりて遠淺の海の…… 意地にも工夫にも こゝを以て……として 潮を待つは愚しけれど…… よりは賢きわざなり								
章	語法 解かんとらば こゝを以て あせるやうの事 も なりたらんには 何の……あるべき。爲さでか なはぬ 爲し果つる あるべくもなし								
構	一、干潟の舟の動かし難いもどかしさ 二、老舟人の話								
想	一、水の上での舟の操り方の都合よき、うまさ 二、意地にも工夫にも動かぬ干潟の舟のもどかしさ 三、繋ぐ時に解く事を思ひ解く時に繋ぐ事を想ふ――								

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字	間時	所出	
六、雌が送る「隱遁的生活」の面白さ	四、み、す「うたひめ」の詩趣さ、おけらの飛出す幻滅の悲哀	五、袋の構造上の妙味	三、幼蟲の形態	四、雄の成蟲、みのが	一、「葉蟲なく」といふ詩趣の面白さ	二、袋の構造と擬態	三、幼蟲の形態	四、雄の成蟲、みのが	五、雌の生涯	形式 説明文 修辭 秋の寂しさに一種の詩味を添へる ……マイク 語法 聞かせることもあらうけれど	谷津直秀「趣味の動物」 凡二時

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字	間時	所出	
三、霧に包まれたすき原の詩情	二、野の中道に淋しく消える人さ馬の詩情	一、秋風に打ちなびくすき原の詩情	二、秋の高嶺を吹き下す風の情緒	三、一齊に打ちなびく詩情	四、秋のすき原を通る、野中の一本道の風情	五、種々の波に舟の如く見える人と馬のおもしろさ	六、秋の野の霧の情調	七、「ほのじろくたゞほの白く」の句の味	二、詩情そのものが本旨	二、しみくさ深く味は、せるやう努めること	高嶺 波なせる 中みち かくろひつ 霧立つ かげる 海なせる

週八第

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字	間時	所出	
六、雌が送る「隱遁的生活」の面白さ	四、み、す「うたひめ」の詩趣さ、おけらの飛出す幻滅の悲哀	五、袋の構造上の妙味	三、幼蟲の形態	四、雄の成蟲、みのが	一、「葉蟲なく」といふ詩趣の面白さ	二、袋の構造と擬態	三、幼蟲の形態	四、雄の成蟲、みのが	五、雌の生涯	形式 説明文 修辭 秋の寂しさに一種の詩味を添へる ……マイク 語法 聞かせることもあらうけれど	谷津直秀「趣味の動物」 凡二時

賞	鑑	想	構	章	文	句	語	字	間時	所出		
修辭、毎日のやうに…… 吹きさらしの野路に立つて	はだのひび ますばらしく	よくよく 人氣 羽莖 ものうさうな 葦島 めまぐ	山家。午過ぎ。輕返。微か。漏れる。精出して。拍	子。懐いて。時雨。連に。お辭儀。鼠色。難。損	ねて。身振。小家。繰つて。子菜。掛菜。紡ぎに。	小刻み。獨者。解いて。傾。一文。	更ける。雁。人。來。よ。甲。高。羽。健。か。	山家。午過ぎ。輕返。微か。漏れる。精出して。拍	子。懐いて。時雨。連に。お辭儀。鼠色。難。損	ねて。身振。小家。繰つて。子菜。掛菜。紡ぎに。	小刻み。獨者。解いて。傾。一文。	興趣等を味は、せる

章	構	想	鑑
<p>長い行列が雲の中ににじみ込んでしまふ よく／＼ 人氣遠い 日影が黄色がかつて来ようといふ頃 言ひやうのない強い健かな氣持が胸に流れる ものうさうなこぼろぎの聲 枯葉一つ返返を打つ音までがひよいこ ついこ せつせと ひよくり／＼ まるで悲哀を懷いてゐる人のやうに もの十日さたゝの間に まるで時雨でも降るやうに 銀の鈴を振るやうな…… そこはまたなれたもので ませた身振こくり／＼ すゝけた障子に……うつつて 濁者のほ／＼じろが……ぐしよぬれ……しよんぼりぞ</p> <p>語法 見かける 叫んだものだ 来てゐたものだ 来ようといふ頃 もの十日さ どうかするさ……損ねて どうかして 絲目が切れて 聴取れようはずはない</p>	<p>一、雁行の思出 二、百舌鳥のからごき 三、ひたきの面白さ 四、四十雀の群のにぎやかさ 五、みそささいとぢいさんばあさんの田舎情趣 六、ほ／＼じろの泣聲のおかしさ 七、うづら、しぎ</p>	<p>一、雁行を仰いで喜び歌ふ子供心 二、百舌鳥の英雄振り」と秋が来た」といふ意識</p>	

第九週

賞	注 意	要 旨	間 時	文
<p>三、静寂な秋の底にそれとなく動いてゐるひたきのわびしさな姿態 四、四十雀の群のにぎやかさと可憐な雛の面白さ 五、みそささいの忍びやかな姿態 六、田舎の小家のぢいさんばあさんの生活の情調さあたりの景趣 七、秋雨の中にぬれそぼつた頬白の姿態と鳴聲の面白さ 八、うづらの愛らしさ、しぎの不審さうな姿態</p>	<p>一、理料的には餘り深入りせぬこと 二、小鳥の姿態動作の描寫、景物點綴の妙味など、十分に味は、せねばならぬ 情調第一だ</p>	<p>第六課 伊藤博文 伊藤博文が生涯を通じて國家の爲に致した功業の跡を偲ばせその盡忠奉公の大人格を讃仰させる</p>	<p>凡三時</p>	<p>大動位。公爵。伊藤博文。降さん。筋骨。萩(地名) 嘗む。來。原良藏。力め。勤め。参畫。審。謀り。謀して。密かに。倉皇。懇請。具に。折衝。精し。識見。派遣。兼。果進。</p>

字	語	句	文
<p>綱要。興り。興望。兇手。斃れ。改革。劇務。憲法。典範。千載不磨。起草。勳業。垂る。畫策。談判。衝。締結。發揚。獻替。統監。併合。遂行。施政。政黨。兇漢。凶報。甲電。稱へ。葬る。畏くも。顯れ。宣ふ。顯要。龜鑑。</p>	<p>瓜々の聲 心志 筋骨 具に 資性 穎敏 奇才 參畫 審にす 萬難 倉皇 懇請 猶豫 落論 慘澹 擴夷 講和 大業 應酬折衝 識見 披擯 累進 爾來 樞要 興り知る 藁す 兇手 斃る 興望 廟堂 大命を帯ぶ 劇無 起草 完全無缺 基本 先進 參酌 千載不磨 法典 勳業 竹帛 畫策 全權大使 衝に當る 締結 發揚 獻替 鑒意 啓發 遂行 周到 施政 樞機 偉勳 制度典例 政黨 老軀 兇漢 狙撃 凶報 光輝赫々 軫悼 國葬 葬儀 股肱 倚り 柱石 忠貞 公正 勳績 宣ふ 御信任 顯要 身後の計 盡忠奉公 龜鑑</p>	<p>形式 傳記文 修辭 瓜々の聲を擧げた一男兒は——他日——其の人なり 心志を苦しめ筋骨を勞せしむ 具に艱苦を嘗む 東奔西走國事に勤む 慘澹たる苦心も全く水泡に歸す 年僅かに三十三累進の速なる多くその比</p>	

賞	章	構	想	鑑
<p>九、詠仰</p>	<p>を見ず 興望一身に集り廟堂の上一日も博文無かるべからざるに至れり 千載不磨の法典 光輝赫々たる一生は其の終を告げぬ 甲電雨の如く</p>	<p>一、生立ち——孝允にみとめらる 二、長州藩の爲に盡した功績 三、維新以後の事業と功績及び榮進 四、帝國憲法皇室典範起草の勳業 五、二大戦役及韓國指導の功業 六、政黨の發達に致した功勞 七、暗殺 八、讃仰の言葉(結び)</p>	<p>一、幼時の苦勞と勉學 二、萬難を排して難局に處する奉公の精神と苦心の水泡に歸して後も尙講和に盡くす真心 三、功業手腕に伴ふ榮達累進の速さ 四、帝國憲法皇室典範起草の大任と完成の大勳業 五、二大戦役中の苦心と功勞 六、政黨の發達に力を致した先見 七、暗殺と哀悼 八、詠詞の有難さ功業</p>	

月一十

週九第

注	意	要旨	時間	標準	文	字	語	句	文	
一、用語が甚だむづかし 特に理解に力めること 二、抽象的な記述が多いが 出來得る限り具体的に取扱ふべきこと しかし餘り詳細に亘らぬやう注意 三、逸事逸話等を引用して色彩をつけるのも面白からう		古社寺、國寶の貴重なる所以を知らせ、又愛護すべきことを悟らせる	凡二時	各地に於る適當な古社寺國寶類の繪畫寫眞	形式 論文風の説明文 修辭 一木一石も……堪へざらしむ 現ん……をや やそのかを想ひ出で……なるべし 去つて……詣づれば……自ら眼前に開くる心地す 人をして我國文明の……を想はしむ 實に至大なるもありさ	莊殿。普及。樓門。丹朱。老杉。文書。墳墓。散逸。據る。證。徴。由緒。須要。想ひ	遺蹟 懷古の情 名匠 建造物 堂塔伽藍 丹朱 優雅 遺存 什器 徴す 畢竟 然らしむる 星霜變故 壤廢散逸 詩徴 由緒 文物 須要			

第七課 古社寺と國寶

章	構	想	鑑	賞	注	意	要
ふべし 絶滅に至るの恐なしとせず 語法 現んや……をや ものありさいふべし 至るの恐なしとせず	一、古社寺及び國寶類の貴重 二、保存の必要 三、古社寺保存法 四、保護保存の眞精神	一、法隆寺の建築美と懷古の情 二、春日神社の建築美と懷古の情 三、夫等のものを豊富に有する我國の誇とそれから受ける教訓の偉大さ——愛護保存の情 四、古社寺保存法を制定された眞意 五、保存愛護の眞精神	一、準備の條に擧げた寫眞繪畫は本文記載のものに勿論成るだけ各地々に存する特殊なものを集めるがよい 二、無味乾燥な文のやうにも思はれるが見方によつて如何様にも生かし得るものと思はれる	一、準備の條に擧げた寫眞繪畫は本文記載のものに勿論成るだけ各地々に存する特殊なものを集めるがよい 二、無味乾燥な文のやうにも思はれるが見方によつて如何様にも生かし得るものと思はれる	一、準備の條に擧げた寫眞繪畫は本文記載のものに勿論成るだけ各地々に存する特殊なものを集めるがよい 二、無味乾燥な文のやうにも思はれるが見方によつて如何様にも生かし得るものと思はれる	一、準備の條に擧げた寫眞繪畫は本文記載のものに勿論成るだけ各地々に存する特殊なものを集めるがよい 二、無味乾燥な文のやうにも思はれるが見方によつて如何様にも生かし得るものと思はれる	一、準備の條に擧げた寫眞繪畫は本文記載のものに勿論成るだけ各地々に存する特殊なものを集めるがよい 二、無味乾燥な文のやうにも思はれるが見方によつて如何様にも生かし得るものと思はれる

第八課 萬里の長城

週一十第

旨	時間	標準	字	語	句	文	章	構	想	鑑
理は果して斯の如き大規模の防禦工事を必要とするや否やさいふ一種の批判的な、そして又低徊的な心持を味はせる	凡二時	支那地圖、長城寫眞繪畫	諸侯。患。日子。推して。坑。禍亂。笑止。禍。	蜿蜒 騎行 凹凸 胸壁 諸侯 分争 亂麻 侵入 使役 暴政 禍 蕭牆 虚しく 防胡 禍亂 ささす 笑止 金城鐵壁 政令 心服 いづくんぞ 連雲の 堯階三尺の高きに	形式 説明文 修辭 蜿蜒七百餘里に及ぶ 天下亂麻の如し いはゆる萬里の長城を成せり……推して知るべし 金城鐵壁の守ありとも いづくんぞ知らん 及ばす……高きに 知らず……起るを	語法 ——こそ笑止なれ いづくんぞ	一、規模の偉大とその壯觀……大國らしい色彩の面	一、長城の規模 二、沿革 三、築城に対する批評		

賞	注	意	要
白さ 二、秦始皇帝修築の大事に對する驚異 三、始皇帝の暴政と治國の眞精神（對比） 四、詩の有する情趣 1、虚しく、築く防胡萬里の城（蕭牆の禍亂） 2、及ばず、堯階三尺の高きに（萬里連雲の勢）	一、文の精神は最後の段に存す 二、支那的、大國的な國民性の一象徴である 單なる名物の一つとして見ず 背景を支那といふ國に置き 三、詩の眞意をしっかりと考へしめること		人生と離すべからざる微妙な關係を有する音楽の價値を痛感させ、音楽及び楽器に關する一般的な理解を得しむ

（女子用）第八課 音樂

字	文	時間	旨
典雅。普及。	神前。奮ひ起つ。傷者。痛手。懷。哀悼。身魂。和樂の調。高が。壞る。論。伴奏。管。弦。樂。三味線。豐樂器。合奏。樂手。和らか。滑らか。忽然。餘音。神飛び魂驚く。想。筆舌。勝る。	凡三時	人生と離すべからざる微妙な關係を有する音楽の價値を痛感させ、音楽及び楽器に關する一般的な理解を得しむ

語	文	構	想	鑑
詞前 彈す ねんれい歌 葬儀 哀悼の曲 悲痛 身 魂 和樂の詞 高雅 氣品 徳教 鄙俗 風を亂る 俗を壞る 伴奏 妙音 調和 興趣 合奏 樂手 演 奏 突如 忽然 一條 餘音 媚々 縷 滿座 神飛 び魂驚く 諧調 妙處 高尚典雅 普及 錯綜連續	形式 文語、説明文 修辭 或は高く或は低く長きあり短きあり和らかなる あり鋭きあり滑らかなるありしぶりたるあり 時に 突如として……忽然として 一條の餘韻媚々として 絶えざる縷の如き時滿座の樂器忽ち一齊に響き渡り て神飛び魂驚くの想あらしむ 其の變化の妙諧調の 美筆舌の能く盡くす所にあらず 語法 たりとかや ……ざるべけれど かばかり 少 しとせず 深しとす	一、音樂の人生に及ぼす影響 二、二分類 三、使用樂器 四、合奏 五、國民の趣味、品位の向上	一、軍樂の勇ましき 二、于守歌のなつかしき 三、哀しみの曲の悲痛さ	身 布子 薪水の業 婦道 名君 檢閲 服役 給與 新幕 不日 同僚

賞	注	意	要旨	備時	備準	文	字	語	
四、和樂の調ののどけさ 五、管弦樂の美 六、各樂器の音色と感じ	一、樂器の種類については繪畫で示すのもよいが出來 得る限り實物を見せてやりたい。そして音色なども 味は、せるがよい 二、蓄音機などを利用して適當なレコードを聴かしめ るのもよからう	第九課 東西雜話 東西古今の逸話逸事を味は、せ、人情の機微にも觸れ させて古人の面影を想ひ起させると共に味はひある教 訓に感じ入らせる	凡二時	ニュートン フレアリック大王肖像	延陸の季子。徐の君。籠つて。銅。相。御者。 得々。眞む。陥る。慣れる。嫁せしめ。布子。薪水。 水。檢閲。俸給。新幕。同僚。朕。	君命 物忘 相 御者 揚々 思慮 得々 あさまし い 高官 歎願 城主 夫人 けしからぬ 清貧 御	延陸の季子。徐の君。籠つて。銅。相。御者。 得々。眞む。陥る。慣れる。嫁せしめ。布子。薪水。 水。檢閲。俸給。新幕。同僚。朕。	君命 物忘 相 御者 揚々 思慮 得々 あさまし い 高官 歎願 城主 夫人 けしからぬ 清貧 御	延陸の季子。徐の君。籠つて。銅。相。御者。 得々。眞む。陥る。慣れる。嫁せしめ。布子。薪水。 水。檢閲。俸給。新幕。同僚。朕。

句	文	章	構	想	鑑
形式 敘事文 修辭 つくづく見て……如何にもほしさうな様子こ れはしたり くだくさ 得々としてある 是はけ しからぬ 王者に二言は無い 許せく 薪水の業 を自らして婦道を行ふ	一、季子の義理堅い話 二、ニュートンの逸事 三、愚癡の御者の話 四、コンラード王の寛容 五、鮑宣の妻女少君の貞淑 六、フレアリック大王と兵士の笑話	一、徐の君の心を見取つた季子の方、及び君命の途中 故に強ひて贈らない忠誠 二、徐の君の死去を知つた時の悲しさ、墓に劍をかけ て贈り初志を變へない義理堅さ 三、物事に熱中するニュートンの日常生活と逸事のユ ーモア 四、御者の妻の言が含んである味 それを聞入れた夫 の偉さ 五、「昔に運へるもの」が「人間」であつたのを發見した	一、季子の義理堅い話 二、ニュートンの逸事 三、愚癡の御者の話 四、コンラード王の寛容 五、鮑宣の妻女少君の貞淑 六、フレアリック大王と兵士の笑話	一、徐の君の心を見取つた季子の方、及び君命の途中 故に強ひて贈らない忠誠 二、徐の君の死去を知つた時の悲しさ、墓に劍をかけ て贈り初志を變へない義理堅さ 三、物事に熱中するニュートンの日常生活と逸事のユ ーモア 四、御者の妻の言が含んである味 それを聞入れた夫 の偉さ 五、「昔に運へるもの」が「人間」であつたのを發見した	一、季子の義理堅い話 二、ニュートンの逸事 三、愚癡の御者の話 四、コンラード王の寛容 五、鮑宣の妻女少君の貞淑 六、フレアリック大王と兵士の笑話

第二十課

賞	注	意	要旨	備時	備準	文	字	語
時の寄手の心持 それを王が笑つて見逃してやる如 何にも王者らしい心の寛さ 六、少君の父が鮑宣を見抜いた眼力 清貧を安する鮑 宣の偉さ 少君の健氣さ——輕薄な現代婦人の虛榮 心との對照的な味 七、フレアリック大王と兵士の珍問答——ユーモア	一、話一つ一つに各々特別の味はひがある 教訓の押 賣りをせずに先づしみと感ぜしめるやうに 二、ユーモアに理窟は要らぬ 高尚な笑ひの國に入ら しむれば十分だ	第十課 資本 本 資本に關する理解を得しめる	凡二時	ニュートン フレアリック大王肖像	延陸の季子。徐の君。籠つて。銅。相。御者。 得々。眞む。陥る。慣れる。嫁せしめ。布子。薪水。 水。檢閲。俸給。新幕。同僚。朕。	君命 物忘 相 御者 揚々 思慮 得々 あさまし い 高官 歎願 城主 夫人 けしからぬ 清貧 御	延陸の季子。徐の君。籠つて。銅。相。御者。 得々。眞む。陥る。慣れる。嫁せしめ。布子。薪水。 水。檢閲。俸給。新幕。同僚。朕。	君命 物忘 相 御者 揚々 思慮 得々 あさまし い 高官 歎願 城主 夫人 けしからぬ 清貧 御

構	章	文	句語	字	文	間時	旨	要	注	味	吟
二、乾物屋情趣	一、乾物屋情趣	形式 口語 説明文 修辭語法 別に特殊なものなし	納豆 湯葉 はぎ葉つ 精進料理 香味料 蔬菜	乾物屋。湯葉。祝事。浸す。砕く。高野豆腐。凍る。生麩。乾麩。薄片。精進。香味料。	かんじつや ゆばい いほのこぞ ひた くだ かひやとうふ こほなま ぼしこ かくへん しやうじん かつみれう	凡二時	乾物屋の便利さを味は、せ、各種食料品についての一般的實用的な理解を得しめる	(女子用)第十課 乾物屋	一、最後の二行目の「國立の造船所の如きは生産資本であるが、通例營利資本ではない」の箇所of 文意に注意 二、種々の實際例によつて考察推究せしめて行く方がよい	一、資本の意義と種別(固定、流動) 二、資本の蓄積と勤儉 三、生産資本と營利資本の區別	一、湯葉 四、高野豆腐、水菰蕪 五、粉類、麩 六、干大根 七、干瓢 八、椎麩 九、香味料、水産物

文	備準	間時	旨	要	注	味	吟	想
形式 候体、書簡文	地圖 風景寫眞等 同胞 邦字新聞。一驚。滴らす。累々。常春	凡二時	ハワイの風土の一般を知らせ、自然に恵まれた種々の産物や、景勝を賞せしめ、我國との關係をも考へさせ	ハワイの風土の一般を知らせ、自然に恵まれた種々の産物や、景勝を賞せしめ、我國との關係をも考へさせ	一、各地特有の品目をも引用するがよい 二、製法の容易なものはその方法を教へてやつてもよからう しかし家事の授業になり終らぬやうに	一、各種乾物の品種、品質、製法一般 二、乾物屋情趣、食料品個々の感じ、味	三、湯葉 四、高野豆腐、水菰蕪 五、粉類、麩 六、干大根 七、干瓢 八、椎麩 九、香味料、水産物	七、雜報 火山、魚類、傳説貿易上の地位 八、結尾

第十一課 ハワイ通信

構	章	文	句語	字	文	間時	旨	要	注	味	吟
一、前文、ハワイ諸島の成立ち 二、交通上の要点としてのホノル、の位置 三、住民、日本人の活動 四、氣候、植物、風景の美 五、動物の珍しさと美 六、天象の美	一、前文、ハワイ諸島の成立ち 二、交通上の要点としてのホノル、の位置 三、住民、日本人の活動 四、氣候、植物、風景の美 五、動物の珍しさと美 六、天象の美	形式 候体書簡文 修辭 洋上のオアシスとも 我國人に負ふ所 常緑樹 緑を滴らし 紅黄紫白色をとりざりなる美花咲亂れ 簞には累々たる果物みのり 全くハワイは常春の國 常夏の國常秋の國にて四季の最も好きところのみを集めし地 四季の現象を一本の木にも見らるゝ 七 彩鮮かなる虹二重にも三重にもかゝり 此の月を眺め彼の花に圍まれをよゝと吹く涼風の中に 煙波果なき太平洋上の一オアシス吾人世に隔絶せる一別天地否自然の恩恵豊かなる極樂世界 語法 候活用形 多からんと思はるゝ	一斑 オアシス 獨占 邦字新聞 熱帯圍内 驟雨 存外 天象 不可思議 接觸点 煙波 隔絶 恩恵	常夏。常秋。惠。天象。七彩。涼風。接觸点。煙波。隔絶。	とこなつとよきめくめでんやう しちさいりやうふう せつしよく てんじんば かきせつ	凡一時	留守宅を思ふ母親の心と友人夫婦に對する友情等を味は、せる	(女子用) 第十一課 歸宅の日取を申し送る	一、異郷土に對する好奇の眼を開かせ、驚異し、珍奇が、不思議からせることが第一 二、土人の不可思議な傳説は、出來得たら二三知らせて味は、せるのもよい	一、日本人活動の頼もしさ 二、冬休みに海水浴といふ奇抜さ 三、植物の美しさ 四、天象の美しさ 五、楽しい生活	七、雜報 火山、魚類、傳説貿易上の地位 八、結尾

文	句語	字	文	間時	旨	要	注	賞	鑑	想
形式 候体、書簡文	細々の 幼馴染 主治醫	細々。幼馴染。主治醫。	凡一時	留守宅を思ふ母親の心と友人夫婦に對する友情等を味は、せる	(女子用) 第十一課 歸宅の日取を申し送る	一、異郷土に對する好奇の眼を開かせ、驚異し、珍奇が、不思議からせることが第一 二、土人の不可思議な傳説は、出來得たら二三知らせて味は、せるのもよい	一、日本人活動の頼もしさ 二、冬休みに海水浴といふ奇抜さ 三、植物の美しさ 四、天象の美しさ 五、楽しい生活	七、雜報 火山、魚類、傳説貿易上の地位 八、結尾		

週三十第

章	構	想	鑑	賞	注	意
修辭 細々の御手紙 末ながら 取急がし、 語法 候活用形	一、前文 留守宅への心遣り 二、本文 歸宅の日取を知らず 三、後文 父への挨拶	一、留守宅への心遣ひ 1、次郎を思ふ慈愛 2、娘に對する感謝の心持 二、歸宅の日を知らせると同時に 1、鈴木夫妻に對する友情 2、祖父の病狀 三、病中孫娘の手紙を見て喜ぶ祖父の心持	一、卷三「歸宅の日取を問合す」文の返事である 連絡を保たねばならぬ 二、簡単な文章ではあるが、お互ひの温かい感情の仄見えるよい材料である	一、卷三「歸宅の日取を問合す」文の返事である 連絡を保たねばならぬ 二、簡単な文章ではあるが、お互ひの温かい感情の仄見えるよい材料である	一、卷三「歸宅の日取を問合す」文の返事である 連絡を保たねばならぬ 二、簡単な文章ではあるが、お互ひの温かい感情の仄見えるよい材料である	一、卷三「歸宅の日取を問合す」文の返事である 連絡を保たねばならぬ 二、簡単な文章ではあるが、お互ひの温かい感情の仄見えるよい材料である

第十二課 柳生宗矩

要旨 眞理に透徹する宗矩の頭腦と先見の明に敬服させ、所信に向つては一步も引かぬ其の意氣に感じ入らせる
新井白石「藩論譜」

間時	文	語	句	文	意	
凡二時	寛永の有馬 <small>くわんえいのかりま</small> 猿樂 <small>さるがく</small> 酒宴 <small>しゅえん</small> 郡黨 <small>ぐんたう</small> 知しめし <small>ちしめし</small> 高來郡 <small>たかくこほり</small> 叛き <small>そむ</small> 早馬 <small>はやま</small> 告申 <small>つげまう</small> 侍候 <small>しやう</small> 御發向 <small>ごはつかう</small> 鞍 <small>くら</small> 酒盛 <small>さか</small> 逆徒 <small>さかすけ</small> 叛逆 <small>はんぎやく</small> 宗門 <small>しゆもん</small> 不興 <small>ふきやう</small> 下愚 <small>げう</small> 兵威 <small>へいゐ</small> 攝津 <small>せつしん</small> 軍 <small>ぐん</small> 兇徒 <small>けんとく</small> 違 <small>ちが</small> 司 <small>つかさど</small> 下知 <small>げち</small> 宿老 <small>しゆくらう</small> 還りて <small>かへりて</small> 見參 <small>けんさん</small> 御家人 <small>ごけにん</small> 蒙 <small>かうむ</small> 召具 <small>めしぐ</small> して <small>して</small> 憚 <small>はにか</small> 掌 <small>てのひら</small>	猿樂 酒宴 郡黨 門徒 早馬 さあらの体 せん方 なく 城に登る 近侍 伺候 逆徒 宗門 出座 さ ん候ふ 三軍 下愚 法を深く信じ 一揆 御家 司 ざる 祿 下知 攻めあぐむ 宿老 御家人 能くこ しらへて 憚る いたく	形式 叙事文	修辭 鞍置 <small>くらざき</small> 引つ立つ 今 <small>いま</small> 是 <small>こゝ</small> 誰 <small>たれ</small> かに……今 <small>いま</small> は二三里 も 仰 <small>おほ</small> の旨 <small>めい</small> 稱 <small>なづ</small> 止 <small>と</small> めばやと 以 <small>もつ</small> ての外 <small>がら</small> の不興 <small>ふきやう</small> にて 座 <small>ざ</small> を立 <small>た</small> たる 其 <small>その</small> 兵 <small>へい</small> の道 <small>みち</small> は 三軍 <small>さんぐん</small> の士 <small>し</small> をして悉 <small>しつ</small> く 此 <small>こゝ</small> れ百千 <small>ひやくせん</small> の衆 <small>しゆ</small> 期 <small>き</small> せずして必死 <small>ひつし</small> の…… 思 <small>おも</small> ふにも似 <small>に</small> 似 <small>に</small> 攻めあぐみて 永 <small>なが</small> き天下 <small>てんか</small> の御恥辱 <small>ごちじよく</small> 掌 <small>てのひら</small> を指 <small>さ</small> すよりも 明 <small>あ</small> らか	語法 知しめされずや 暮れなんとす 暮れてけり 止めばやと存じ 致しけるぞ 思ひ召さるればこそ	三、候の活用形は、現代から見れば甚だ複雑なやうだが、現代的な用語に砕いて悟らせるやうにする事

章	構	想	鑑	賞	注
……候ひつれ 候ひし さん候 ……など思ひ召されなば……候はんが さらずば さあらんによつては 更にそれもかなひ難くやありけん まかり歸りて休み候へ 明らかにぞ候ひける	一、重昌を呼戻さんさ後を追ふ 二、登城して意見を申上げ不興を蒙る 三、下城せず踏止つて更に意見を申上げたこと それが動かすべからざる先見の明であつた事	一、さあらの体で宴席を辞する心中 二、後を馳追ふ時の決心 三、將軍に向つて「仰せの旨」と稱し止めばやと存じと書つてのける意力の強さ 四、不興を受けても踏止まつて下城せぬ決心覺悟 五、事理の明徹	一、宗教の力の偉大さ——兵法上のそれとの對比 2、引例による立證 3、よき家人を失ふことの惜しむ 天下の恥辱 六、豫言の的中、先見の明	一、文体が古く、殊に候体だから文脈文理を十分吟味させねばならぬ 二、引用された戦争については今少し具体的に調べさせる方がよからう	一、文体が古く、殊に候体だから文脈文理を十分吟味させねばならぬ 二、引用された戦争については今少し具体的に調べさせる方がよからう

間時	文	語	句	文	意	
凡二時	後妻 <small>ごさい</small> 姑 <small>こ</small> 厭 <small>いと</small> 杖柱 <small>つゑはしら</small> 世子 <small>せいし</small> 悲歎 <small>ひたん</small> 自刃 <small>じりん</small> 嫁 <small>よめ</small> ぐ 權掌侍 <small>ごんしやうじ</small> 同僚 <small>どうりやう</small> 質疑 <small>しつぎ</small> 虛弱 <small>きじやく</small> 攝養 <small>せつやう</small> 療養 <small>りやう</small> 御垣 <small>みかき</small> の下草 <small>したぐさ</small> (名) 錦 <small>にしき</small> 秀歌 <small>しゅうか</small> 苔 <small>こけ</small> さきあらひ衣 <small>ぎぬ</small>	歌文の道 藩士 琴瑟 先立つ 嬰兒 姑 粗衣 同居 孝貞 知遇 天死 自刃 殉す 老女 遇す 人材 拜寫 同僚 虛弱 家居 出仕 内旨 癒ゆ 奉仕 享年 權掌侍 陸叙 家集 たまもの 錦 さきあらひ衣	(女子用)第十二課 税所敦子	淑徳のほまれの一世に高い税所敦子の人格を偲ばしめ 公的生活の謹嚴さや、趣味に修養に出色の才を見せた その一生を偲ばしめる	凡二時	三、候の活用形は、現代から見れば甚だ複雑なやうだが、現代的な用語に砕いて悟らせるやうにする事

(女子用)第十二課 税所敦子

間時	文	語	句	文	意
凡二時	形式 文語、傳記文 修辭 琴瑟相和せり 嬰兒を懐にし 孝貞に感じ用ひて世子保育の任に當らしめ「我、人を待たり」杖柱とも頼む 錦着つゝも思ふかな……音を ぬれし椿の花落ちて 春風さむし——谷の下道	歌文の道 藩士 琴瑟 先立つ 嬰兒 姑 粗衣 同居 孝貞 知遇 天死 自刃 殉す 老女 遇す 人材 拜寫 同僚 虛弱 家居 出仕 内旨 癒ゆ 奉仕 享年 權掌侍 陸叙 家集 たまもの 錦 さきあらひ衣	淑徳のほまれの一世に高い税所敦子の人格を偲ばしめ 公的生活の謹嚴さや、趣味に修養に出色の才を見せた その一生を偲ばしめる	凡二時	三、候の活用形は、現代から見れば甚だ複雑なやうだが、現代的な用語に砕いて悟らせるやうにする事

月二十

週四第十

構	想	鑑	賞	注	意	旨要
一、結婚後の不幸 二、姑への孝養 三、藩主への忠勤 四、宮中出仕と誠忠 五、死後の榮譽	一、結婚後の不幸にも心を亂さぬ健氣さ 二、姑に對する誠心と、姑の輕侮に堪へての孝養 三、善と誠に自己を屈した姑の心、敦子の偉さ 四、世子の天死に殉ぜんとした至情 五、姑の諫止する心持、思ひ止る敦子の胸中 六、行き届いた老女振り 七、安息の暇もなき宮中生活に虚弱な身体の攝養も出 來得ずとも何等意にもかけぬ謹直さ 八、明治天皇の有難い御内旨に感泣して療養に力める 赤心 九、死後の榮譽と賞歎 一〇、詠草の一般	一、叙述が簡單であるから、所々敷衍補説が必要だ 二、事蹟よりも人格に光つた女性である。その点を注 意すべきことだ	雪の美を稱へさせ 俳句の詩趣を鑑賞させる	第十三課 雪		

時	文	句	語	字	文	章	構	想	鑑
凡二時	底冷 金殿玉樓 わだち 見立てる 心目 一新 雪	底冷 飛脚 往還 とだえがち 楓 さりげなき	形式 記事文風の説明文 修辭 引用法「夏蟲云々」「道行く人は云々」及び數多 の俳句	天地一白 金殿玉樓も茅屋も差別なく同一の色に埋 められる 路行く人は鶴の羽衣を着て 自然は又此 の壯觀を興へて……のであらう ……の美しさよ 川一筋や 人もあるらし 散らしてや 音も静けし 語法 俳句の切字 感嘆詞等	一、雪の一般的な美 二、俳句に表現された雪の美	一、雪降り的情趣 二、天地一白の清々さ 三、雪の江の大舟よりも小舟かな 雪に埋もつた水の江にある小舟の詩情 四、山の雪夜は家ある火影かな 一、晝間はたゞ天地一白、家の在所も見えぬ眺め 二、夜に入つてはじめて人家のあつたことが知れた			

一、恐ろしい深山の雪の暮 二、物凄い狼群の遠吠が一せいに揃ふ怖しさ 三、揃ふの妙味 二、荒熊のかけ散らしてや笹の雪	一、恐ろしい深山の雪の暮 二、物凄い狼群の遠吠が一せいに揃ふ怖しさ 三、揃ふの妙味 二、荒熊のかけ散らしてや笹の雪	一、雪の降る夕暮、背景は松原——その淋しさ 二、飛脚小さし——遠さ、寒さ、淋しさ 八、箱根越す人もあるらし今朝の雪 一、雪の箱根を越す困難を想像する芭蕉の氣分 二、人もあるらし——思ひ入の面白さ 九、旅人に我が糧分つ深雪かな 一、雪の山路の困難 二、空腹と寒さ——見知らぬ旅人を人事ならす思ひ つって糧を分ちやる温かさ	一、静かな雪の朝明けの氣分 二、誰も雪の路を行くものは無い——たゞ時折旅人 だけは雪の路をいそいで行く、さいふ思ひ 七、松原に飛脚小さし雪の暮 一、雪の降る夕暮、背景は松原——その淋しさ 二、飛脚小さし——遠さ、寒さ、淋しさ 八、箱根越す人もあるらし今朝の雪 一、雪の箱根を越す困難を想像する芭蕉の氣分 二、人もあるらし——思ひ入の面白さ 九、旅人に我が糧分つ深雪かな 一、雪の山路の困難 二、空腹と寒さ——見知らぬ旅人を人事ならす思ひ つって糧を分ちやる温かさ	一、静かな雪の朝明けの氣分 二、誰も雪の路を行くものは無い——たゞ時折旅人 だけは雪の路をいそいで行く、さいふ思ひ 七、松原に飛脚小さし雪の暮 一、雪の降る夕暮、背景は松原——その淋しさ 二、飛脚小さし——遠さ、寒さ、淋しさ 八、箱根越す人もあるらし今朝の雪 一、雪の箱根を越す困難を想像する芭蕉の氣分 二、人もあるらし——思ひ入の面白さ 九、旅人に我が糧分つ深雪かな 一、雪の山路の困難 二、空腹と寒さ——見知らぬ旅人を人事ならす思ひ つって糧を分ちやる温かさ	一、静かな雪の朝明けの氣分 二、誰も雪の路を行くものは無い——たゞ時折旅人 だけは雪の路をいそいで行く、さいふ思ひ 七、松原に飛脚小さし雪の暮 一、雪の降る夕暮、背景は松原——その淋しさ 二、飛脚小さし——遠さ、寒さ、淋しさ 八、箱根越す人もあるらし今朝の雪 一、雪の箱根を越す困難を想像する芭蕉の氣分 二、人もあるらし——思ひ入の面白さ 九、旅人に我が糧分つ深雪かな 一、雪の山路の困難 二、空腹と寒さ——見知らぬ旅人を人事ならす思ひ つって糧を分ちやる温かさ	一、静かな雪の朝明けの氣分 二、誰も雪の路を行くものは無い——たゞ時折旅人 だけは雪の路をいそいで行く、さいふ思ひ 七、松原に飛脚小さし雪の暮 一、雪の降る夕暮、背景は松原——その淋しさ 二、飛脚小さし——遠さ、寒さ、淋しさ 八、箱根越す人もあるらし今朝の雪 一、雪の箱根を越す困難を想像する芭蕉の氣分 二、人もあるらし——思ひ入の面白さ 九、旅人に我が糧分つ深雪かな 一、雪の山路の困難 二、空腹と寒さ——見知らぬ旅人を人事ならす思ひ つって糧を分ちやる温かさ
--	--	---	---	---	---	---

一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美	一、笹の茂つた上に降りつもつた深山の雪景色 二、所々その雪が蹴散らされたやうに笹の葉のあら は、にあらばれたのを見つけた時の心持——おや、 熊だ、熊だ——怖しさ、荒涼凄壯の感 三、月にさほる音も、静けし夜の雪 一、寂然と更ける深夜の雪、耳をすましても物音一 つせぬ 二、時々風が来て、雨に雪を吹きつける、サラ、サ ラと軽いき、やかな音がする——がそれさへも静 かだ 静寂の情趣 三、雪折れも聞えて暗き夜なかかな 一、暗い深夜に降り積る雪——寂として物音もせぬ 二、時々、あちこちで、ホキリと不意な音が耳に入 る——雪折れだ、松の枝か、それとも樅の枝か ないや裏の竹箴らしいぞ、など、いふ風情 四、静かさや雪のあしたの金閣寺 一、雪の朝の格別な静かさ 二、庭を以て天下に鳴る金閣寺の雪の朝——名園に ふうはりと降り積つた雪を背景に、同じ柔かい雪 をいたゞいた樓閣が静かさの中に立つてゐる風情 全く生れかばつたやうな、清くも明るく眺め 二、雪はれて空さびげなき朝日かな 一、雪の朝あけの空の美
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

週五十第				
賞	注	意	要	旨
<p>賞</p> <p>2、空さりげなき——雪を降らした空さも思はれぬ清らかな青空を指した面白さ</p> <p>1、無技巧の妙味——美しき味</p> <p>2、「雪の上」の日和——朝日に光る雪の輝き、空の紺碧、「雪の上」の「上」の持つ妙味</p>	<p>注</p> <p>一、俳句は豊富な想像によつて生かされねばならぬ。しかし、一字一句もおろそかにしてはならぬ。想像さいつても句の意に反するやうなものではいけない</p> <p>二、経緯で押さぬこと。情調が肝腎である</p> <p>三、句特有の切字、修辭法等について特に理解させて置く必要があらう</p> <p>四、作者についても簡単に説明を附加するがよい</p> <p>五、總括的に俳句について解説して置くのもよからう</p>	<p>意</p> <p>第十四課 賢母の教</p> <p>愛の絆を暫し断ち、遙々尋ね歸りし我が子を家にも入れて雪の路上につき戻し、血を吐くやうな教訓を與へて涙を絞る母の胸中に思ひを致させ、その切々たる母子の恩愛に涙あらしめ、この母が、この子をして他日近江聖人まで仰がしめるに至りしも誠に偶然に非ざりし事に感激せしめる</p>	<p>要</p> <p>第十四課 賢母の教</p> <p>愛の絆を暫し断ち、遙々尋ね歸りし我が子を家にも入れて雪の路上につき戻し、血を吐くやうな教訓を與へて涙を絞る母の胸中に思ひを致させ、その切々たる母子の恩愛に涙あらしめ、この母が、この子をして他日近江聖人まで仰がしめるに至りしも誠に偶然に非ざりし事に感激せしめる</p>	<p>旨</p> <p>愛の絆を暫し断ち、遙々尋ね歸りし我が子を家にも入れて雪の路上につき戻し、血を吐くやうな教訓を與へて涙を絞る母の胸中に思ひを致させ、その切々たる母子の恩愛に涙あらしめ、この母が、この子をして他日近江聖人まで仰がしめるに至りしも誠に偶然に非ざりし事に感激せしめる</p>
<p>賞</p> <p>三、母の教</p> <p>四、母の胸中</p> <p>五、藤太郎辭去の決心をいたはし</p> <p>六、あかざれ妙薬の贈答</p> <p>七、恩愛の涙</p> <p>八、別離、出立</p>	<p>文</p> <p>形式 文語、敘事文</p> <p>修辭 修辭は七五調の形式にとり美文の調子を踏ませ隨所に對句、連鎖、等を用ひ美辭麗句を連ね、敘事に叙景を巧に挿梅した擬古的手法</p> <p>引用「雪ならば云々」それはやよひの……これは習はぬ冬の旅 花の吹雪のそれならで 霏々たる雪は路を没し凜冽たる風は…… 滿目蕭條たる湖上の風景 堅田に落つる雁の聲のみ寒く…… 白雪皚々たる 夜にてもあれ朝にてもあれ いたはしや藤太郎</p>	<p>語</p> <p>霏々 凜冽 滿目蕭條 暮靄 白雪皚々 深山路 一入 叢きしる 真情 心根 默然 憂き事 恩愛の情 なまなかに 千仞の谷 うるむ 妙薬 悠々</p>	<p>字</p> <p>吹雪 山越 膚 堅田 雁 比良 厭はじ 杖 徹りて 凍る 潜る 細谷川 枝折れ雪の落つる 響 深山路 戻る 恨めし 飢 一入 凍死 捜す 優し 朽ち 土塀 前庭 敢へず 驅行く 袂 朝嵐 心根 大州 默然 入江 憂き 腸 凍る 快く 薄氷 滿天の風雪路悠々</p>	<p>所出</p> <p>村井寛「近江聖人」</p> <p>凡三時</p>

章		構
<p>一、藤太郎滋賀の山越の艱苦</p> <p>二、同様艱苦、歸省のわけ</p> <p>三、人事不省に陥つた事</p> <p>四、救助された事</p> <p>二</p> <p>一、我が村に入る</p> <p>二、母子の對面</p>	<p>一、藤太郎滋賀の山越の艱苦</p> <p>二、同様艱苦、歸省のわけ</p> <p>三、人事不省に陥つた事</p> <p>四、救助された事</p> <p>二</p> <p>一、我が村に入る</p> <p>二、母子の對面</p>	<p>一、藤太郎滋賀の山越の艱苦</p> <p>二、同様艱苦、歸省のわけ</p> <p>三、人事不省に陥つた事</p> <p>四、救助された事</p> <p>二</p> <p>一、我が村に入る</p> <p>二、母子の對面</p>
<p>賞</p> <p>一、雪ならばの歌の情趣</p> <p>二、雪中滋賀の寂寥たる風景とその困難</p> <p>三、雪中に踏み迷ふ少年の心中、母を思ふ真心</p> <p>四、人事不省に陥るいたはし</p> <p>五、救助の嬉しさ、有難さ</p> <p>六、故郷に入る時の歡喜</p> <p>七、我家の落魄たる有様を見る心</p> <p>八、雪の早朝に響く車井戸の音</p> <p>九、昔の母——今の母、いたはしを悲し</p> <p>一〇、「私が汲みませう」孝子の眞情</p> <p>一一、一途に母を思ふ餘りの歸省さ知つた母の心の中心</p> <p>一二、藤太郎辭去の決心をいたはし</p> <p>一三、あかざれ妙薬のやり取りにもつれる恩愛の涙</p> <p>一四、雄々しい出立、見送り見返る二人の胸中</p> <p>一五、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p> <p>一六、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p> <p>一七、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p>	<p>賞</p> <p>一、雪ならばの歌の情趣</p> <p>二、雪中滋賀の寂寥たる風景とその困難</p> <p>三、雪中に踏み迷ふ少年の心中、母を思ふ真心</p> <p>四、人事不省に陥るいたはし</p> <p>五、救助の嬉しさ、有難さ</p> <p>六、故郷に入る時の歡喜</p> <p>七、我家の落魄たる有様を見る心</p> <p>八、雪の早朝に響く車井戸の音</p> <p>九、昔の母——今の母、いたはしを悲し</p> <p>一〇、「私が汲みませう」孝子の眞情</p> <p>一一、一途に母を思ふ餘りの歸省さ知つた母の心の中心</p> <p>一二、藤太郎辭去の決心をいたはし</p> <p>一三、あかざれ妙薬のやり取りにもつれる恩愛の涙</p> <p>一四、雄々しい出立、見送り見返る二人の胸中</p> <p>一五、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p> <p>一六、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p> <p>一七、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p>	<p>賞</p> <p>一、雪ならばの歌の情趣</p> <p>二、雪中滋賀の寂寥たる風景とその困難</p> <p>三、雪中に踏み迷ふ少年の心中、母を思ふ真心</p> <p>四、人事不省に陥るいたはし</p> <p>五、救助の嬉しさ、有難さ</p> <p>六、故郷に入る時の歡喜</p> <p>七、我家の落魄たる有様を見る心</p> <p>八、雪の早朝に響く車井戸の音</p> <p>九、昔の母——今の母、いたはしを悲し</p> <p>一〇、「私が汲みませう」孝子の眞情</p> <p>一一、一途に母を思ふ餘りの歸省さ知つた母の心の中心</p> <p>一二、藤太郎辭去の決心をいたはし</p> <p>一三、あかざれ妙薬のやり取りにもつれる恩愛の涙</p> <p>一四、雄々しい出立、見送り見返る二人の胸中</p> <p>一五、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p> <p>一六、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p> <p>一七、餘韻——藤太郎他日の立身出世と母の喜び</p>

週六十第													
注		意		旨要		間時		字文					
一、擬古形式なので現代文から見れば作意が見えすぎて變な所もあるが、兎に角面白い文章である。よく味は、せるやうに努めること。		二、人物の心境に導き入らす事が最も大切。		三、美文的な修辭は餘り解割せぬやうに。		四、藤樹の年譜略歴等を補説して置くのもよからう。		五、準備をするなら、藤樹の肖像、墓地寫眞、近江地方地圖等が必要であらう。		第十五課 詠史十首 短歌によつて史上の人物を想ひ偲ばせる 凡二時			
修辭 弦の音高くもあるかな 年を經し絲のみだれ 露にぬれざる袖 時鳥雲居に鳴きし夢さめて 滑川 水底照らす 神風のもろこし船を拂ふまで 散れど 敬へておのれまづ 越路の雁ぞあはれなる 越路の 雪の清き心 すみまさりつ、		雲居 神風 越路の雁 を、しく たわやがひな 弦の音 東の國 言の葉 形式 短歌		雲居 水底 武夫 雁 くもる みなぞし ものふ かり		凡二時		形式 短歌		修辭 弦の音高くもあるかな 年を經し絲のみだれ 露にぬれざる袖 時鳥雲居に鳴きし夢さめて 滑川 水底照らす 神風のもろこし船を拂ふまで 散れど 敬へておのれまづ 越路の雁ぞあはれなる 越路の 雪の清き心 すみまさりつ、			
章		鑑		賞		注		意					
語法 あるかな 袖やかならん あきかぜぞ吹く 見えもするかな つくしにけりな 雁ぞあはれなる 贈りけん 見ゆるかな 清きながれも すみまさりつ、		一、な、しくもたわやがひなに——健氣な情景 二、年を經し絲のみだれも——衣川の梅の歌を引いてその勤功を稱へる心持 三、露にぬれざる袖やかならん——悲壯な心中 四、扇の芝に秋風を吹く——終焉の悲哀 五、滑川水底照らす——深き心 六、もろこし船を拂ふまで——靈思雜圖 七、散れど敬へておのれまづ——悲壯な心事 八、歸り來ぬ越路の雁のあはれなる——咏嘆 九、越路の雪のきよき心——義心、武士道的仁俠 一〇、西山の月の光——尊子忠君の至情		一、難解の辭句多し注意を要す 二、簡単に史實の敷衍を必要とす		修辭 顔色疲れて常ならず覺えければ 且は驚き且はおぼつかなく思ひて 密かに歎息して思へらく 鏡の席に臨むこゝ能はざるはこれを遺憾の極みなる將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に 第二の本國 語法 病やある 病は斯くなん 思へらく いそしみたらんには 擧らざるこゝやあるべき さるをこれぞ遺憾の極みなる		一、病中訪問せしときの思ひ出 二、謹直に對する感慨 三、別離の席に列し得ぬ遺憾 四、惜別の辭 一、病をおして約束を果さうとする謹直さ 二、訪問者及び法相の驚きと感激 三、感慨に表はれた心持 四、別離の席に臨み得ぬ残念さ 五、友を惜しみ別れを悲しむ美しい眞情		賞 鑑 想 構 章		賞 鑑 想 構 章	

第二學年 第三學期 約十一週凡四十四時間 (一週四時)

月 一											
週 一 第											
要		目		月		週		賞			
第十六課 ポアソナード君の歸國を送る詞 要 がアソナードの我國立法上に致した功績を想ひ、ポアソナードが病を得て歸國するに當つて惜別の感に堪へ得なかつた當時の人々の眞情を味は、せ、ポアソナードの謹直無二な人格を仰がしめる 井上毅「梧桐存稿」 凡二時		要 がアソナードの我國立法上に致した功績を想ひ、ポアソナードが病を得て歸國するに當つて惜別の感に堪へ得なかつた當時の人々の眞情を味は、せ、ポアソナードの謹直無二な人格を仰がしめる 井上毅「梧桐存稿」 凡二時		賞 顔色 顔色疲れて常ならず覺えければ 且は驚き且はおぼつかなく思ひて 密かに歎息して思へらく 鏡の席に臨むこゝ能はざるはこれを遺憾の極みなる將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に 第二の本國 語法 病やある 病は斯くなん 思へらく いそしみたらんには 擧らざるこゝやあるべき さるをこれぞ遺憾の極みなる		賞 顔色 顔色疲れて常ならず覺えければ 且は驚き且はおぼつかなく思ひて 密かに歎息して思へらく 鏡の席に臨むこゝ能はざるはこれを遺憾の極みなる將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に 第二の本國 語法 病やある 病は斯くなん 思へらく いそしみたらんには 擧らざるこゝやあるべき さるをこれぞ遺憾の極みなる		賞 顔色 顔色疲れて常ならず覺えければ 且は驚き且はおぼつかなく思ひて 密かに歎息して思へらく 鏡の席に臨むこゝ能はざるはこれを遺憾の極みなる將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に 第二の本國 語法 病やある 病は斯くなん 思へらく いそしみたらんには 擧らざるこゝやあるべき さるをこれぞ遺憾の極みなる		賞 顔色 顔色疲れて常ならず覺えければ 且は驚き且はおぼつかなく思ひて 密かに歎息して思へらく 鏡の席に臨むこゝ能はざるはこれを遺憾の極みなる將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に 第二の本國 語法 病やある 病は斯くなん 思へらく いそしみたらんには 擧らざるこゝやあるべき さるをこれぞ遺憾の極みなる	
文 形式 送辭の形式を具へた叙事文		文 形式 送辭の形式を具へた叙事文		文 形式 送辭の形式を具へた叙事文		文 形式 送辭の形式を具へた叙事文		文 形式 送辭の形式を具へた叙事文			

注	一、當時に於る我國の事情につき大体の補説を必要とする 二、年代、人物等につきて相當解説を與ふべきこと
意	第十七課 法律及び命令
旨要	法律及び命令に關する法制的理解を與へる
間時	凡二時
標準	諸法例、官報、縣報類
字文	緊急 <small>きんきん</small> 緊急
語句	條規 法規 協賛 公布 通俗 主管事務 原則 改廢 臨時 緊急 緊急勅令 遵奉
文	形式 口語体、説明文 修辭 引例「例へば……」原則としては………するには……より輕重の別があつてはならぬ
章	一、法令の意義 二、法律の例 三、命令の例 四、法令の改廢 五、法令の尊重すべきこと
構	
想	
吟	一、法律、命令の意義

味	二、法律の諸例と各々の内容 三、命令の諸例と各々の特質 四、法令改廢の原則、緊急勅令の意義 五、法令の尊重遵守すべき所以
注	一、成るだけ實際上、日常生活上に緊要なものを附加引用して理解に資すやうに努めること 二、概念的に取扱ふよりも、出来るだけ具体的に取扱ふことが大切である 三、法制上の用語は特に吟味を與ふべきこと
旨要	(女子用)第十七課 我が國の家庭 我が家族制度の下に於る家庭組織の長所美点を味はせ、家族さしの自覺を持たせる
間時	凡二時
文	靈 <small>れい</small> 。祭祀 <small>さいし</small> 。炊 <small>かし</small> 。到來物 <small>たらいもの</small> 。縁者 <small>えんじや</small> 。追遠 <small>つゐん</small> 。繼 <small>つ</small> ぐ。 愛撫 <small>あいぶ</small> 。賜物 <small>たまひもの</small> 。言葉道 <small>ことばぢみち</small> 。兄姉 <small>にいあに</small> 。弟妹 <small>ていまい</small> 。陰曆 <small>かげれん</small> 。表向 <small>おもてむき</small> 。漬物 <small>つけもの</small> 。蟲干 <small>むしほし</small> 。
字	皇祖 奉祀 國風 祭祀 炊ぐ 不時 到來物 追遠 若夫婦 家風 愛撫 序 陰曆 家長
句	形式 口語、説明文
文	

週二第

章	修辭 對句法多し、語法 陰曆をすうる
構	一、祖先の祭祀 二、祖先追遠の至情 三、家族の團聚と長所 四、禮讓 五、同情 六、主人主婦のつとめ
想	
鑑	一、祖先崇拜の至情、美はしき國風 二、祖先の靈に到來物を供へる眞情 三、親類縁者のむつまじさ、追遠の至情 四、若夫婦と父母の同居 1、家風の繼承 2、孫を愛撫する祖父母の心 3、家業の精勵 五、長幼の序の定しき 六、家長尊敬の美風 七、陰曆に表はされた純情 八、主人の公的任務、主婦の家庭的任務の判然
當	
注	一、長所美点はいやが上にも高潮して激賞すべきこと 二、反面にある缺点是書いてないが、それとなく暗示だ

意	を受ける所が多い しかし要は我が家庭の謳歌であり賞讃である
旨要	第十八課 道德と法律 法律の遵奉と道德の理想とは如何なる点が異なるかを悟らせ、實踐上の自覺を持たせる
間時	凡二時
字文	遵奉 <small>じゆんぽう</small> 。權力 <small>けんり</small> 。餘財 <small>よさい</small> 。義捐 <small>ぎだん</small> 。債權者 <small>さいけんしや</small> 。差押 <small>さしおさへ</small> 。固 <small>もと</small> より。考量 <small>かうりやう</small> 。
語句	權力 應分 義捐 非難 道德心 發動 法廷 財產 差押 行使 もとより 攘斥 強要 考量 多々
文	形式 口語、説明文風の論文 修辭 「それば」「それごとて」の用例 力強い論法と論法の明徹
構	一、道德の範圍と法律の範圍 二、日常生活に於る實踐方面の諸行爲と法律 三、法律上の權利義務と道德 四、結論 法律的に合法な行爲のみが最上なるものではない
想	一、道德と法律との相似たる点
吟	

文	句語	字文	間時	所出	要旨	注	味
形式 口語、記事文	お國 清冽 象徴 外界 郊外	浸す。象徴。神秘的。郊外。幻影。淡い。	凡一時	寺田寅彦「冬産集」	田園の自然美に憶ひ慣れる都會人の心持を味はせ、田園生活の貴さと、その自然美を悟らせる	一、前課と連絡を保たせた材料である 二、冷酷な法律至上の精神を温かな道德的理想によつて批判せしめるのである 三、實際上の例證を多くする方がよい	二、兩者の範圍の比較 三、實際例につきての吟味 1、義捐の行爲と法律 2、約束と法律 3、債權の亂用と道德 4、義務の不履行と道德 四、結論 吾人の踏むべき眞の道
第十九課 田園の自然							
賞	鑑	想	構	章	文	修辭	味
五、田園の自然美	1、小川 流れ 鯉 鮒 2、河畔の草花 3、魚屋の鯉には満足せぬ心持 4、大人も子供の心になつて田舎を慕ふ心持 1、過去の田舎を慕ふさいふ理由の面白さ 2、大人の自分の中に子供の自分を發見する時のなつかしい心持——内省の深さ 3、それが時々頭を出す——といふ憶れの心持 4、淡い「時の悲しみ」の情調	一、子供が田舎をしたふ事實 二、子供が田舎をしたふ眞の理由 三、大人が自分の中に見出した子供の心	一、お國のよいわけを鯉のせいにする無邪氣さ 二、自然と子供の生活 三、小川 流れ 鯉 鮒	一、家の位置と周囲の眺め 二、此家に移つたわけ 三、晩餐の樂しさ 四、池 五、雞 六、自然に對する嬉しさ 七、母への孝養、親子の情愛	形式 文語、記事文 修辭 世を避けて門を閉すとはあらねど 前に……あり後に……や……や……や……や……や……や…… 一鉢の飯母と分ち……と分ち……と分ち……と分ち…… なり 碧水に 種の模様をふがき或は集り或は散じに時は……時には………ものは梅の實なり……なり……なり……なり 初は……終には………偷久しくよしや……知らずとも……知らるべくや……小春日和の如きが その小春日和をさへ時雨の空に響せしめんとす「親思ふ心にまさる……」罪深きかな抑々不幸の子なるかな 見るにつけても……ぞや語法 さにはあらねど ただに……のみならず おほかなげに よしや 知らるべくや そは……の如きが かなぞや	修辭 清冽な小川の流をこれに縁の影を浸す森や山、河畔に咲亂れる草花 田舎の自然を象徴する鯉でなければならぬ 鯉は今でも居るが子供の私はもう其處には居ないからである 此の「子供の私」は今でも「大人の私」の中の何處かに隠れてゐる さうして意外な時に出て来て外界をのぞくことがある 語法 ひつくるめて なければならぬ	修辭 清冽な小川の流をこれに縁の影を浸す森や山、河畔に咲亂れる草花 田舎の自然を象徴する鯉でなければならぬ 鯉は今でも居るが子供の私はもう其處には居ないからである 此の「子供の私」は今でも「大人の私」の中の何處かに隠れてゐる さうして意外な時に出て来て外界をのぞくことがある 語法 ひつくるめて なければならぬ

週三第

句	語	字	文	間時	所出	要旨	注
廉頗 用ひらる	健康 養を加ふ	ものする	世を避く 門を閉す 一字 茅屋 屋外 族生 四顧 街上 塵埃 都門 藩園 雅兒 晚餐 裏家の犬 殘肴 悄然 欄干 標悍 名利 默坐 物の哀 團 樂 一抹 愁雲 古稀 憂愁 苦楚 末年 小安	凡三時	大町芳衛「桂月全集」	一家團樂の樂しみ、溢れるやうな親子の情愛——凡てに美しく貴い家庭の和樂を味はせる	一、ちつと深く考へさせたいものだ 内省の眼を開かせてやりたいものだ 二、やがてはそのなつかしい子供の國から離れて行く兒童達だ 子供の國の慕はしき懐かしさを失はぬやうに心してやりたい 子供を忘れた大人は不幸である
第二十課 我が家							
鑑	想	構	章	文	形式	修辭	味
二、都會生活と田舎生活の情緒の相違	一、家を廻る木立の美	七、母への孝養、親子の情愛	六、自然に對する嬉しさ 五、雞 四、池 三、晩餐の樂しさ 二、此家に移つたわけ 一、家の位置と周囲の眺め	形式 文語、記事文 修辭 世を避けて門を閉すとはあらねど 前に……あり後に……や……や……や……や……や……や…… 一鉢の飯母と分ち……と分ち……と分ち……と分ち…… なり 碧水に 種の模様をふがき或は集り或は散じに時は……時には………ものは梅の實なり……なり……なり……なり 初は……終には………偷久しくよしや……知らずとも……知らるべくや……小春日和の如きが その小春日和をさへ時雨の空に響せしめんとす「親思ふ心にまさる……」罪深きかな抑々不幸の子なるかな 見るにつけても……ぞや語法 さにはあらねど ただに……のみならず おほかなげに よしや 知らるべくや そは……の如きが かなぞや	形式 文語、記事文	修辭 世を避けて門を閉すとはあらねど 前に……あり後に……や……や……や……や……や……や…… 一鉢の飯母と分ち……と分ち……と分ち……と分ち…… なり 碧水に 種の模様をふがき或は集り或は散じに時は……時には………ものは梅の實なり……なり……なり……なり 初は……終には………偷久しくよしや……知らずとも……知らるべくや……小春日和の如きが その小春日和をさへ時雨の空に響せしめんとす「親思ふ心にまさる……」罪深きかな抑々不幸の子なるかな 見るにつけても……ぞや語法 さにはあらねど ただに……のみならず おほかなげに よしや 知らるべくや そは……の如きが かなぞや	修辭 世を避けて門を閉すとはあらねど 前に……あり後に……や……や……や……や……や……や…… 一鉢の飯母と分ち……と分ち……と分ち……と分ち…… なり 碧水に 種の模様をふがき或は集り或は散じに時は……時には………ものは梅の實なり……なり……なり……なり 初は……終には………偷久しくよしや……知らずとも……知らるべくや……小春日和の如きが その小春日和をさへ時雨の空に響せしめんとす「親思ふ心にまさる……」罪深きかな抑々不幸の子なるかな 見るにつけても……ぞや語法 さにはあらねど ただに……のみならず おほかなげに よしや 知らるべくや そは……の如きが かなぞや

賞	注	意
<p>三、父を迎へて喜ぶ幼児の可憐さ</p> <p>四、夏の夕、庭で晚餐をさる團樂の樂しさ</p> <p>五、犬を愛する美しい情</p> <p>六、池掃除の面白さ</p> <p>七、鯉を放つて喜ぶ子供心の樂しさ</p> <p>八、飼鶴の樂しさ</p> <p>九、子供と自然</p> <p>一、子供の喜ぶもの——それは自然</p> <p>二、子供を見る——<u>私の嬉しさ</u></p> <p>三、自然を見る——<u>我の嬉しさ</u></p> <p>二〇、自然に對する敬虔な情調</p> <p>一、愛すべし——敬すべし——不可思議の力</p> <p>二、子供</p> <p>二、物のあはれを知る心</p> <p>三、母を思ふ子の心、子を思ふ母の心</p>	<p>一、前課、田園の自然の主題を對照せしめよ</p> <p>二、桂月の文に特有な味をつかませねばならぬ 單なる美文とのみ見てはならない</p> <p>三、子供に對する作者の眞心をよくくみ取り、味は、せればならぬ</p> <p>四、桂月の略歴をも調べるこゝ</p>	

二 月
第四週

要旨	間時	文字	句	文	章	構	想	
<p>わびしい冬籠りも漸く終らうとして、楽しい春を待ちこがれてゐる萬物新生の力を感ぜしめ、その詩情を味はせる</p>	凡二時	<p>鳥のりか 櫻調。摘む。</p> <p>すさぶ うらさび ひねもす 口をつぐむ かまへ</p> <p>沖邊 漢 おほろ 櫻調</p>	<p>形式 文語、韻文 五七調四聯新体詩</p> <p>修辭 すさぶがまへに うらさびたれど や、芽はふくらみて 光を待てり 口をつぐみて 空をうかふ かまへやすらん 波の花 やかて見よ…… 夢かき浮かび 斯くて今…… 摘まん…… 尋れん 樂しきは……</p> <p>語法 ひねもすに かまへやすらん、うらさびたれど 谷にこもれど、岸に凍れど、</p>	<p>一、春の光を待つ草木</p> <p>二、春の空に憫れみ</p> <p>三、海苔にたゞよふ春の香</p> <p>四、春を待つ海邊</p> <p>五、春待つ樂しさ、嬉しさ、躍る心</p>	<p>一、現代航海業の發達</p> <p>二、航海業の發達と商工業の關係、各國の競争</p> <p>三、大西洋航路</p> <p>四、太平洋航路</p> <p>五、我國主要航路</p> <p>六、三大國船舶噸數</p>	<p>一、航海業發達の驚異</p> <p>1、速力</p> <p>2、噸數</p> <p>3、船舶の設備</p> <p>二、航海業の發達と商工業の關係の密接さ</p> <p>三、各國が競争する理由とその政策</p> <p>四、大西洋航路の現状</p>	<p>一、春の光を待つ草木</p> <p>二、春の空に憫れみ</p> <p>三、海苔にたゞよふ春の香</p> <p>四、春を待つ海邊</p> <p>五、春待つ樂しさ、嬉しさ、躍る心</p>	

第二十一課 春を待つ歌

鑑	賞	注	意	要旨	間時	備準
<p>一、北風の吹荒ぶ山野の淋しさ</p> <p>二、その淋しさの下に芽をふくらませてゐる新生の力</p> <p>三、谷に籠つて鳴かうとせぬ鶯の姿</p> <p>四、小鴨もせぬが今か今か春の空をうかぶ心持</p> <p>五、晩冬の海邊の寂しさ</p> <p>六、浜にくつついた海苔の色と香——早春の象徴美</p> <p>七、やかて見よ——楽しい期待</p> <p>八、鳥かけげ夢かと浮かび——春霞に煙る鳥影</p> <p>九、夕の漁に躍り上る櫻鯛の色とその潑刺たる氣分</p> <p>一〇、斯くて今春は隣れり——躍り上る心持</p> <p>二 若菜摘みを待つ心</p> <p>三、梅見の樂しさ</p> <p>三、樂しきは——春だ春だ、もう春だ、雀躍の心持</p>	<p>一、北風の吹荒ぶ山野の淋しさ</p> <p>二、その淋しさの下に芽をふくらませてゐる新生の力</p> <p>三、谷に籠つて鳴かうとせぬ鶯の姿</p> <p>四、小鴨もせぬが今か今か春の空をうかぶ心持</p> <p>五、晩冬の海邊の寂しさ</p> <p>六、浜にくつついた海苔の色と香——早春の象徴美</p> <p>七、やかて見よ——楽しい期待</p> <p>八、鳥かけげ夢かと浮かび——春霞に煙る鳥影</p> <p>九、夕の漁に躍り上る櫻鯛の色とその潑刺たる氣分</p> <p>一〇、斯くて今春は隣れり——躍り上る心持</p> <p>二 若菜摘みを待つ心</p> <p>三、梅見の樂しさ</p> <p>三、樂しきは——春だ春だ、もう春だ、雀躍の心持</p>	<p>一、落着いたよい韻文で、その落着きの中に所謂靜中の動が力強く潜んで居る それが春待つ詩情である</p> <p>二、味はふ事が總てである</p>		<p>世界航路の大体の經路を明かにし、その發達に驚異せしめ海國民たるの自覺あらしむ。</p>	凡三時	<p>世界交通圖 交通に關する統計、圖表、船舶寫眞等</p>

第二十二課 世界航路

第五週

文字	語句	文	章	構	想	吟
<p>劇し。演じ。船舶。繋ぐ。招致。誇つて。</p> <p>短縮 完備 客船 船室 補助金 船舶 大船巨船</p> <p>開發 招致 物資 優勢 遜色 現に</p>	<p>形式 口語、説明文</p> <p>修辭 次第に減じて十五日となり十日となり八日となり今では四日半に短縮した 世界の海運圖を以て任する諸國は劇しい競争をこゝに演じてゐる 最新式の大船巨船</p>	<p>一、現代航海業の發達</p> <p>二、航海業の發達と商工業の關係、各國の競争</p> <p>三、大西洋航路</p> <p>四、太平洋航路</p> <p>五、我國主要航路</p> <p>六、三大國船舶噸數</p>	<p>一、航海業發達の驚異</p> <p>1、速力</p> <p>2、噸數</p> <p>3、船舶の設備</p> <p>二、航海業の發達と商工業の關係の密接さ</p> <p>三、各國が競争する理由とその政策</p> <p>四、大西洋航路の現状</p>	<p>一、航海業發達の驚異</p> <p>1、速力</p> <p>2、噸數</p> <p>3、船舶の設備</p> <p>二、航海業の發達と商工業の關係の密接さ</p> <p>三、各國が競争する理由とその政策</p> <p>四、大西洋航路の現状</p>		

文	句	語	字	文	間時	旨	要	意	注	味
形式	口語、説明文	應對 程々 尊貴の人 粗略 他人行儀 精粗繁簡 委曲を盡くす 簡潔 贅言 くだくだしい 慶弔 慰問 境遇 儀式一片 明瞭 緊要 省略 感情を害する 等閑に附す	應對 程々 尊貴の人 粗略 他人行儀 精粗繁簡 委曲を盡くす 簡潔 贅言 くだくだしい 慶弔 慰問 境遇 儀式一片 明瞭 緊要 省略 感情を害する 等閑に附す	認む。言葉遣。間柄。文句。他人行儀。精粗繁簡。委曲。挿む。体裁。本多作左。肥せ。等閑。	凡二時	手紙の認め方に關して理解を得しめ、書簡文の精神といふものを悟らせる	第二十三課 手紙の認め方	一、單調な地理的吟味で終らぬやうに、どの項目に於てもその奥に潜む文の精神を見抜かしめねばならぬ 二、我國は殊に海運盛たるの天恵を有つてゐるのだが、その点を忘れてはならない	五、太平洋航路の現状 六、我國航路の現状 七、三大國船舶噸數とその勢力、日本としての覺悟	吟 修辭 精粗繁簡の趣を異にする 長きを厭はず委曲を盡くして 喜を共にし悲しみを分つ心の 一、用語上の注意 二、長短と繁簡の別 三、真情の流露を貴ぶ 四、不備不明の点なく明確に要領を掴むこと 五、返事は速に出すべきこと 六、一般的な注意、認める心持 一、言葉使ひ一つで色々な感情變化のもつれること II 言語の魂 1、無禮、皮肉、他人行儀 2、野卑、粗雑、丁重 三、簡単なもの 複雑なもの 四、贅言多き手紙に接した時の心持 五、体裁、形式の尊重する事も場合によつて不必要である 六、真情の流露を貴ぶ 七、不明不備の手紙を受取つた時の迷惑 八、返事を遅らして後で困り果てるやうな不精はせぬがよい 返事を待遠しく思ふ心持を知ること

週六第

文	間時	旨	要	意	注	味
批評。指摘。汚し(よこし)。辱しめ。義侠心。榮辱。客氣。驅らる。扶助。孤獨。困窮。整冷。淡。專斷。怪し。耐久持重。坐作進退。傾聽。	凡二時	我等國民が固有の長所短所を外國人の批評によつて反省すると共に大國民たるの品性に向上せしめねばならぬことを悟らせる	第二十四課 歐米人の日本人觀	九、手紙文を書く要諦は對話する氣分で筆を取ることに落着いて自分の言葉で用を足すに限る 一、長短繁簡精粗の別は實際上について吟味するがよい 二、時間が許せば各種手紙の實物について示すもよい 三、候体使用についても吟味を附加してもよい まだ世間には候体でなければ人に失禮になる如く思つてゐる人も多からぬ 四、認め方の大体の形式についても既知事項を整理すると共に、新しい考慮を加ふべき旨をも悟らせるがよい	九、手紙文を書く要諦は對話する氣分で筆を取ることに落着いて自分の言葉で用を足すに限る 一、長短繁簡精粗の別は實際上について吟味するがよい 二、時間が許せば各種手紙の實物について示すもよい 三、候体使用についても吟味を附加してもよい まだ世間には候体でなければ人に失禮になる如く思つてゐる人も多からぬ 四、認め方の大体の形式についても既知事項を整理すると共に、新しい考慮を加ふべき旨をも悟らせるがよい	構 章 文 句 語 字 公にする 精粗區々 鴻毛 義侠心 客氣 前後の分別 輕舉 故舊 癡疾 扶助 謀寡孤獨 親近 危急 存亡 犧牲 冷淡 理事者 專斷 關知 無關心 敏捷 機智 勇往邁進 耐久持重 意氣沮喪 禮讓 坐作進退 公德心 他山の石 傾聽 執着心 列強 形式 論文風の記事文 修辭 此の精神の表れる所……となつては……に赴き……となつては……とする……の者があれば……し……の者があれば……救済する 時に臨み髪に應じて宜しきに處し 勇往邁進して勝を一舉に制す 「他山の石を以て玉をみがくべし」傾聽に値する 七度倒れて八度起きる 語法 設疑的な斷案法——指摘し得てゐるやうである 傾聽に値する所が少くないであらう 徳義心の缺乏であらう(これは修辭的に見てよい) 一、冒頭、外國人の批評の批評 二、外國人の批評例 1、忠孝 義侠 榮辱の念——無分別、輕舉 2、相互扶助——依頼心 3、公共の爲の犧牲心——平素の冷淡 4、權利を無闇に主張せぬ——他人の權利を尊重せ

想	吟	味	注	要
<p>三、國民の覺悟</p> <p>5、臨機應變勇往邁進——耐久持重に乏し</p> <p>6、禮讓の心——公徳心の缺乏</p>	<p>一、忠君愛國の至情、家名尊重の精神</p> <p>二、客氣無分別、輕舉妄動の短所</p> <p>三、親族故舊間の厚情</p> <p>四、依頼心の増長、自立自營の精神の乏し</p> <p>五、犠牲的精神——危急存亡の時の決斷</p> <p>六、平素は甚だ公共的に冷淡な缺點</p> <p>七、自己の權利を無闇に主張せぬおだやかさ</p> <p>八、他人の權利を尊重せぬ、いゝ加減な思惑する欠点</p> <p>九、敏捷機智、勝を一舉に制す</p> <p>〇、耐久持重の力に乏し</p> <p>二、禮讓に厚い美点</p> <p>三、公徳心の缺乏</p> <p>三、自覺、覺悟、向上の精神と意氣</p>	<p>一、反省的な態度でお互にその缺點を見つめさせる</p> <p>二、道徳的に強制押賣りしては厭氣がさす</p> <p>三、こんな事ではいけない——といふ心を動かすのだ</p>	<p>第二十五課 ローマの舊都</p>	<p>ローマ帝國の往時を追懷せしめ、殘墟にたゞよふ詩趣</p>

章	構	想	鑑
<p>に雜然たり……時は諸共に都も絶えて跡なげん……亡びなば人の世界も共にまた 一部は明光に照らされ一部は暗黒に鎮され各層幾百の窓漏る光を以て縱横上下に明暗の紋様を織りなす莊觀實に名狀すべからず 勝誇りたる猛將勇士の意氣揚々と 野邊の千草の霜枯れて滿目蕭條たる時アルパの山の端を出づる月の靜かに殘墟を照らすを見れば誰か俯仰懐古の情を禁ぜんや</p> <p>語法……たるのみ 崩れん時は 跡なげん……もて たりしかを知るべし 誰か……禁ぜんや</p>	<p>一、ローマ舊都の略史</p> <p>二、現在のローマ遺跡の情趣</p> <p>三、フォラムの舊趾</p> <p>四、コロセウムの舊址</p> <p>五、カラカラ帝浴場の舊址</p> <p>六、高架水道の舊址</p>	<p>一、興亡常なき人の世を思ふ詠嘆</p> <p>二、廢城殘壁に臨んで往古を憶ふ切々の情</p> <p>三、フォラム遺址の果なき</p> <p>四、コロセウム往時の壯觀と太平を謳歌し全盛に酔ふた當時の國民——今昔の感慨</p> <p>五、巡禮者の歌の情趣——讚美の極</p> <p>六、コロセウム月夜の美觀</p>	

週七第

旨	間時	標準	文	語	句	文
<p>な味は、せる</p> <p>凡三時</p>		<p>地圖 廢城寫真類</p>	<p>世紀。版圖。驕奢。醉ひ。遺す。荒廢。壁人。邊隅。丘陵。寂し。埋没。覆る。石階。勇猛。礎石。格闘。容る。興行。ローマの市。紋様。化粧。並行。高架水道。山の端。殘墟。</p>	<p>版圖 柔儒 阻止 蹂躪 堂宇 諸官衙 邊隅 大厦 高樓 樞比 荒廢寂寞 巷 車馬絡繹 廢城殘壁 石梁 宏大 洛闊 興行 巡禮者 崩壞 高架水道 礎 蜿蜒 滿日蕭條 俯仰懷古</p>	<p>形式 文語、記文、文風の説明文</p> <p>修辭 四方の富を集めて壯麗善美萬世不朽の都府たるを誇る 驕奢に染み榮華に酔ひて柔惰風を成す いはゆる不朽の大都も何時しか荒廢の極に達す 昔大厦高樓の樞比せしあたり今は唯荒廢寂寞の巷たるのみ 車馬絡繹たる街路にあらずして——寂しき影をさめたる廢城殘壁なりとす 石梁の將に落ちんとして危く支へられたるあり屋壁の崩れて石柱のみ空しくそびえたるあり傾ける石階、覆りたる礎石所在</p>	

賞	注	要旨	所出	間時	文	字	語	句
<p>七、カラカラ帝浴場の宏大さ、當時の壯觀</p> <p>八、高架水道殘墟の空しさ</p> <p>九、低徊俯仰、追憶懷古の詩情總括的</p>	<p>一、年代及び大体の沿革を明かにする必要あり</p> <p>二、しかし歴史を知らせるのが主ではなく、低徊的情趣をその殘墟に發見せしめることが眼目である</p>	<p>第二十六課 大樹</p> <p>大樹老樹の有つ氣高き、その靈威とても言ふべきものに感じ入らせ、人の世をちつと見つめさせる</p>	<p>「經濟叢想」所載編輯見輔の文</p>	<p>凡二時</p>	<p>満悦。自叙傳。挿繪。捲れる。擁護。蒼空。心意氣。遊子。符。崇む。悠久。思慕。紛々。得喪。重疊。情操。巨杉。享々。推定。象徴。</p>	<p>詩藁 内心 満悦 自叙傳 嗟嘆 悠揚 孤塵 新教 民権 擁護 心意氣 讚美 想望 遊子 三槐堂 いほり 鬱々 悠久 思慕 紛々 得喪 威容 千波萬波起伏重疊 久遠 社會問題 經濟政策 現實問題 根抵 情操 享々として 推定 象徴</p>		

文	形式 記事文 修辭 大いに詩囊が肥えるくらゐのつもりで内心頗る満悦してゐるさ……あ、やはりだめださ嘆息した千年の風雨に打たれた高い木がすつくさ青空にそびえてゐる姿を見ると頭の下るやうな気がする 悠揚追らざる風格「玉城の東云々」 隈なく天に向つて伸びゆく巨木の姿には紛々たる眼前の得喪を……威容がある 千波萬波起伏重疊する治亂興亡の外に立つて久遠の生命を保存するであらう……さいひ……さいひ……さいひそれ等一切の根抵には大地にどつかさ根を下し大空にすつくさ伸上る大樹の力が無くてはならない 享々として雲に入る 語法 いほりせるさころ あ、よいか
構	一、自分の別荘の周囲の木立に對つての感想 二、大樹の靈威と人生 三、歐洲各地の大樹 四、北京の槐の追憶と現實問題に對する感想 五、土佐の巨杉、伊勢神宮神苑の大樹、日本の國民思想
想	一、輕井澤落葉松樹林の美とそれを眺めて満悦する氣持 二、千年の風雨に打たれた大樹——靈威 三、大樹の下に育まれた人達の偉大な姿
鑑	

週八第

賞	四、自分の落葉松樹林を悲觀する心持（第一段その對照） 五、歐洲各地の大樹と各國人の生ひ立、氣風、意氣 六、蘆東坡の心持 七、大地にごつかさ——偉大と不動の力 八、老樹の崇拜と人世の悠久 九、日本國民性と大樹 一〇、時事現實の諸問題に對する感想
注	一、文中の人物に就て簡単に補説する必要がある 二、大樹老樹を崇拜する心持から、想を時事現實問題に及ぼす行文の経路とその主想を明確につかませねばならない 即ち第四段が眼目 三、我等の村、町の大樹老樹を顧みさせるに絶好の機會である としてその樹下に一度は立つて仰ぎ見るべきことをすゝめて見たい
意	
要旨	關稅に關する一般的理解を得しめ、その精神の如何なるものなるかを悟らせる
時間	凡二時
文字	有無。權衡。低率。慎重。

第二十七課 關稅

句語	稅關 權衡 低率 奢侈品 贅澤品
文	形式 說明文 修辭 有無互に相通す
構	一、關稅の意義 二、保護關稅 三、生活必需品に對する稅率 四、國產保護と關稅（奢侈品、贅澤品） 五、從價稅と從量稅
吟	一、輸入品に課稅し輸出品に課稅せざる理由 二、保護關稅の意義 三、生活必需品に低率課稅をなす理由 四、奢侈品贅澤品に高率課稅をなす理由 五、國產費用と國民的自覺 六、從量稅と從價稅
注	一、本文の説明は凡て抽象的に概説されてゐるが、更に之を具體的に實例を示して吟味せねばならぬ 二、制度は單に其の運用形式のみを知ることが全部ではない 要はその眞の精神を悟ることにある
意	

(女子用) 第二十七課 園藝

園藝趣味を養ふ

時間	凡三時
文字	背戸。春菊。鉢。田家。富豪。盆栽。
句語	はする 鉢を入れる 田家 變種 丹誠 物さびた 東屋 花辨 儂雅
文	形式 記事文風の說明文 修辭 語法 別に注意するものなし 俳句を所々入れた引用法ぐらゐのもの
構	一、野菜栽培 二、果樹栽培 三、花卉栽培 四、盆栽、造園 五、園藝趣味の必要
想	一、「枝立て」、「句の持つ味 其他の句の情趣 二、蔬菜作りの楽しさ、容易さ 三、果樹栽培の楽しさ 果物の好もしさ 味さ美しさ 四、花卉栽培の楽しみとその美しさ 五、造園、盆栽趣味の優雅 六、「我が手」「我が腕」に作られたさいふ園藝の根本的な情趣
鑑	
賞	一、勤儉力行を目標に、勞働專一の生活をする人達には、優雅な趣味に生きるさいふ事が割合に少い園
注	

月 三

週 九 第

意	要 旨	間時	文	字	語	句	文
<p>藝趣味などはその缺陷を補ふに好適のものである 二、園藝は都鄙を通じて又老若男女を通じて行ひ得るものであり、大自然を相手とした最も高尙な趣味である その邊の理解を深からしめねばならぬ</p>	<p>清朝末期の紛擾と時弊を收斂改革し、清朝の國是を漸く安泰に保たしめた曾國藩の勳功とその偉大な人格を稱へさせる</p>	凡二時	<p>創業 網紀。緩み。宣宗。長髮賊。洪秀全。假りて。惑はす。喪。討す。慨然。武昌。蕩々。積弊。謁し。奏上。卓見。經世家。見識。司馬光。溢美。稀有。</p>	<p>創業 網紀 内外多事 煽動 喪 慨然 挺す 掃蕩 積弊 内憂 謁す 登庸 時弊 卓見 經世家 稀有 溢美の言</p>	<p>形式 口語、傳記文 修辭 ……以來こゝに二百年網紀漸く緩みて 一代の英傑曾國藩の蹶起したるは實に此の時なりき 慨然として志を決し身を挺して征討の事に従ふ 蕩々た</p>		

章	構 想	鑑 賞	注 意
<p>一、長髮賊の亂 二、清朝末期のト亂 三、曾國藩の蹶起 四、曾國藩の惡戰苦闘と賊亂の平定 五、曾國藩經世上の奏上と卓見 六、海外文明輸入と新施設 七、評言（人物）</p>	<p>一、大國紛亂の紛雜さ 二、親の喪中に慨然として立つ大決心とその心中 三、苦戰苦闘十二年——その間の勞苦を思ひやる 四、經世の卓見——清朝の滅亡と今日の支那（照應） 五、人物の偉大</p>	<p>一、簡單でもよいから清朝の興起と滅亡までの歴史を説明せねばならぬであらう 二、卓見に對しては「必ずや今日我等の見る云々」の心持で顧みねばならぬ 三、司馬光について補説を要す</p>	<p>三、三聖人の教と愛 四、宗教家の事業と愛 五、教育家の事業と愛 六、道徳家の事業と愛 七、愛の偉大な力 結合力の強さ</p>

(女子用)第二十八課 愛

旨要	間時	文 字	語 句	文 章	構 想	吟
<p>愛の心の貴き所以を悟り味は、せる</p>	凡二時	<p>乳虎。旅。雁。牧羊。景慕。仁。惠。哀憐。博く。究極。</p>	<p>燒野の雄夜の躑 さては 乳虎の怒 猥褻の愛 旅雁 尊長 宥恕 儀表 究極</p>	<p>形式 文語、論文風の記事文 修辭 冒頭の三行 親に對しては孝となり子に……夫婦の間には……兄弟の間には友となる 一世を指導して百代の儀表となる 萬物を生育する太陽の光に比すべく 究極する所……に歸す 語法 さては</p>	<p>一、禽獸にも愛の心はある 二、愛の根本義とその發露 三、宗教家、教育家、道徳家の事業と愛 四、愛の力の偉大さ</p>	<p>一、禽獸が我々に示す美しい愛情——色々の實例 二、愛の根本義</p>

味	注 意	要 旨	所 出	間 時	文 字	語 句
<p>三、三聖人の教と愛 四、宗教家の事業と愛 五、教育家の事業と愛 六、道徳家の事業と愛 七、愛の偉大な力 結合力の強さ</p>	<p>一、愛の心の美しき尊さを説いたものであつて、その反面に生ずる缺陷については何等説き及ぼして居ない 即ち論外のものとしてあるので、その邊に注意すること たゞ愛の力の偉大さ美しき尊さをたゞへうたはしめるのが本旨なのである 二、叙述の力強さに注目せしめよ</p>	<p>雨宿りに逃込んだ峠の茶屋のひなびた有様と全篇に滿ちた浪漫風な氣分を味ひ賞せしめる 夏目金之助「草枕」</p>	夏目金之助「草枕」	凡二時	<p>風託。小錢。敷居。活人書。眞向。一筆書。軒端。板庇。老婆。</p>	<p>林机 優長 高砂の能 活人書 剝拔盆</p>

第二十九課 峠の茶屋

第十週

文	章	構
形式 口語、敘事文 修辭 五六足の草鞋が寂しさうに底からつるされて風 託げにふらり／＼と揺れる ……半分程色が變つて ぬる 土の茶釜が銀の茶釜がわからない まるで自 分を狐か犬かのやうに思つてゐるらしい 一升樹程な煙草盆が閑靜にひかへて さぐろを巻い た線香 日の移るを知らぬ顔で頗る悠長に どうせ 誰か出るだらうとは思つてゐた ……ある ……ある …… …ある どうせ出るにはきまつてゐる びしやりさ心 のカメラへ焼き付いてしまつた この寫眞に血を通 はしたほご似てゐる 曇り勝ちな春の空を、もごか しとばかりに吹拂ふ山嵐 あらけつりの柱の如くそ びゆる	一、書出し(はつき出) 二、茶店の外見 三、茶店の内部の有様 四、中に入る 側の有様 五、店をがら空きにして平氣で居られる心持 六、婆さんの顔 七、問答 八、番茶 九、婆さんの寫生 一〇、籠の火	上田萬年「國語のために」 凡三時 大和魂。純正温雅。連鎖。隙。麗か。目のあ たり。 高潔勇健 純正温雅 鞏固 永遠的 連鎖 慶報 國 民的思考力 國民的感動力 頑是 わるふさげ ある は階級 反映す ないがしろ 須臾

第十週

想	鑑	賞	注	意	要旨	
二、展望	一、書出しの面白さ 二、草鞋の描寫のうまさ 三、籠の描寫の面白さ 四、難々牀机の描寫、漱石得意のユーモア 五、どうせ誰か出るだらう——面白み 六、婆さんの顔の表出 七、問答の巧さ 八、寫生する心持 九、天狗岩描寫のうまさ	一、全文どの一句を取つても鑑賞出來ぬものはない 鑑賞の項目に掲げたものは總括的なものだけである 實際取扱にはその積りで一言一句にも深い味を發見 するやうに努めさせることだ 二、漱石一流のユーモア、行文の工合、文人風な色彩 等は特に注意して味は、ること 三、草枕の全篇位は讀んで聞かせておくか、本文の前 後だけでも讀寫して示してやるのがよい	一、全文どの一句を取つても鑑賞出來ぬものはない 鑑賞の項目に掲げたものは總括的なものだけである 實際取扱にはその積りで一言一句にも深い味を發見 するやうに努めさせることだ 二、漱石一流のユーモア、行文の工合、文人風な色彩 等は特に注意して味は、ること 三、草枕の全篇位は讀んで聞かせておくか、本文の前 後だけでも讀寫して示してやるのがよい	一、優雅な日本語の美質 二、國語は日本國民の精神的血液——愛國心の發露 三、國語の尊さ 四、幼時の思出と幼時の言葉のなつかしさ、快さ 五、職業階級に於る特異な用語の面白さとその風澤 六、國語統一の眞精神 七、國民教育上の國語の地位	一、優雅な日本語の美質 二、國語は日本國民の精神的血液——愛國心の發露 三、國語の尊さ 四、幼時の思出と幼時の言葉のなつかしさ、快さ 五、職業階級に於る特異な用語の面白さとその風澤 六、國語統一の眞精神 七、國民教育上の國語の地位	國語尊重の精神は、愛國の精神に外ならぬといふ本文 の主意を悟らしめ、言語の靈感を感得せしめる

第三十課 國語と愛國心

出所	時間	文字	語句	文	章	構	想
上田萬年「國語のために」	凡三時	大和魂。純正温雅。連鎖。隙。麗か。目のあ たり。	高潔勇健 純正温雅 鞏固 永遠的 連鎖 慶報 國 民的思考力 國民的感動力 頑是 わるふさげ ある は階級 反映す ないがしろ 須臾	形式 文語体 修辭 精神的血液 統一せられ ……散亂せざるなり されば一朝事あらんか ……接せんか いやしくも 此の國に生れ、この國民たり、此の國民の子孫たる もの誰か此の光を仰がざるべき ねも言はぬ …… 情の上より ……理論の上より …… 語法 いやしくも 仰がざるべき ねも言はぬ 與へ ずんばやまず	一、國語と國民性 二、國語の尊さ 三、國語の魅力 四、言語の恩恵 五、國語と愛國心の啓培 六、國民としての國語に對する自覺	一、國語と國民性 二、國語の尊さ 三、國語の魅力 四、言語の恩恵 五、國語と愛國心の啓培 六、國民としての國語に對する自覺	一、優雅な日本語の美質 二、國語は日本國民の精神的血液——愛國心の發露 三、國語の尊さ 四、幼時の思出と幼時の言葉のなつかしさ、快さ 五、職業階級に於る特異な用語の面白さとその風澤 六、國語統一の眞精神 七、國民教育上の國語の地位

鑑	賞	注	意
一、優雅な日本語の美質 二、國語は日本國民の精神的血液——愛國心の發露 三、國語の尊さ 四、幼時の思出と幼時の言葉のなつかしさ、快さ 五、職業階級に於る特異な用語の面白さとその風澤 六、國語統一の眞精神 七、國民教育上の國語の地位	一、優雅な日本語の美質 二、國語は日本國民の精神的血液——愛國心の發露 三、國語の尊さ 四、幼時の思出と幼時の言葉のなつかしさ、快さ 五、職業階級に於る特異な用語の面白さとその風澤 六、國語統一の眞精神 七、國民教育上の國語の地位	一、小學校に於る最後の國語教材として最も力強い歴 史的の氣持を有つた名文である 小學校國語教育の 總締はこの一課にあると言つても過言でない その 心意氣でうんと力を注ぐべきものと思ふ 二、修辭の力強さ、論述の明快さ、よく／＼味は、せ ればならぬ 三、上田萬年の國文學上に於る功績をも知らせてやる がよいと思ふ	一、優雅な日本語の美質 二、國語は日本國民の精神的血液——愛國心の發露 三、國語の尊さ 四、幼時の思出と幼時の言葉のなつかしさ、快さ 五、職業階級に於る特異な用語の面白さとその風澤 六、國語統一の眞精神 七、國民教育上の國語の地位

